

ラブライブ！ ～9人の女神と1人の神～

テアイチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公、黒崎太一は小学校のころからの幼馴染みの高坂穂乃果となんやかんやで結婚を約束してしまう。しかし約束をした太一は、事故に遭い記憶を無くしてしまう。記憶を無くした太一は穂乃果になにも言わず愛知に引越してしまう。

それから6年後16歳になり高校生になった太一はひっそりと高校生活を送っていた、しかしある日太一が巻き込まれた事故の犯人が東京に居ることを知る。太一は犯人を探す手がかりを探すため東京の音ノ木坂学院に転入することを決める。

音ノ木坂学院に転入した太一はそこで穂乃果に再開する。しかし、今の音ノ木坂学院は廃校の危機にさらされていた、穂乃果は学校を守ろうと太一、園田海未、南ことりに、スクールアイドルになろうと誘う。

黒崎太一の新たな日常が今始まる

# 目次

## 第0章 プロローグ

第零話 全ての始まりはここから…

第1話 始まりは突然やってくる!?

第2話 新たなmyhome

第3話 転校生は男の子!?

誕生日特別編 凜誕生日記念

第4話 新たなmyclass

## 第1章 スクールアイドル始動

第5話 突然の知らせ

第6話 知らせの後

通算UA1000、2000突破記念 穂乃果とお留守番

第7話 スクールアイドル始めます!?

第8話 やるったらやる!!!

誕生日特別編 花陽誕生日記念

## 第2章 fastliveに向けて

第9話 グループ名は…?

第10話 作曲者は!?

通算UA5000突破記念 太一と海未のFuturestor

y

第11話 これが私達の曲!! 私達のグループ名!!

番外編 μ'sメンバーがぶちぐるやってみた

誕生日特別編 真姫誕生日記念

第12話 人前では恥ずかしい!?

第13話 ライブ直前!!

131 124 117 114 105 91 82 75 66 59 52 42 35 30 24 19 13 8 4 1

第14話 f a s tライブ!! 134

第2・5章 旅行へGO!!

第15話 買い物は女子の修羅場です!? 141

誕生日特別編 穂乃果誕生日記念 149

第16話 絶対にさせてくれないバスの中!? 152

第17話 恐るべし!?中華の辛さ 156

第18話 これぞ難攻不落の城! 161

第19話 君たちのバスシーンを見たい! 165

第20話 お土産争奪戦! 170

第3章 新メンバー!!

第21話 あの子を勧誘! 176

第22話 太一vs真姫 楽器演奏対決! 181

第23話 内気なあの子の本音 186

第24話 内気なあの子に勇気を! 191

真姫の初めてのトマト栽培!? 198

真姫の初めてのトマト料理 206

第4章 黒崎太一脱退!?

第25話 新たなスクールアイドル 212

第26話 殺人者はもう一人の俺? 217

第27話 偽物太一現る 222

第28話 危険な状態 226

第29話 帰りたい理由 232

第30話 再開 239

第31話 本来の目的 245

第32話 センターを決めなくちゃ! 255

## 第0章 プロローグ

### 第零話 全ての始まりはここから…

「はあ……はあ……まっつてよー」

一人の少年が荒い息を吐きながら走っている。

「もーおそいよー!」と少女が少年を待ちながら可愛いほっぺたを膨らませて言った。

「だって穂乃果が早すぎるんだよ!」

と少年は少し強気で言い返した。

「だからー早くしないと見れなくなっちゃうよー」

と穂乃果という少女が言った。

「わかった、わかった早くそれを見に行こうぜ」と少年はそう言う息を整えて歩き始め彼女に追い付いた。

「さあ、行こー」と穂乃果は、少年に手を差し出した、少年はその手を掴み、そこからは二人で手を繋ぎながら目的の場所まで歩いた。

少し歩いた所に少し開けた空き地に着いた。

その空き地は、住宅街から少し離れた所でありほとんど何も無いあるとしても、ド○えもんの空き地にある土管のような物しかない、そのため回りには家がないので空など辺りの景色を一望出来るのだ。

「着いたよーここを君に見せたかったんだ!」

と穂乃果は自慢するかのように少年に言った。

「わー」と少年は目をキラキラさせながらその景色を見ていた。

少年が見ていた景色とは、夕日だった。

夕日を見た穂乃果達は、その圧倒的な景色に目を奪われていたのだ。

少年の目線が夕日から穂乃果のほうに向けると穂乃果がなにか言いたそうにしていた。

「穂乃果…どうした?何か言いたいことがあったか?」

先に言葉を出したのは少年の方だった。

「え!何でわかったの?」

「何でって？だってお前何か言いたそうな顔しとったぞ」

「え！本当に!？」

「ああ本当だ」

「わかった、言うね……太一君」

「なんだ？」

穂乃果は自分の言いたいことを言った。

「あのね……穂乃果……太一君のお嫁さんになる！」

「なんで、またそんな事言うんだよ？」

「もう穂乃果は決めたの！太一君のお嫁さんになるって」

「何で俺なんだよ!？俺なんて勉強も出来なくてスポーツも出来ない何の取り柄もないのに、どうして俺なんだよ?」

それもそうだが何も出来ない太一に何で穂乃果はこんなことを言ったのか太一は分からないでいた。

「だってスポーツも出来なくて、勉強も出来ない太一君を助けてあげないと見ていられないんだよ!？」

太一は黙っていた。自分が好きだった人がまさか自分のことを好きだったことを。

無論太一の答えは……

「……わかった。わかったよ穂乃果、俺はお前をお嫁さんにする！」

太一は穂乃果に自分の思いを伝えた。

「うん！約束だよ！」

さっきまで涙目だった穂乃果の顔は明るく、いつもの笑顔に戻っていて、その笑顔に太一はすごく引かれていた。

「ああ約束だ！」

太一は小指を出した穂乃果もそれに続いて小指を出して指切りをした。

太一は穂乃果を家まで送り自分の家にかえっていたそのとき

ガシヤン

ぱ!

目がさめた俺は、夢を見ていたらしい。  
「またあの夢か」



終業式が終わり最後のHRも終わり帰ろうとしたとき

「おい、黒崎ちよつといいか?」

俺の担任でもあり、俺の面倒をみてもくれる水松が俺に声をかけた。

「なんすか?」

俺は、水松先生に質問するが、何も返答もなく俺は、水松先生に連れてかれた。

~~~~~\*~~~~~

「校長室?」俺が連れてかれたのは校長室だった。ドアは上品な木の素材でできており、いかにも校長室という雰囲気を出していた。

俺は、恐る恐るドアをノックし校長の「どうぞ」と言う声を聞きドアを開けて部屋に入った。

部屋に入った俺は、部屋の真ん中にある高級そうな黒の椅子に座り、校長と水松先生が前にすわった。

沈黙の空気が部屋に漂う中先に口を出したのは水松先生だった。

「実はな黒崎、お前を呼んだのは、二つあるひとつ目はお前の成績についてだ。」

先生は俺に校長室に呼んだ理由を話した。

俺は、驚いた記憶を失ってから成績について呼ばれたことはなかった。俺は、記憶を失う前は、バカだったらしいが、記憶を失ってから何故か勉強も出来てスポーツも出来るようになったのだ。

「俺、成績で何か行けないことありました?」

「いや、君の成績ではダメな所はない。」

「じゃあなんで!?!」

「君の成績を見たんだがこの学校では簡単すぎるんじゃないか?」  
それもそうだがこの学校に入学してきたのだから。

「まあ……簡単ですが。」

「そこでだ!黒崎転校して見ないかと思って呼んだ、どうだ?」  
校長が俺に転校しないかと提案した。

「転校は良いですけど知つてのとうり俺にはやらなきゃいけないことがあるんです！」

俺は、やることがあるため転校することは出来ない、そのため俺は、反対した。

「君の転校したくない理由はしつている」

校長は俺の転校しない理由をいった。

「君のお父さんのことだろ？」

「そうです」

俺の親父は有名な学者だったらしく日本中いや世界中の大学に行っていたらしいが案の定俺の事故を境に行方が分からなくなってしまうた。だがわかつたこともある。この事件には親父が関わっており、その親父がここ愛知に居ることがわかつたのだが、未だに発見できていない。

「実はなお前のお父さんと会つた人がいるとわかつたんだ。」

「その情報は確かに!？」

ここ数年間手掛かりすらつかめなかつたがまさかこの頃に情報が入つてくるなんて！

「ああ！私の知り合いで東京の音ノ木坂学院の理事長から聞いた話だ。」と水松先生がいった。

親父がいる場所が東京に居ることがわかつたため俺は、転校することをきめた。

「そこでだ、黒崎！お父さんを探すついでに音ノ木坂学院に転校してこい！」と校長が俺にいった。

「はい！俺、東京にいつてきます！」

俺は、校長に東京に行くこと伝えて校長室を出た。

これから家に帰つて引越しの準備だ、これから忙しくなるけどがんばるぞ！

「おい黒崎！」

水松先生が俺を呼んで俺は振り向く。

「言うの忘れたが音ノ木坂学院は、女子高うだから男はお前だけだぞー。」

水松尾がニヤニヤしながら言ったその顔が少しでいらつときた。  
え！じよしこう？

「えー!!!女子高!!!」

俺の声は学校中に響き渡った。

## 第2話 新たなmy home

引っ越しは、したこと有るだろうか？ある人は分かるかも知れないが引っ越しはクソめんどくさい。家族がいる人は、作業がスムーズに進むのだが、一人でやる人はすべての物を整理などをしないといけないので時間がかかり掛かってしまうのだ。

学校で東京に行くことを決めた俺は、家に帰ってすぐに引っ越しの準備を進めた。

まず、先に本などを段ボールに積んで、お皿なども片付けた、一通り荷物を整理して、後は、冷蔵庫、ベッド、テレビなど大きな家具はそのままだが、ほとんどの物は引っ越しの準備をおわらせた。

作業を終わらせた時はすでに夜の10時を過ぎていた。

無理もない、帰ってからですと何も食わず黙々と準備を進めていたため全く時間には気づかなかった。

明後日は朝から引っ越しセンターの人たちが来るため俺は、軽い食事をして、風呂に入りベッドに入ってすぐに眠りについた。

~~~~~\*~~~~~

ブーツ、ブーツとスマホの目覚ましがり鳴り俺は、目が覚める俺は、いつもどうりリビングに向かった。

引っ越しの準備をある程度終わらせていたためリビングには大きい家具以外片付いているから少しながら変わった雰囲気になっていた。

俺は、朝食に好物のカレーパンを食べ、残りのやり残した物を片付け始めた。

「おわったー」ついに引っ越しの作業を終わらせたがまだ午後1時位だったがとてつもなくらいの睡魔に襲われたため、俺は、風呂に入って直ぐに寝ようとした時……

ブーツブーツとスマホが鳴り響く

「誰だ？」スマホを開いて誰からの電話か見たが『非通知』と書かれて

いた。

普通なら無視しとくが俺の場合、親父の事かもしれないので俺は、大抵出てしまう。

「もしもし?」先に俺から話を掛ける。

「もしもし……黒崎太一くんによろしい?」

「はい、そうですけど?」

相手は清楚な女性の声だったが誰か分からなかった。

「私は音ノ木坂学院、理事長の南です。」

「音ノ木坂学院の理事長!失礼しました!」

まさかの相手の女性はある音ノ木坂学院の理事長だった。

「いいのよ、うちに転入してくるのだから、前もってしようと、だめだった?」

「いえそんなこと」

「ありがと、では新学学期の4月7日学校に来たらず、理事長室に来てください。」

「分かりました失礼します。」

……まさか音ノ木坂の理事長から電話が掛かってくるなんて!

まあでも結構優しそうな人だったな。

電話を切つて俺はすぐ風呂にはいつて眠りに着いた。

~~~~~\*~~~~~

翌朝、俺は起きて朝食を食べた後、引っ越しセンターの人たちを待った。

30分ほどしたら引っ越しセンターの人たちがやって来て家具をほぼ全部持つていった。

後は、俺が引っ越すだけだ。

家を出た俺は家に向いて一礼をして6年間俺と共に生きてきた家に別れをつげ家をあとにした。

東京までは地元の駅からローカル鉄道で名古屋に行き名古屋からは新幹線に乗り換えて東京にむかう。

「じゃあな!愛知!」

俺は6年間住んできた愛知に別れをつけ名古屋をあとにし東京へむかった。

~~~~~\*~~~~~

愛知から新幹線に揺られて2時間、俺は、ようやく生まれ故郷の東京にかえってきた。

「やっと着いた〜」

新幹線を降りそこで体を伸ばしながら言った。

記憶を失っていたせいで何も分からないが何故かわからないが懐かしい気持ちに取り付かれた。

東京駅着いた俺は、電車に乗り換えて数分ご新たななる我がmyhomeのある秋葉原につき改札をでる。

駅の外には満開の桜が植えてあり、春を彩っており愛知の桜とは一味違った。

駅から数分歩くと俺の新たな家が見えた。

その家は昔、母さんが暮らしていたらしいが数ヶ月しか住んでいないのでほとんど中は綺麗らしい。外見は洋風と和風の組み合わせであり前の家と変わりはない。

30分ほどしたら引越センターの人たちが到着し作業を始めた。

リビングにテレビやソファ、机椅子を置き、自室にベッドダンスなどを置いたが一人で暮らすため3室が空室になってしまった。

引越しも終わり俺は、近所に挨拶に行く、これは引越したときにしなればいけないので引越すするやつは覚えとけよ！

俺の家の両隣は小さいオフィスビルなので家の前にある和菓子やと民家が繋がったような家に行く。

お土産は愛知県民大好き味噌だしかも八丁味噌といって結構有名な味噌をお土産にしたのだ。

なぜ、味噌？愛知はお土産っていうお土産がないんだよ！

俺は、その和菓子屋へ向かう、和菓子屋の名前は【穂むら】と書かれており俺の家同様、洋風和風の合わさった家だった、お店が和風で、

家の方が洋風の建物だ。

ガラガラ

横開きの扉で俺は中に入った。

中は和菓子屋なので和菓子が沢山あった。

中に人が居なかったので俺は、「すいませーん」と言っただけで待った。「はいーい！」と元気な声が聞こえた。返事をした人が来る前に俺は、髪の毛、服装を整え直した。

「はいはいー！どれにしますか？」

出てきたのは俺と同じ歳っぽく髪は明るい茶髪？で白い服を着ていた。

「いえ、注文じゃなくて、前の家に引っ越してきた。黒崎太一です、よろしくお願いします。」

俺は、お土産の八丁味噌を渡した。

「そうなんだ！よろしくね！」

少女はそう言った。

「あ！名前言うの忘れてたね、私は高坂穂乃果！ここの娘だよ！」

「穂乃果か、いい名前だね。」

「ありがとー！」

穂乃果は笑顔になりその顔はすごく可愛かった。しかしただお土産を渡しただけでは相手に失礼なのでこっちゃんも和菓子をかおう。

「せっかくだし、何か買おうかな？」

「ほんとー！おすすめはこの穂むまんだよ！」

「じゃあそれをいただこうかな！」

俺は、穂むまんと言う和菓子を買った饅頭に『ほ』と書かれていた、ここのオリジナル商品なのだろう。

「ありがとうございます！」

「長居するのも悪いからそろそろ失礼しますわ！」

「これから、よろしくね！」

穂乃果は手を降って俺を送り俺は、穂むらをあとにした。

~~~~~\*~~~~~

夜俺は、考えていた

高坂穂乃果、何処かで聞いた気がした、だが思い出せない。忘れてはいけないような気がする……

~~~~~\*~~~~~

その頃、高坂宅

「黒崎太一君……誰だったけな？」

穂乃果も考えていた。

~~~~~\*~~~~~

「まあいいや明日は始業式だからもう寝よう」と

明日はついに音ノ木坂の始業式なので俺は、寝ることにした。

### 第3話 転校生は男の子!?

朝、起きた俺は、朝ご飯を食べて音ノ木坂学院の制服を着た。

制服の色は上が青のブレザーに中に白のカッターシャツ下のズボンも濃い青色でネクタイは2年生の色である赤色で、着心地はよく着やすいと思う。

登校初日のため、理事長室に行かないといけないので俺は予定の30分前に家を出た。

穂乃果の家の前を通らなくては行けないので通ると、一人の女性が水まきをやっていた。

「おはようございます」と俺は女性に声をかけた。

「あら、おはよう」と女性は声を返した。

家の前で水まきをしていたのでこの人も穂むらの人だから一様挨拶はしておく。

「昨日引越してきた、黒崎太一です。よろしくお願いします!」

「ああ!穂乃果から聞いたわ。私、穂乃果の母です」

「穂乃果のお母さん!? 失礼しました!」

まさかの話していた相手が穂乃果のお母さんだったなんて初耳だわ!  
会ったこと無いから当たり前だけど。

「いいのよ、いいのよ穂乃果は、まだ寝てるから起こさないよ、いつてらっしゃい」

「どうもありがとうございます。行ってきます!」

優しい穂乃果のお母さんに送られて俺は、穂むらを後にした。

音ノ木坂高校は家から歩いて20分ほどで着くまだ登校時間の30分前だからあまり他の生徒が居なかった。

俺は、かねてより初登校の日に理事長室に来いと言われていたので俺は理事長室に行った。

まだこの学校の理事長とは電話でしか話したことが無いためどんな人かはわからない。

理事長室についた俺はドアをノックした。

「黒崎太一です」

「どうぞ」

と声が聞こえたので俺はドアを開けて中へ入る、そこには音乃木坂の理事長が椅子に座っていた、俺は座っている理事長のところへ行き挨拶する。

「愛知から来ました、黒崎太一です。よろしくお願いします！」

俺は深く一礼した。

「初めての登校だったけどどうだった？」

「はい！何事もなく、順調に登校することが出来ました」

「そう、それなら安心したわ、これからこの学校で色々あるけど頑張つてね」

理事長はそう言って俺を激励した。なんて優しい人なんだ。

「はい！頑張ります」

「始業式であなたを紹介するのでその時何を喋るのか考えておいて下さいね」

「え、まじすか」

俺は始業式の開始時間まで音ノ木坂学院の生徒の前で言う挨拶を学院の客室で考えていた。

~~~~~

一時間前

穂乃果は外で母の 喋り声で目が覚めた。しかし季節は春だが、朝はまだ寒いので布団から出たくないため、穂乃果はまたウトウトしていたとき、

「穂乃果！もう朝よ！起きなさい！」

と母の声が聞こえた。

「もうーわかったよー！」

穂乃果はベッドから起き上がり下に降りてキッチンに向かった。

キッチンには穂乃果のお母さんが朝食の準備をしていた。

「早く済ませちゃいなさい」

穂乃果のお母さんが言った。

~~~~~\*~~~~~

「そーいやお母さん、さつき外で誰と話してたの？」

「誰って？ 家の前に引越してきた黒崎君よ」

「えー！お母さんさつき会ったの!？」

「ええ、さつき会ったわ。初めての通学だからって早めに家を出たらしいわ。」

「何処の高校か聞いてないの？」

「それは聞いてないわよ。でもこの辺の学校じゃないと思うわ、見たことない制服だから。」

と穂乃果のお母さんは言った。

「そっか……」

と残念そうに穂乃果は朝食を食べ始めた。

朝食を食べていると妹の高坂雪穂がやって来た。

「お姉ちゃん、何でそんな事聞いているの？」

「いや!? ベつに何も無いよ!」

穂乃果と雪穂は二歳違いの姉妹で姉の穂乃果より妹の雪穂の方がしつかりしていて間違われることもあるらしい。

「本当は黒崎さんのこと気になってるんじゃないの？」

「そんなわけないじゃん!」

雪穂の質問を穂乃果は否定した、このように姉妹喧嘩は日常茶飯事なのだ。

「穂乃果! 早く行かなくていいの!？」

「え? うわ! もうこんな時間!? 行つてきます!」

穂乃果は急いで服を着替えて走って家を出た。穂乃果はなぜ走っているのかというと幼馴染の二人と待ち合わせする約束だったのだが穂乃果は忘れていて思いだした時には時間ギリギリだったのだ!

「うわー!? 遅刻するー!」

穂乃果は全速力で走って待ち合わせ場所にむかった。

~~~~~

~~~~~\*~~~~~

「はあ……始業式なのに穂乃果は遅刻ですか？」

スラーつと青く長い髪の毛の少女が言った。

「また、怒ると穂乃果ちゃんまた膨れちゃうよ？ 海未ちゃん？」

優しい声をだしている少女がいった。

「はあ……。そう言うことを言っつて穂乃果を甘やかしてはいけません、ことり」

と青髪の少女が言った時に穂乃果が走ってきて二人の所に止まった。

「ごめーん、待った？ 海未ちゃん、ことりちゃん？」

「また寝坊ですか、穂乃果？」

「ちがうよ！ さっきお母さんと家の前に引越してきた黒崎君の事を話していたら、こんな時間になっちゃったんだよ！」

「そんなに威張るんじゃないやありません！ てゆうか誰なんです？ その黒崎君と言う人は？」

「そうそう、誰なの穂乃果ちゃん？」

二人が穂乃果に質問する。

「黒崎くん？ この前穂乃果の家の前に引越してきた人だよ！ 穂

乃果と一緒に16歳でどっかの高校に通ってるんだって」

「そうなんですか。もしかしたら穂乃果の家に行くときに会うかもしれませんね」

「ことりも会ってみたいかも♪」

そうやって話していると気づいたら 音ノ木坂学院に着いていた。

穂乃果達は校門に入り桜の木のトンネルを抜け校舎の入り口の前に向かった。

入り口の前にはクラス表が貼ってありそれを見て今後一年間一緒に勉強する仲間のいる教室に向かうのだ。

穂乃果達、2年生は2クラスしかないと彼女達が一緒にクラスになるのは2分の1の確率なのでそうそう別れない。

「やった！ また3人一緒にクラスだ！」

「やったね！ 海未ちゃん♪」

「はい、そうですね！ ……でも？」

嬉しがっていた時に海未が何かに気づいた。

「ん？ どうしたの、海未ちゃん？」

「この紙を、見てください」

「ん？」

穂乃果とことりは自分達のクラス表を見た。

「去年までは2クラスとも32人でしたが、今年は、私達のクラスだけ33人になってるんです」

「ほんとだ！」

「何でだろ？」

穂乃果とことりは考えたが何も浮かばかった。

「まあいいや、早く教室いこ！」

「そうだね！行こ、海未ちゃん♪」

二人は海未を引っ張って自分達の教室に向かった。

「えーっと、穂乃果の席は？ ここだ！」

「やった！ ことりは穂乃果ちゃんの後ろだよ♪」

「はあ……。今年も穂乃果の近くのですね」

穂乃果達は自分の席に座った。少し喋っているとチャイムが鳴り皆が席に着く。

「穂乃果の隣は誰なのですか？」

「さあ？ 誰なんだろう？」

「お休みしてる子かな？」

本来そこには俺が座るのだが俺は客室に、居るのでもちろんそこにはいない。

「先生ー！ 穂乃果の席の隣は誰なんですか？」

「隣？ ああそれは後でのお楽しみだな」

「おたのしみ？」

「まあとにかく始業式が始まるからお前ら、早く講堂へ行け！」

「はい」と全員教室から出でて講堂へ向かった。

講堂に着いた穂乃果達は、それぞれ座席に座って理事長の言葉を聞く。

「皆さん、進級、入学おめでどう皆さん……」

理事長の言葉が始まった。

すでに、おれは舞台裏で準備していつでも準備万端なのだった。

「……と言う訳なので皆さん悔いのない一年間にしましょう。」

理事長の言葉が終わりついに俺の出番になった。さっきまで何ともなかったがいざ本番となるとすごく緊張するのは俺だけだろうか？

「早速ですがこの音ノ木坂学院に初めての男子生徒が転入することになりました。どうぞこちらへ」

・  
・  
・

「え！ 男の子!?!」

「男子なのですか!?!」

「誰なんだろう?」

俺は舞台の真ん中に止まり全校生徒のまえで自己紹介をはじめた。

「黒崎太一です。よろしくお願ひします……」

「なんで……? 黒崎君が?」

穂乃果は俺の登場に驚いていた。



ちやつたにや。

でも何と、凜より先に太一君が待つてたのだ！

「おっ？・凜！」

凜に気づいた太一君が大きく手を振っていたから凜は走つて太一君に抱きたいたにや！

「うわっ！・凜！急に抱きつくなよ！」

「えへへ」

だつて太一君を見るとつい抱きついちゃうんだにや！

こうやつて抱きついていると暖まつて気持ちよくなるにやー

「んじや行こうか！」

「いくにや！」

太一君が言つてたラーメン屋は集合した駅から歩いて15分ほどで着いちやうらしいにや。

「太一君、そのラーメン屋さんはどんなラーメンなの？」

「それは着いてからのお楽しみだな。」

「どんなラーメンかにや？醤油？味噌？豚骨？そう考えると早く食べたいにや！」

15分歩いてついに新しいラーメン屋さんに着いたにや！

「ここが新しく出来たラーメン屋、台湾ラーメン（ワンタイ）だ！」

「台湾ラーメン！凜あんまり食べたことがないからどんな味がするか楽しみだにや！」

早速凜達は中に入ってカウンター席に座つてメニュー表をみる。

「へー台湾ラーメンって色んな辛さがあるんだね？」

「ここのお店は人によって辛さを選べるぞ！」

「太一君は来たことあるの？」

「ここのお店は来たことないけどこのお店は愛知県から発祥した店だから愛知県に居たときはたまに何回か食べてたよ。」

「そうなんだにや、じゃあ太一君のオススメはなんにや？」

「そうだな？俺のオススメは台湾ラーメン辛さレベル2

2つてやつかな？・あんまり辛くないから食べやすいし、麺を楽しめるからな。」

「じゃあ凜もそれでいいにや！」

「じゃあ台湾ラーメン辛さレベル2を2つで。」

「あいよ！」

ラーメンを作っている間に凜は太一君と色々しゃべったにや。

「それで、真姫ちゃんが、」

「はははは！それは笑うわ。」

「へい！台湾ラーメン2つです。ごゆっくりどうぞ！」

ついに台湾ラーメンがきたにや！どんな味かが初めてのわかるにや！

ズルズルズル

「どうだ？」

「うまいにや、うますぎるにや！」

にやーにやーにやーにやーにやーにやー！最初は辛いけど後から少し甘くなるこのラーメンは不思議だにや!?

「それは良かった、じゃあ俺もたべよ。」

それから凜達は美味しくてなにも喋らず黙々とラーメンをたべたにや！

「ぶあ、ごちそうさまだにや！」

「んじゃ会計を済ませますか」

「えーつと？幾らかにや？」

「いいよ今日は俺の奢りだ！」

「ほんと！ありがとうにや！」

まさかの太一君がお昼を奢ってくれて会計を済まして外に出たら、ピコン！と太一君の携帯がなって太一君は携帯をだして内容をよんでいた。

「ん？ちよつと待ってや、なになに穂乃果が来てくれってよ。」

「穂乃果ちゃんが？行ってみるにや！」

穂乃果ちゃんが 呼んでるようなので凜たちは穂乃果ちゃんの家に向かったにや。

~~~~~

~~~~~\*~~~~~

穂乃果ちゃんの家に着いた凜達は穂乃果ちゃんの部屋に入るそしたら、

パン！パン！

「凜（ちゃん）お誕生日おめでとう！」

「えー！何て凜の誕生日しってるの？」

「私が皆にいったの」

「花陽ちゃん、ありがとう！」

まさか花陽ちゃんたちが凜の誕生日を祝ってくれるんだにや！

「んじや誕生日といったらプレゼントだよな！はい、俺からの誕生日プレゼント！」

「なになに？わあ！猫の時計にや！ありがとう太一君」

「気に入ってもらって良かったわ」

「次は穂乃果からのプレゼント！」

「なにかにや？すごいにや！猫の形をしたお饅頭だにや！ありがとう穂乃果ちゃん！」

「えへへ、結構力作だったからね！」

「次は私と花陽からよ」

「にや！にや！にや！猫のぬいぐるみ！ふわふわして気持ちいにや！ありがとう真姫ちゃん、かよちゃん！」

「どういたしまして」

「次は私ですね、はい」

「うわー！綺麗な着物にや！ありがとう海未ちゃん！」

「どういたしまして来年の初詣に着てください。」

「次は私と希よ」

「うおー！キラキラしたネックレスだにや！ありがとう絵里ちゃん、希ちゃん！」

「どういたしまして」「似合ってるで凜ちゃん」

「最後はにこととりよ！ジャーン」

「美味しそうなケーキだにや！ありがとう、にこちゃん、ことりちゃん」

「よかった♪喜んでくれて。」「にこの誕生日の日にお返ししなさい

よ。」

「よしプレゼントも渡したしパーティーを始めるか

！」

「ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデートゥーユー、  
ハッピーバースデーディア凜（ちゃん）ハッピーバースデートゥー  
ユー！」

「では！改めて凜（ちゃん）お誕生日おめでとう！」

「ありがとうにあ！凜人生で一番嬉しいにや！」



「紹介するわ、あなたのクラス2年A組担任の山田博子先生よ」  
「君が黒崎太一か？一年間よろしく頼むぞ！」

山田先生は右手を出してきたので俺も右手を出して握手をした。

「早速だが時間がない、直ぐに教室に行くぞ！」

「はい。」

「それじゃ頑張つてこの学校の生活に慣れてね。」

「はい！お世話になりました！」

そう言つて俺は理事長に一礼し山田先生と一緒に出て理事長室を後にした。

「黒崎つて呼ばせてもらうぞ。」

「どうぞ、、、」

移動中、沈黙した空気が流れたが、先に喋つたのは山田先生だった。

「お父さんを探してるんだつて？」

「!?、なんでそれを？」

「だつて情報教えたの私だもん」

まさかの重大発言！父さんが東京にいる情報を流したのは、山田先生とは思つてもなかったし、てつきり理事長が知つていると思つた。

「え！山田先生なんですか！それで何処にいるんですか、父さんは？」

俺は先生に近づきそれを聞く

「まてまて、今は何処にいるかは、私はしらんぞ！」

「ちよつとそれはないですよ。」

「しやーないだろ？」

「じゃあ、最後に見たのはいつなんですか？」

「最後に見たの？ あーそういえば、去年論文の発表会に行った時に偶然会つてな、私が大学生の時の教授が黒崎先生で、私は大学生の時の教授が黒崎教授で、その時は何かの研究をしているって聞いたな」

山田先生は知っている父さんの情報をすべて話してくれた、父さんが去年まで生きていたということが一番大きい情報だった。

「ありがとうございます。教えてくれて」

「いいよいいよ。さあここがお前の教室2年A組だ！」

そうこう話していたら教室についていた

教室の中では声が聞こえていて、どうやら始業式で俺の事について話しているからし。

「んじゃあ、お前はここで待っていてくれ、私が呼んだら入ってきて」「わかりました。」

そう言うのと山田先生は先に教室に入っていた。

「よおーしHR始めるぞー!」

山田先生が入ったとたんに騒がしかった教室は静かになる。

「先生! やっぱり、ここの席はさっきの男の子なんですか!？」

穂乃果は山田先生に質問する。

「ぞうだ、じゃー入ってきてくれ」

さっき言われたとうり俺は教室に入り教卓の後ろに立った。

「んじゃ自己紹介を頼むわ」

「愛知から来ました黒崎太一はです、よろしくお願いします。」

「よし自己紹介も終わったし席につけよ、席は……」

山田先生が俺の席を言おうとしたとき。

「ここだよー!」

穂乃果がてをあげて呼んだ。

「そこだわ、高坂の隣」

「ああわかりました」

俺は、そう言うのと穂乃果の隣の席に座ってHRが始まった。

~~~~~\*~~~~~

『キーン、コーン、カーン、コーン』

「ん? もう終わりか……話の続きは次の時間に話す。解散!」

おおざっぱな終わりかただなおい! と突っ込みを言いたいがそんな場合ではない!

なぜなら隣の穂乃果がジト目でこっちを見てくるのだ。

「あの……穂乃果さん?」

俺は、機嫌が悪いのかを確かめるべく穂乃果の名前を呼んだ。

「黒崎君!」

「はい……！」

穂乃果は急に大きな声で俺を呼ぶ。

「どうして言ってくれなかったの!?ここに転入すること!」

「あれ……言ってなっただけ?」

「言っていないよ!」

昨日のことだから忘れてしまったが、まあ怒ってるってことは分かった。

「ごめんなさい……」

「もう……!」

俺は、謝ったが穂乃果は許してくれなかった。

「穂乃果!謝っているんだから許してあげなさい!黒崎君が困ってますよ!」

「許してあげようよ穂乃果ちゃん」

「わかったよ、海未ちゃん、ことりちゃん」

海未とことりに助けられ穂乃果は俺を許してくれた。

「自己紹介が遅れました。私は園田海未といます。以後よろしくお願ひします。」

「私は南ことりよろしくね♪」

「さつきも言っただけど俺の名前は黒崎太一、太一って読んでくれ。」

「わかりました。太一」

「わかったよ太一くん♪」

二人の自己紹介も終わったが、南と園田どっかで聞いたことがある名前だな。

「海未って名字が園田だったよな?」

「はい……そうですね?」

「いや、俺の家の近くにあった覚えがあるだが」

「もしかして、園田道場では?」

「そう!それだ、でも何の繋がり?」

「繋がってます?私の家ですよ!」

「えー!そうなの!」

「私の父が剣道の家元、母が華道の家元なので」

「へー！そんなんだ！」

まさかの海未の家がそんなに凄いところとは思ってもなかった。

「更にね太一くん！海未ちゃんは弓道もやって何回も大会に優勝してるんだよー！」

「そんなに凄いのか！」

「そんなに誉めないでください、穂乃果」

海未が弓道でそんなに強いとも知らなかった。

ことりの名字が南だから理事長と一緒にの名字だから何か関係が、ありそうだ。

「ことりの名字は南だから理事長と何か関係があるのか？」

「理事長？ああお母さんのことだね♪」

「お母さん!？」

「知らなかった？」

やばすぎやろこの二人は少し気を付けてないと、

「穂乃果で驚くところは無いの？」

「穂乃果のことで驚く事なんてないぞー！」

「えー！穂乃果にも驚くところがあるよ！」

「へーどんな？」

「それは、それは、」

「無いようですね。」

「そんなことないよ！」

そうやって話しているとチャイムが鳴りHRが始まった。

~~~~~

「、、と言うことだから、明日から通常の授業だからな。では解散！」

おおざっぱ過ぎるが突っ込むのが疲れたのでそこまで思わず、俺が帰ろうとした時。

「太一君、一緒に帰ろ！」

「いいぞ！帰るか、海未とことりは？」

「海未ちゃんは部活にことりちゃん保険委員の集まりだって」

「そうか、そんじゃ帰るか」

「うん！」

くくくくくく

帰り道俺と穂乃果は喋りながら歩いていた。

「どうだった、太一君今日1日？」

「どうだったって、ビックリすることが多過ぎて疲れたわ」

「穂乃果も驚いたよ！まさか太一君が転校してくるなんて思ってもなかったからねー」

「俺もまさか穂乃果が 音ノ木坂学院に居るとは思わなかったわ」

そう話していると気づいたら家に着いていた。

「じゃあ穂乃果明日な！」

「太一君！明日一緒に学校行かない？」

「ああ、いいぞ明日な！」

「うん！明日ね」

俺は穂乃果と明日の約束をして自分の家に入った。

明日1つの知らせが俺達の運命が、大きく変わることを俺達はまだ知らない。

くくくくくくくくくくくくくくくく\*

# 第1章 スクールアイドル始動

## 第5話 突然の知らせ

### 前回のラブライブ!

父さんの行方を探しに東京の音ノ木坂学院に転入した俺は、高坂穂乃果、園田海未、南ことりと出会い女子高生活の第一歩が始まった。

初めて音ノ木坂学院へ登校した日の帰り道、俺は穂乃果に次の日一緒に行こうと言われたため、俺は朝少し早く起きて、朝食を食べて着替えて、穂乃果を迎えに行く。

といっても穂乃果の家は俺の家の前にあるので、迎えに行く必要があるのかと思ってしまう。

俺が家を出ると穂乃果の家の前にすでに海未が待っていた。

「よう、海未おはよう」

「あつ、太一おはようございます」

海未は俺が急に挨拶したのでビックリしていた。

「何で驚くんだよ?」

「いえ、太一の家が穂乃果の家の前にあったことを忘れていまして、急に挨拶されたので」

「そういうことか」

「はい」

海未は俺の家が穂乃果の家の前にあるのを忘れていたらしいが、なぜ海未は穂乃果の家の前にいるのだろうか?

「そーいや海未は何で穂乃果の家の前で?」

「まだ寝ている穂乃果を起こし行く所です。」

「そーなのか」

「太一はなぜ穂乃果の所へ?」

「俺か?俺は昨日穂乃果と一緒に学校でに行こうと誘われたから穂乃果を迎えにと」

海未は寝ている穂乃果を起こしに来たという。

「はあ、；； 約束をしているのに寝坊するとは、；；、」

「海未はいつも穂乃果を起こしに来ているのか？」

「はい、いつもLONEを送って起こしているのですが、たまに今日みたいな起きない時があるのでそういう時は私が穂乃果の部屋へ行つて起こしに行きます。」

「んで今から行こうと？」

「はい、そうですが」

「俺は外で待つてるわ」

「そうですね、では言つて参ります」

そういつて海未は穂乃果の家へ入つていった。

しばらくして

「穂乃果！太一と一緒に学校へ行く約束をしといて寝坊とはどうゆうことですか！」

「ちがうよ海未ちゃん！穂乃果今から行こうと思つた所だよ！」

「では、なぜパジャマ姿なのか？」

「うう、；；」

「だいたい、あなたは最近、；；、」

穂乃果の家から海の怒っている声が聞こえた。

「うわー穂乃果も大変だな、；；、」

そう思いながら俺は外で15分くらい海未に怒られている穂乃果を待つていた。

15分すると穂乃果と海未が出てきた。

穂乃果は海未にコツテリ絞られて落ち込んでいた。

「気にすんなよ穂乃果、俺は別に怒つてないぞ」

「本当？」

「ああ！」

「ならよかつたよ！」

穂乃果は俺が怒つてないのを知ると落ち込んでいた顔がいつもの笑顔に戻つていた。

「春に入って暖かくなつたからうつかり寝過ごすことは俺もあるぞ！」

「だよね！穂乃果も同じで暖かくなつたから寝過ぎしちゃんだよ！」  
「だから、駄目なのです！だいたい穂乃果は……」

「おいおい大丈夫なのか？ことりを待たせてるんだろ？」

海末が穂乃果にまた説教をしようとしていたので俺が話を変える。

「そうだよ海末ちゃん！ことりちゃんが待っているんだから！」

「まったく、仕方ないですね……では、この話はまた今度」

「うう……」

「ドンマイ穂乃果」

「助けてよ！」

「俺には関係ないからなー」

「あなたもですよ、太一」

「えー！何で!？」

「あなたは穂乃果と同じ傾向があります。あなたを直さなければ、穂乃果も直りませんから」

「「えーそんなー!！」」

そうこう話ながら歩いていくと先でことりがまつていた。

「あつ、穂乃果ちゃん！海末ちゃん！太一くん！」

ことりは俺たちに気付き手を振っていた。

「おはよう、ことりちゃん」

「おはようございます、ことり」

「おはよう、ことり」

「あれ？太一くんと、穂乃果ちゃん元気ないね？」

「いやーちよつとあつてね」

「そうそう」

ことりは俺と穂乃果がしょんぼりとしている理由に気付いた。

「ああ！穂乃果ちゃんと太一くん、海末ちゃんに怒られたんだね」

「うう……」

「それ以上言わないでことりちゃん」

ことりの一言で俺と穂乃果の肩が一気に重くなった気がした。

ことりと合流して歩いていると一年生が目に入った。

「そーいや1年生つて俺達2年生と3年生と比べると人数が少なくな

「いか？」

「そうですね、確か1クラスしかなかった気がします。」

「1クラスは少ないな、3年生は3クラス、2年生は2クラスあるからな」

「来年はどうなるんだろ？」

「もしかしたら来年は今年よりも少ないかもしれません」

「穂乃果、確かお前妹おるやろ？受験、音ノ木坂受けるのか？」

「雪穂？どうなんだろ？聞いてみるよ」

たしかに3年生、2年生、1年生の順に人数が減っている。人数が減るのには、何かしらの理由がある。大きく言うと学校の人気がない、二年ほど前に駅の近くに新しい学校が出来たらしく、さらにその学校は最近話題になっているスクールアイドルがいるらしく、それで人気になり受験者が多いらしい。

それでその影響で廃校する危機がある学校が幾つかあるらしい。俺達の学校もそういうのにならないようにしたいものだな。

学校に着いた俺達は教室へ行くため廊下を歩いていると、前に人だかりが出来ていた。

「ん、なんだ？」

「なんだろ？」

「人だかりが出来ていますが」

「なにかあったのかな？」

なにやら騒がしく、結構良くない事が起こったことは感じた。

「ヒデコちゃん、なんかあったの？」

穂乃果は同じクラスメイトのヒデコに聞く。

「穂乃果……これ見てよ。」

「とんでもない事だから」

「覚悟して読んで」

ヒデコに続きフミコ、ミカが言う。

「どれどれ？」

「何が書いてあったんだ、穂乃果？」

「……………」

「どうしたんだ？見るぞ！」

穂乃果は俺の声に反応せず黙っていたので俺は穂乃果から紙を取り紙の内容を見る。

「ああ……」

「どうしたんですか、太一？」

「どうしたの、太一くん」

「いいか？海未、ことり覚悟して読めよ」

俺は、内容を見ると海未とことりに見せた。

その内容は

音ノ木坂学院廃校のお知らせ

## 第6話 知らせの後

「わあー!……なくんだ夢か……!」

穂乃果は保健室のベッドで目が覚める。

「あら、高坂さん、もう大丈夫なの?」

保健の先生は穂乃果に聞く。

「はい!大丈夫です、ありがとうございます!」

そういうと穂乃果は保健室を出ると廊下でスキップしながら教室へ戻っていった。

「ラツラツラーおっはよう!」

鼻歌をしながら穂乃果は色んな人に挨拶をする。

「ヒデコ、フミコ、ミカ、おっはよう!」

穂乃果は、ヒデコ、フミコ、ミカに挨拶してそのまま教室へ向かった。

「穂乃果、ついにおかしくなっちゃったのかな?」

「よほどのショックだったんだね」

穂乃果は廊下でスキップしていると廃校の知らせが書いてある紙が目に入った。

「えー!うそ?」

その紙を見た穂乃果は、さっきまでのスキップがゆっくりになり終いには、スキップが、止んだ。

~~~~~\*~~~~~

「穂乃果ちゃん大丈夫かな?」

「倒れるほどだから余程のショックだったんだろ?」

「まあ穂乃果ですので大丈夫なのでは?」

俺と海未とことりが話していると穂乃果はとぼとぼしながらこつちに歩いてきて俺達の所に来るとしゃがんで顔をしたにして泣いていた。

「大丈夫か、穂乃果？」

「穂乃果ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫ですか、穂乃果？」

「うう……」

俺達は穂乃果を慰めようと声をかけるが穂乃果はそのまま顔を下に隠してないていた。

「なんで、泣いてるんだ？」

「うう……だって学校が廃校になるんだから違う学校に行かなくちゃ行けないんでしょ？穂乃果勉強してないよ」

「なくんだ、そんなことか」

「太一君や海未ちゃんのことりちゃんはいいよ！そこそこ勉強できるんだし」

「落ち着いてください穂乃果、ちゃんと紙を見ましたか？」

「廃校のお知らせしか見てないよ」

「はあ……あなただって人は、私たちが卒業するまでは学校は無くなりませんよ。」

「えっ！どうゆうこと!?!」

穂乃果はあの知らせの全部を見ていなくてそれを知った海未は毎度のようにため息をつく。

「廃校になるのは私たちが卒業してからだから早く三年後だよ」

「そうなんだ？まあよかったよ！さあお昼だからご飯食べに行こ！」

~~~~~\*~~~~~

「はむ！（モグモグ）いやー！今日もパンがうまい！」

「またパンですか？よく飽きませんね」

「だって、うち和菓子屋だからパンが珍しいこと知ってるでしょ？」

「そんなに食べると太るぞ」

「大丈夫だよ！」

昼の時間だったので俺達は中庭で昼食を食べていた。

さっきまで泣いていた穂乃果は海未から理由を聞いて安心したそうで今はこうやってパンを食べていた。

俺は、料理が出来ないのでお昼は好物のカレーパンかサンドイッチをコンビニで買ってきて食べている。

「そういや俺達が卒業するまで廃校にならないってことだから今の一年生は後輩無しってことになるな。」

「そういうことになりますね。」

「何か出来ないかな……?」

何か出来ないか考えていると二人の女の子が俺達に近づいてきた。

「ちよつと、いいかしら?」

「海未この二人って誰だ?」

「誰って?生徒会長と副会長ですよ!」

「まじで!?!」

俺達の所に来た二人はまさかの生徒会長と副会長だったのだ。

生徒会長らしき人は髪がポニーテールの金髪で胸もありボディが見事だった。

副会長は髪が紫色のツインテールで、生徒会長と同様胸が大きくナイスボディだ。

俺が二人に目を奪われている時、生徒会長はこどりに質問した。

「南さん?」

「はい!」

「あなた理事長の娘さんよね?理事長何か言っつてなかった?」

「いえ、私も今日知ったばかりで……」

「そう、ありがとう……」

「ほな〜」

そう言う時生徒会長と副会長は去つていこうとした時。

「あの……!」

「なに?」

「私……この学校を守りたいんです!何か出来ることはありませんか?」

穂乃果は勇気を出して生徒会長に出来ることはないかと聞く。

「この事は生徒会が、担当するから、あなたは今までどうり学校生活を、頑張りなさい。」

「うう……」

そう言うのと生徒会長と副会長は去っていった。

「仕方ないよ穂乃果……この事に関しては俺達にはどうすることもできない、お昼休みも終わるから教室に戻ろうぜ？」

「……諦めない……穂乃果、絶対に諦めない！」

穂乃果はまだ諦めきれないようだ、たしかに俺もこのまま学校が廃校になるのを黙って見ている訳にはいかない、まだ数日しか経ってないが一樣自分が学んでいる学校だ 何とかして守りたい、ここは穂乃果と一緒に何か出来ることはないか考えて見るか。

「じゃあ、何かできることはないか、考えてみるか穂乃果？」

「ほんと!?ありがと！海未ちゃんことりちゃんも一緒に考えよ！」

「うん♪穂乃果ちゃんことりも一緒に手伝うよ♪」

「仕方ないですね……」

ことりと海未も手伝ってくれるようで、ひとまずこの学校の記録とかが記されている本が図書室にあるらしいので授業後にそこへ向かうことにした。

~~~~~\*~~~~~

「んじゃ、探しますか」

「おー！」

授業後、俺達は図書室へ行き図書室の奥の方にあつた記録を見つけて読んでいた。

「太一君！穂乃果見つけたよ！」

「おっ！どんなことが書いてあつた？」

「この学校は穂乃果のおばあちゃんの小さい頃からあるらしくて……」

「らしくて？」

「伝統がある！」

「なるほど……他には」

「歴史がある！」

「同じ、じゃありませんか？」

だめだ穂乃果に聞いた俺がバカだった、次はことりに聞いてみるか

?

「つたく……ことりは部活動の記録を見ていたけど何か凄い記録を見つけたか？」

「凄い記録かは分からないけど……一様見つけたよ♪」

「どんなの？ことりちゃん？」

「えーっとね……ソフトボール部3回戦敗退……」

「うわー地味……」

「吹奏楽部、地区大会準優勝……」

「あと、一息欲しいですね……」

部活動はあまり良い働きがなく期待できないな。

「うわーん……どうしよう？」

「もう、遅いし帰って明日考えようぜ」

「私も帰ったらお母さんに聞いてみるよ」

「うん……」

空が暗くなってきたので俺達はそれぞれ家に帰った。

### 高坂宅

「ただいま〜」

「お帰りお姉ちゃん」

穂乃果は家に着き、リビングに入ると妹の雪穂が横になりながらファッション雑誌を読んでいた。

穂乃果はさっきの事があってかなり落ち込んでいた。

「チョコ食べる？」

「食べる……」

「あんこ入りだけど……」

「ありがと……」

そんな穂乃果を見て雪穂はチョコを渡し、それを食べた穂乃果はチョコにあんこが入っていたのに気付कि驚く。

「これあんこ入ってるじゃん！」

「うわーん」

穂乃果はチョコにあんこが入っていたのがよっぽど嫌だったのか

駄々をコネっていた。

「あんこ、もうあきたー！」

「白あんもあるよ、」

「もつとあきたー！」

穂乃果はさらに駄々をこねる。

「穂乃果！和菓子屋の娘が和菓子飽きたなんて言うんじゃないの！お店まで聞こえちゃうでしょ！」

「ごめんなさいーい」

穂乃果の駄々が聞こえたようで、穂乃果のお母さんは穂乃果に怒る。

「はあ、、ん？」

穂乃果は起き上がり雪穂の方を見ると『UTX』と書かれてあるパンフレットが目に入った。

「雪穂それ？」

「ああ『UTX』？私来年受けるんだ」

「ふーん」

穂乃果はパンフレットの中を見ると今話題のスクールアイドルが大きく載っていた。

「へーこんなことやってんだ？」

「知らないの？今一番人気の学校でどんどん生徒が増えているんだって」

「すごいなー、って雪穂！」

何かに気付いた穂乃果は雪穂の後ろのダンスに手をやり雪穂が、逃げられないようにする。

「あんだ、何で音ノ木坂受けないの！」

「時間差過ぎるよー！」

雪穂が音ノ木坂を受けないことを穂乃果は今知った。

「お母さん、お母さん！」

「なあに？」

穂乃果はお母さんに雪穂が音ノ木坂を受けないことを言う。

「知ってるわよ」

「何で!?!うちはおばあちゃんもお母さんも音ノ木坂でしょ!」

まさかのお母さんも承認済みだった。

「雪穂;;、何で 音ノ木坂受けないの?」

穂乃果は雪穂に受けない理由を聞く。

「だって音ノ木坂廃校になるんでしょ?」

「もうそんな噂が」

「みんな言ってるよ廃校になるんだからあんなどこ受ける意味がないって。」

「うう;;、」

穂乃果は時事うなのので何も言い返せなかった。

「でも太一君たちと考えてるもん」

「じゃあ明日太一さんと『UTX』のスクールアイドルを見てみてよ、それを見るとわかるよ。人気の学校との差が;;、」

「わかったよ見てみるよ。」

そう言う穂乃果は俺に明日行きたい所があるとLONEして明日に備えた。

通算UA1000、2000突破記念 穂乃果とお留守番

金曜日、それは平日5日間の最後の日であり、誰もがこの日のために頑張ってきたと言う人もいるのではないだろうか？むろん俺もそうであり平日5日間を生きてきて今日家に帰ってゲームをして明日は家で寝ようと思った時、

「ねえねえー太一君」

穂乃果が俺が考えている最中に割り込んできて俺を呼ぶ。

「なんだよ?」

「あのね?明日、太一君暇かな?」

「明日?特に用事はないぞ……あつ!」

言ってしまった明日は家でゆっくりしたいのに暇って言うってしまった……これはまさかの……

「本当!?じゃあ明日、穂乃果の家に来てよ!」

ですよねー、やっぱり俺の予想どうり穂乃果は俺を誘ってきた。

「まてまて、何でそうなる!?!」

「何でって、お父さんとお母さんが和菓子協会の慰安旅行に行くことになって、雪穂は亜里沙ちゃんの家泊まりに行くって言うって家には穂乃果一人しかいなくて……」

「それなら海未とことりを誘えばいいだろ?」

「だって海未ちゃんは明日、弓道の練習があつて、ことりちゃんは買い物に行くからって」

「なるほどそういうことか……」

穂乃果のお父さんとお母さんは旅行でいなく、妹の雪穂は絵里の所へ泊まりに行くって事は穂乃果は家に一人って事か……

まあさすがに女の子を一人で家でお留守番は可哀想なのでここは一肌脱いであげますか。

「しーないな、いいぞ」

「本当!?ありがと!」

俺の返答を聞いた穂乃果は喜んでいた。

「明日の午後の1時にお前の家に行くわ。」

「わかったよーじゃあ、また明日ねー!」

そう言うのと穂乃果は手を降り俺を見送った。

いや待てよ……穂乃果の家に行くって言ったけど何するんだ?

そう思いながら俺は、明日に備えて準備を進める。

(明日は何して遊ぼうかなー!)

そう思いながら穂乃果は一人で明日のことを楽しみにしていた。

~~~~~※~~~~~

~~~~~

翌朝

「じゃあ、穂乃果家の留守番お願いね。」

「わかってるよー行ってらっしゃい!」

穂乃果のお父さんとお母さんは朝早く家を出た。

家には穂乃果と妹と雪穂の二人になった。雪穂はお昼から行くらしく午前中は一緒にいるらしい。

「お姉ちゃん、午後から私もいなくなるけど何するの?」

「午後から太一君が来てくれるから一緒に遊ぶんだ!」

「何時に来るかわかるの?」

「あつ……忘れちゃった……」

「はあ……お姉ちゃん一人じゃ心配だから太一さんが来るま一緒にいてあげるよ。」

「本当!?流石私の妹だよ!」

「それじゃあ、太一さんが、来るまでに部屋の掃除を終わらせないとね。」

「はい」

俺が来る前に穂乃果達は家の掃除を始めた。

~~~~~※~~~~~

~~~~~

「穂乃果ーいるか?」



やり1時からやり始めたのに気付けば4時になっていた。

「これで海未に見られても大丈夫だろ？」

「ありがとう、太一君！」

「おう、気づけば4時だな」

「結構やってたね」

「晩御飯何か用意しているのか？」

「してないよ」

「もう4時だぞ！そろそろ晩御飯の買い物をしないとイケないんじゃないのか？」

「そうだね、太一君は何が食べたい？」

「そうだなイタリアン系なんてどうだ？」

「良いね、イタリアン！海未ちゃんところりちゃんも喜びそう！」

「それじゃあスーパーに行きますか！」

「うん！レッツゴー！」

晩御飯がイタリアン系に決まり俺と穂乃果は近所のスーパーへ向かった。

~~~~~※~~~~~

「んじゃあ必要な材料をかうぞ、まずは何を作るかだな、イタリアンな物でもいっぱいあるし」

「やっぱりイタリアンだから、まずはパスタだよね！」

「パスタなら無難にミートスパゲッティで良いんじゃないか？」

「うん！いいよ！」

晩御飯はミートスパゲッティになり、俺と穂乃果は材料を探しに行く。

……20分後……

「材料はこんな感じだろ？」

「そうだね、じゃあお会計を済ませよっか！」

一通り材料が揃ったため会計を済ますべくレジに向かう。

「料金は2500円です。」

「穂乃果、お前お金あるのか？」

「当たり前じゃん！朝、お母さんから貰ったよちゃんと！」

「ならいいけど……」

「あ……」

穂乃果は自分の財布を見ると、中身を見て固まった。

「ん……？どうした、穂乃果？」

「忘れちゃった……」

「何を……？まさか……！」

「お金……」

「は！マジで!？」

「うん……」

「あちやーマジですか穂乃果さん」

だめだ……お金を忘れるなんて……頼むよ……まあしやあない  
ここは俺がお金を出そう。

「しゃーないなここは俺がお金を出すわ」

「本当!？ごめんね……ありがとう！」

「その代わり美味しいご飯を作れよ！」

「うん！わかった！」

お会計が終わり俺達は穂乃果の家に帰る。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~ ※ ~~~~~  
~~~~~

「うわー疲れたー！」

「つたく、だらしねーな買い物に行っただけだろ？」

「そうだけど、少し荷物が重かったただだよ！」

「わかった、わかった。海未とことりが来るまであと30分あるから早く作ろうぜ！」

「うん！」

俺は、料理が苦手なのであまりやらないが皿を並べたりと他のことは出来るのでそれくらいは手伝うつもりだ。

「俺に出来ること何かあるか？」

「いいよ、料理とかは全部穂乃果がやるよ！太一君はリビングで待つ

「ててー！」

「わかった、楽しみにしてるぞー！」

「任せてよー！」

そう言うのと穂乃果は料理を始め、俺はリビングに向かい携帯をいじる。

15分程するとミートスパゲッティの匂いがした。香ばしく香りこれこそミートスパゲッティと思わせていた、しかしその匂いはほとんど小さくなり、終いには無くなり今度は少し焦げ臭くなっていた。

「まさか……！」

俺は直ぐに焦げる匂いを察知しキッチンに向かう。

「大丈夫か!?穂乃果ー！」

「うわーん焦げちゃったよ……！」

案の定さつきまで作っていた料理は少し焦げていた。

「焦げちゃったな？」

「うん……また最初から作り直さなきゃね……！」

「何言ってるんだよ？焦げているけど少しだけだから大丈夫だ！」

「え……！出来るの!？」

「ああーちよつと代われ」

「うん……？」

俺は、穂乃果からフライパンを貰い料理を続ける。

代わって5分程料理をしていると『ピンポーン』とインターホンが聞こえた。

「海未とことりが来たんじゃないか？」

「そうかもね……行ってくるよー！」

「おうー！」

そう言うのと穂乃果は玄関へ向かった。

「はいはい『ガラガラ』あつー海未ちゃん！ことりちゃん！いらっしやいー！」

「こんばんわ穂乃果」

「こんばんわ穂乃果ちゃん♪」

「ささどうぞどうぞー！」



「だろ！俺が作ったんだから絶対にうまいぞ！」

焦げた所もあるがあまり目立たないこれも少し自信があるところだな！

「それじゃあ」

「「いただきますー！」「」」

「「はむ！」「」」

「どうだ、味は？」

「すごい!?美味しいよ！太一君！」

「美味しいです！これ本当に太一が作ったのですか？」

「ことりでもこんな美味しく出来ないよ！」

「だろ！俺が作ったんだから当たり前だ！」

穂乃果達は俺の料理が美味しすぎたのか、もくもくとパスタを食べた。

「ばあ……ごちそうさま！」

「これからどうする？」

「空が暗くなつて来ていますので私とことりは帰ります。」

「わかったよ！気を付けてね！」

「気を付けて帰れよ二人とも」

「うん！ごちそうさま、太一君♪」

そう言うのと海未とことりは帰っていった。

「これからどうする？」

「テレビでホラードラマがやっているらしいからそれを見よ！」

「ホラーか……大丈夫か？」

「大丈夫だよ！たぶん……」

穂乃果はテレビを付けてそのホラードラマを見る。

一時間後

「終わったー」

「以外にも怖かったな？」

「そうだった……？穂乃果はそこまで怖くなかったよ……」

嘘こけ声が震えているぞ穂乃果……こは少しいじってみるか。

「それじゃあ、もうこんな時間だから俺も帰ろっかな。」

「え……！もう帰るの!？」

「だってもう9時だぞ！今日は色々あったから疲れたんだ。寝さしてくれ……」

「そんなー」

「あれ、まさかさつききのドラマが怖かったとか？」

「そんなことないもん！」

「へー？」

「もう！太一君の意地悪！」

穂乃果は怒りながら俺の体をボカボカ叩いた。

「わかった、わかった、じゃあ俺はどうしたらいいんだ？」

「……まってよ……」

「ん？何だつて？」

「泊まってよ！」

「素直じゃねーな、わかった今日だけな」

そう俺が言うと穂乃果は明るくなりテンションがMAXになった。

風呂に入り穂乃果の部屋に行くと床に布団が敷いてあった。

「じゃあ太一君はこっちな」

「わかった」

そう言うと俺は布団の中に入った。

「今日は色々とありがとね！」

「ああ俺も楽しかったぞ！」

「じゃあ、おやすみ！」

「おやすみ。」

俺はこのあと直ぐに夢の中に行っちゃった。

~~~~~※~~~~~

俺が寝たあと穂乃果はまだ起きていた。

「太一君起きてる？」

「……」

無論俺は寝ているから返事はない。

「うう……また怖くなっちゃった……そうだ！太一君の布団に入る

！」

穂乃果は俺の布団に入ってきて隣で寝る。

「太一君、今日はありがと♪穂乃果とつても楽しかったよ！また今度こんなことが出来たらいいな。おやすみ（チュユ）」

穂乃果は寝ている俺のでこにキスをした。

翌朝穂乃果が隣で寝ていたことを俺はまだ知らない。





UTX高校は、最近新しく出来た学校なので最新の設備が揃っているのだろう。設備などは音ノ木坂では設置はできないけど行っている行事などは上手く使えるはずだ。

~~~~~  
~~~~~ ※~~~~~

「高けーな！これが学校なのか!？」

「音ノ木坂とは比べ物にならないね?」

俺と穂乃果はUTX高校の校舎の大きさに圧倒される。

高さはそこら辺のビルより高く生徒も音ノ木坂よりも多い、すぐそこに駅もあるので交通の便がよく来やすいつて言うのもあるな。

「ん……?太一君!あれ見てよ!」

「何々?うわ!まじて!?!」

そこにはとんでもない物があったそれは、学校に入っていく生徒は入り口に駅の改札のようなものがあり、そこに生徒手帳のような物を触れて中に入っていく。

「あんなの……穂乃果初めて見たよ……!」

「俺もだ……」

入り口の改札のようなものに目が行つてると、学校のかなり大きい電子掲示板から歌と映像が流れてきた。

「ん、なんだ?」

「歌が聞こえてきたよ!?!」

歌が聞こえる方に行くとかくさんの人たちが電光掲示板を見ていた、そこには女の子3人と男の子1人が歌っていた。

「これって、さつき穂乃果に見せてもらったパンフレットに写ってた子達だよな?」

「そうそう、何て名前だったかな……?」

「A—RAI—Sよ!そんなことも知らないの?」

「す……すみません……」

グループの名前を思い出している時、隣のサングラスをかけた子が怒りながら教えてくれた。

「その……A—RAI—Sって人気なんですか!?!」

「はあ!?何言ってるの?人気に決まっているじゃない!」

「人気ってどれくらいなんです?」

「A―RAISは今、日本一のスクールアイドルなのよ!」

「そうなんだ... 凄いな穂乃果?」

穂乃果は何か心に心を打たれたようで隅の手すり顔で顔を隠していた。

「...だよ...」

「ん、何だって?」

「これだよ... これしか無いよ!太一君!」

「まさか... 本当にやるのかよ!穂乃果?」

穂乃果は何か思い付いたようでそれを俺に提案する。

~~~~~※~~~~~

音ノ木坂学院 2年A組 教室

「はあ... 結局一時間目は、穂乃果と太一は来なかったですね...」

「二人ともどうしちゃったんだろう?」

海未とことりは俺達を心配していた。そりや何も連絡無しに遅刻しているんだから心配することもわかる。

~~~数分後~~~

「おっはようー!」

「はあ... はあ... おはよう...」

「やつと来ましたね、穂乃果!太一!」

「おはよう二人とも♪」

「穂乃果... これ買いすぎだぞ?」

「えーだって...」

「何を買ったのです?」

「ん?ああこれだよ」

「俺は買った本を海未に見せる」

「こ... これは!」

「スクールアイドルの本だ!」

「太一... ついに!こんな子達に手を出そうとしているのか!」

海未は何か勘違いしているようだが、何故か分からないが俺には怒り始める。

「まてまて、何でそうなる!？」

「問答無用!!」

「やめて…海未さん…あー!」

そっから10分俺の記憶は飛んでった。

~~~~~※~~~~~

「なるほどそう言うことでしたか…」

「ったく…だから俺のじゃないっていったじゃないか!」

「だから謝っているではありませんか!？」

「まあまあ海未ちゃんも謝っているんだから許しなあげなよ♪」

「ことりのお願いだから今日の所は許してやる…」

俺の誤解が晴れたところで本題に移る。

「何で穂乃果はこの本を大量に買ったのですか？」

「何でって、穂乃果スクールアイドルを始めるからその参考として

買ったんだよ!」

「スクールアイドルを始めると…これは聞かなかったことにします。」

そう言うのと海未は教室から出て行くこうとした。

「待ってよ海未ちゃん!」

「何で逃げようとするの!？」

「あなたの魂胆は見えていますよ、スクールアイドルを始めて学校を廃校の危機から救おうと言うことですね」

「海未ちゃんもしかしてエスパー?」

んな訳ないだろ!?!誰でもそこまで話せばそう思うわ。

「あなたの話を聞けば誰でも思います」

「なら話が早いよ!今から先生の所に行つてアイドル部の申請を出し

にい!」

「行きません!」

「なんで?」

「あの人達は地獄のような練習をしているのですよ、それを穂乃果に出来るのですか?」

「うう…それは…」

「もう一度言います、スクールアイドルは無しです！」  
穂乃果は海未の最後の一言を聞くと何も言い返せなかった。

~~~~~※~~~~~

理事長室

『コンコン』失礼します」

「あらどうしたの、生徒会長と副会長そろって」

理事長室に訪れたのは生徒会長の綾瀬絵里と副会長の東條希だった。

「単刀直入に言います、廃校阻止のためにも生徒会独自の行動を許可してください！」

絵里は理事長室に入ったとたん、理事長の前に行き提案する。

「それは許可できないわ……」

「どうしてですか!？」

「この件はこちら側の問題です既に受験人数増加のため男女共学にするつもりです」

「ですが男子はこの学校にはいません男子がいないと不便な所が分かりません、そこだけでもいいので生徒会にやらせてください」

「既に男子はいるわよ」

「まさか始業式に出てきた子ですか？」

「黒崎太一君よ彼に頼むつもりよ」

「はい……」

「生徒会はこれから来る体験入学と文化祭に力を入れなさい」

「ですが！」

「えりち！」

絵里が何か言おうとしたが希がそれをとめる。

「分かりました、それでは失礼します」

そう言うのと絵里と希は理事長室をでていった。

~~~~~※~~~~~

「はあ海未ちゃんあそこまで言わなくてもいいのに……」

「まあ急に言われたんだ急過ぎて頭が回らんかったんだよ」

俺と穂乃果は海未に言われたあと他に何かないか回りを歩いていった。

歩いているとどこからか歌とピアノが聞こえてきた。

「歌が聞こえてきたな」

「ピアノの音も綺麗だよ」

「音楽室からだな行ってみよう」

「うん！」

俺と穂乃果は音楽室に向かった。

「愛してるばんぎーい、ここでよかった、私たちたちの今がここにある、愛してるばんぎーい、はじまったばかり、明日もよろしくね、まだゴールじゃない」

音楽室では赤毛の女の子がピアノを弾きながら歌っていた、曲は聞いたことのない曲でピアノ、歌共に綺麗で聞いている自分も癒されてしまう。

「凄い綺麗な歌声だね！」

「ああ！ピアノと上手くリンクしている」

「これは誘いがいが有りそうだね！」

「ちよ、お前あの子を誘うのか？」

「当たり前じゃんあの子を誘わなきゃ損だよ！」

「あつ……待て！」

そう言うと穂乃果は音楽室の扉を開けて赤毛の女の子の方に向かった。

## 第8話 やるったらやる!!!

曲が終わると同時に穂乃果は教室のドアを開けて中に入る。

「すごいね！歌も上手で」

「どうも……」

赤毛の女の子は席を立ち教室から去ろうとした。

そりや急にこんなことを言われたら恥ずかしくて逃げたくなくなるよな。

「ピアノの音も綺麗でなんたってアイドルみたいに可愛いし！」

「えっ……！」

赤毛の女の子は穂乃果の言ったことを聞くと顔を赤くし、歩くスピードを早くした。

「まってー！」

「なっ……なんですか!?!」

少し赤毛の女の子は怒っていた。

「あのさ……唐突なんだけど、あなたスクールアイドルやってみない？」

「何それ？イミワカンナイ」

「だよね……」

赤毛の女の子はそう言うと穂乃果を通り越して俺の方へ来る。

「すいません……邪魔なんですけど……」

「おお……すまん」

俺に少し怒っているようにも見え、去っていった。

「穂乃果？」

「太一君！穂乃果絶対にあの子をスクールアイドルに誘いたい！」

「何でだ？」

「あの子、歌が上手で可愛いかった！あの子を誘ったら絶対に成功すると思うー！」

「そうも思うならあの子の首を縦に降るまで頑張って勧誘しないといけないな。」

「うんー！」

「でもその前に海未とことりを勧誘させないとな」

「そうだね、でも海未ちゃんはさつきやらないって言っちゃったよね、どうするの?」

「海未は穂乃果の今までの行動を見て言っているんだ、だから本気でやるってところを見せなきゃいけない」

「わかったよ太一君!穂乃果やってみるよ!」

そう言うのと穂乃果は走ってどこかへ行ってしまった。

「んじゃあこの事を海未やことりに伝えにいきましょうかね」

俺は海未とことりを探しに学校を回る。

自分のクラスへ戻るとことりが穂乃果の買ってきたスクールアイドルの雑誌を読んでいた。

机の上の雑誌の量を見てみるとかなり読んでいたらしい、もしかしてスクールアイドルに興味を持っているのか?

「ことり、何を読んでいるんだ?」

「っ!何でもないよ!」

ことりは机に置いてあつた雑誌を机下の棚に隠した。

「嘘つけ何か読んでたのは知ってるんだぞ別に言いふらすとかはしないから教えてくれ」

「本当だね?」

「当たり前だ」

「これだよ」

ことりは机の下の棚に隠した雑誌をとりだした。

「穂乃果が買ってきた雑誌だは何でことりが読んでたんだ?」

「ちよつとスクールアイドルに興味を持つちやて……」

「そうなのか?」

「うん……あと穂乃果ちゃんが言った事って結構無茶なことが多いんだけど、それに付いていっても後悔したことがないの!だから信じてみようって」

「いいんじゃないか?やってみても良いと思うぞ俺は」

「本当に♪太一くんが言うんだから大丈夫だよね」

「ああ大船に乗ったつもりでいけ」



「おー!!」

俺と穂乃果はダンスの練習を始めた。

~~~~~\*~~~~~

場所は変わって弓道場海未は穂乃果にスクールアイドルはやらな  
いと言ったあとここで弓道の練習をしていた。

精神を集中させて弓を引くが……

(皆のハートを撃ち抜くぞー♪バーン♪)

海未の脳裏にそれが浮かぶ。

弓を引くと同時に浮かび弓は的のしたに刺さっていた。

「はずしたの!? 珍しい」

「っ…… たまたまです!」

弓道部ではかなりの凄腕な海未がはずしたためそれを見ていた同  
じ部員の子がつぶやく。

無論プライドが高い海未は脳裏に浮かんだとは言えないのだろう。

海未はもう一度精神を統一して弓を引く、話すと同時にまた脳裏に  
浮かんでしまう。

(ラブアローシユート♪)

さつきからミスを連発してしまい海未の心は不安定になっていた。

「いけません集中しなければダメなのにどうしてもあれが浮かんでし  
まいます」

海未は床に手を付ながら涙目で言った。

「海未ちゃんどうしたの?」

「ことり…… 助けてください!」

「何があったの?」

「実は……」

~~~~~\*~~~~~

「それは海未ちゃんスクールアイドルやってみたいんじゃないの?」

「わ…… 私は別にさうゆうことじゃ」

こつりと海未は海未の休憩をかねて校舎裏へと来ていた。

「ねえ海未ちゃん見てみて」

「あ…… あれは？」

海未が見た先には俺と穂乃果がダンスの練習をしていた。

「ワン…… ツウ…… スリー…… フォ、そこで回転！」

「うわっ！…… いったー！」

「大丈夫か、穂乃果？」

「うう…… いたいよ」

海未とことりは俺達の練習を隠れて見ていた。

「ねえ…… 海未ちゃん？」

「何です？」

「昔穂乃果ちゃんに木登りさせられた時があつたよね？」

「ありました…… あれ以降木登りは絶対しませんでしたけど」

「でも後悔はしてないよね？」

「そうですね…… 木に登ったあと町を見ると夕焼けがとても綺麗だったのを覚えています」

「でしょ♪だからやってみない？スクールアイドル」

ことりは海未に自分の思いを伝えた。

海未も薄々気付いていた。

穂乃果のことだからかまた直ぐにやめるのだろうかと思っていた、だがあれを見るとそうでは思わなくなっていた。穂乃果の目は本気が目だったのだ。

そう思った海未は自分から隠れていた壁から抜け出し穂乃果の前に出て手を差し出す。

「大丈夫ですか、穂乃果？」

「海未ちゃん！」

「二人でやってもダメなら私たち4人でやってみませんか？」

「もしかして海未ちゃんスクールアイドルやってくれるの？」

「穂乃果のその本気を見て心を打たれました、やるからには全力でやりましょう」

「ありがと海未ちゃん！」

~~~~~\*~~~~~

「これは何？」

「アイドル部設立の申請書です！」

穂乃果達はアイドル部の設立の申請書を提出しに生徒会室にきていた。

「見れば分かるわでも何で今の時期に作ろうと思ったの？」

「そ…それは、学校を守りたいんです！何も出来ないのはいやなんですー！」

「わかったわそれは認めましょう、でも許可することは出来ないわ」「どうしてですか!？」

「部を設立するには最低でも5人は必要なんよ、あと二人集めなきゃな」

「わかりました、あと2人集めれば部活を設立出来るんですね！失礼します」

そう言うのと穂乃果達は生徒会室をでていった。

「希？どうしてあの子達を応援するの？」

「どうしてって？それはカードがうちにそう告げるんや！」

~~~~~\*~~~~~

「どうだった？」

「あと2人集めたら部を設立してくれるんだって」

「そうか…よし！穂乃果、申請書を貸してくれないか？」

「いいけど、どうして？」

穂乃果から申請書を貸してもらい俺は名前の記入欄に黒崎太一と書いた。

「太一君？」

「これであと一人だな」

「ありがとう、太一君！」

「でもあと1人どうしますか？」

「どうしたらいいんだろう？」

「希、どうしたらいいと思う？」

「どうしたらいいんやろうか？」

~~~~~\*~~~~~

『だって可能性感じたんだ』

そうだ…ススメ!

後悔したくない 目の前に僕らの道がある』

『Let, s Go! Do! I do! I live!

YES, Do! I do! I live!

Let, s go, Let, s go! Hi!!』

『前向き 上を見よう 何かを待たないで

今行こう 早く行こう どこでもいいから

太陽きらめいて 未来を招いてる

さあ行こう 君も行こう ススメ→トウモロウ』

『熱いころ (もてあまして)』

『抱いて走った (苦しかったんだ)』

『みんなおいで (もつともつと)』

『もつと動いて確かめたチカラ (Hi!)』

『Let, s go 変わらない世界じゃない

Do! I do! I live! (Hi hi hi!)』

『Let, s go 可能性あるかぎり

まだまたあきらめない (Hi! hi hi!)』

『Let, s go 自然な笑顔なら

Do! I do! I live! (Hi! hi hi!)』

『Let, s go 可能性見えてきた

元気に耀ける 僕らの場所がある』

『Let, s Go! Do! I do! I live!

YES, Do! I do! I live!

Let, s go, Let, s go! Hi!!』

「私やるったらやる!絶対やる!」

## 誕生日特別編 花陽誕生日記念

「じゃあ今回もいつもどおりに頼むな」

「「「「うん（はい）！」「」」」」」

「場所は穂乃果の家な、プレゼント忘れるなよ」

「わかってるよ！花陽ちゃんの喜ぶプレゼント絶対に見つけるから！」

「おう！じゃあ俺は穂乃果達が準備してる間にどこかに連れていかないな、じゃあ後はよろしく」

「うん！任せてよ」

明日1月17日は花陽の誕生日、俺達は毎回恒例誕生日パーティーを開く、穂乃果達8人はパーティー会場の飾り付け、買い出し、料理などの準備をし、俺はその間花陽をどこかへ行きうまく時間を稼ぐ手筈になっている。

「花陽はどこにいるかな？」

俺は花陽をどこかに誘うため花陽を探す。

「あつ、いたいたおーい花陽」

「太一くん？どうしたの？」

花陽は先生に呼び出されたのか、職員室から出てきた。

「職員室から出てきたがどうしたんだ？」

「皆のノートを提出してたんだよ」

「そうだったのか、そういやこれ…」

「何？こ…これって！」

「日本の白米オールスターっていうイベントがあるんだ、そのチケットを真姫から貰ったんだ明日予定が無いなら一緒に行かないか？」

「行きたいです！絶対に行きたいです！」

花陽は目をキラキラさせながら答えた。

「わかった！じゃあ何時にどこに集合する？」

「場所は駅前ホールだから駅前に10時でどうでしょうか？」

「10時に駅前なわかった、じゃあまた明日な！」

「はい！（明日は太一くんと一緒に行けるなんて楽しみだな♪）」

花陽は1人明日のことを楽しみにしていた。

~~~~~\*~~~~~

小泉花陽です！今日は太一さんと一緒に白米のイベントに行くことになったので、とても楽しみで夜も眠れなかったです！はっ！これってデートなのかな？はわわ、どうしようでも太一さんとこんなこと出来るのもう無いかもしれないから楽しまない！

「いつてきまーすー！」

はあ…緊張し過ぎて早く家を出ちやいました。まだ約束の時間まで40分位あるからどうしようかな？

そう思いながら歩いて駅前に着くと既に太一くんが待っていました。太一くんも楽しみだったのかな？

「おっ！花陽〜」

太一くんは私に気付いて手を降ってくださいました。私もつられて手を降っちゃいました。

「今日は早いね太一くん？」

「ああ、花陽とどこかに行くのは初めてだから緊張して早く来すぎちゃったんだよ」

「そっか…実は私もそうなんだよね」

「そうなんだ、はははは似た者同士だな俺達って」

「えへへ、そうだね」

太一くと似た者同士なんて少しうれしいかも…

「すこし早いけど行こっか？」

「行きましょう！」

「おっ！今日の花陽はテンションが高いな!?!」

「当たり前じゃないですか！白米のイベントですよ！ここ最近そういうイベントがあまりなかったのですっごく楽しみになんです！」

「そっかなら尚更早く行かないとな！」

「はい！」

太一くと合流して私達はイベント会場に向かいます！

~~~~~\*~~~~~

「凄い人だかりだな…」

「皆やつぱり白米が好きなんですね」

イベント会場に着きましたが開演までですから入り口の前にはたくさんの方が列を作つて並んでいました。私達も最後尾に並んで待ちます。

「うっわ寒！まさか並ぶなんてな」

「早く来ちやつたから仕方ないね・・・クシユン！」

「大丈夫か、花陽？風邪引くとまずいから、これ着とけ」

「ええ！大丈夫だよ、ただ鼻がムズムズしただけだよ」

「俺は大丈夫だ、ささどうぞどうぞ」

「あ、ありがとう」

太一くんは私に着ていたセーターをそれを着たんですが何か悪いことしちやつたな・・・

「花陽」

「はい！何ですか？」

「お前俺に申し訳ないって思つてるだろ？」

「えっ？」

「俺なら大丈夫だ、なんたつて携帯カイ口をたくさん持つてきたからな！」

「ふふふ・・・そうなんだ」

太一くんがカイ口を持つてきたことを聞くと少し笑つちやいました。

「では！これより日本の白米オールスター開催します！」

スタツフさんの声と共にイベントが開催しました！さあ行きますよ！

「おっ！始まつたな」

「いよいよですね！最初はどこに行きますか？」

「ここからは俺も分からないから花陽に付いてくよエスコートをお願いします！」

「は、はい！任せてください！それじゃあ行きますよ！」

「おう！」

イベントが始まりました。太一くんにはエスコートをお願いされた

ので上手くやらないとね。最初は新潟ブースかな？

~~~~~\*~~~~~

会場してからたくさんの方が入って来ました。

まずは有名な新潟ブースです！

「太一くん！まずは新潟ブースです！」

「新潟か、新潟は有名な米産地だからな」

「そうです！新潟は日本三大米産地の一つですから、絶対においしいです！これは食べなきゃ損ですよ！」

「そうか、じゃあ尚更行かないとな」

「はい！」

新潟ブースに着くとたくさんの方がいました。でもここは私の経験をいかして…

「凄い人だな、さすが新潟」

「太一くん！こっちです！」

「ちよつとまで、そっちは東北ブースなんじゃないのか？」

「実はこっちも新潟のお米なんです！」

「どうゆう事だ？」

「同じ新潟なのですが、私達が向かっているお店は新潟の北部で収穫できるお米なんです！」

「だから少し外れた所にあるのか！」

「それもありますけども他の皆さんが並んでいるお店は新潟中部のお店なんですけど、そこで収穫できるお米と北部で収穫できるお米とでは味が全く違うんです！ですから太一くんにはその白米を食べてもらいたいです！」

「なるほど、では行きますか」

~~~~~\*~~~~~

新潟ブース『北部の米』

「いらっしやい、何を頼みます？」

「とりあえず、白米を2つ」

「小盛り、中盛り、大盛がありますが、どれにします？」

「俺はまだ他のブースのご飯を食べたいから、小盛りで」

「私はもちろん大盛でお願いします！」

「おっ！初っぱなから結構いくな!？」

「当たり前じゃないですか！お気に入りの白米だけは、大盛で食べたいです！」

「そっか、じゃあ大盛1つと小盛り1つで」

「はいよ！」

そう言うのと店員は炊飯器から白いご飯をしゃもじですくい器によそつてもつてきてくれました、あくもう炊きたての白いご飯のにおいがします！

「お待たせしました！ご飯大盛と小盛りです！」

「どうも」

私達は店員さんからご飯を貰うと近くのベンチに座り食べる準備をします。

「よし、それじゃあ！」

「いただきます!!」

パク！

「美味い！白いご飯だけなのに、何でこんなに美味しいんだ!？食べたら口の中でとろけるようだ、これホントにご飯なのか!？」

「これこそご飯！はく幸せ！」

そのあと私達は黙々と新潟のご飯を食べて完食しました。

「あー！旨かったくごちそうさま！」

「もう満足ですくごちそうさまでした」

「次はどこのブースへ行くんだ？」

「次は九州の宮崎県のブースだよ」

「宮崎？宮城じゃなくてか？」

「宮崎です！宮崎は新潟、宮城などの北陸、東北とは真逆の位置にあるので暖かい気候で育ってるからまた違う味がするんです」

「へーそう聞くと食べたくなっただな！」

「じゃあ早速行きましょう！」

「おう！」

私達は北陸ブースを後にして次は九州の宮崎ブースへとやって来

ました。

「九州エリアは北陸、東北ブースと比べるとそこまで人はいないな」

「ほとんどの人が北陸、東北ブースですからね」

「こういう所が結構穴場だな」

「そう言うことです」

「よし、それじゃあ早速食べましょう！」

「はい！」

「いらっしやいサイズはどうします？」

「じゃあ大盛2つ」

「はいよ！」

「太一くん、大盛いけるの!？」

「さつき食べたご飯は割と量が少なかつたからな」

「ここのお店は結構量がありますよ」

少し待つとさつきと同様店員さんが持ってきてくれました。大盛でもさつきのお店より量はかなり多いです。太一くん食べれるかな？

「結構量が多いな」

「太一くん大丈夫？」

「大丈夫だじゃあ…。」

「いただきます!!」

パク!!

「美味い！新潟のご飯をとわまた違う食感だフワフワしてる！」

「ん〜やっぱり宮崎も最高です〜！」

宮崎のご飯も美味しくてすぐ完食しちゃいました。

「うわ… もうお腹いっぱい」

「私はまだ、行けますけど…。」

「また行くつもりかよ!？」

「当たり前じゃないですか！今日みたいなイベントもう次は無いかもしれないんですよ！今のうちに満喫しなきゃだめです！」

「勘弁してくれ〜」

私は太一くんの腕を掴み引つ張って他のブースへ向かいました。

~~~~~\*~~~~~

「はあ…も…もう…無理」

「はくお腹いっぱい食べて満足です!」

「そ…それは良かった、ん?」

「どうしたんですか?」

「穂乃果が家に花陽を連れて一緒に来いって」

「穂乃果ちゃんが?どうしたんだろ?」

私達は穂乃果ちゃんに呼び出され今から穂乃果ちゃんの家に向かいます。

~~~~~\*~~~~~

「穂乃果く来たぞく!」

「上がって上がって」

「あれ?みんな来てるよ」

「ほんとだな」

玄関に入るとそこには、sメンバーの靴が置いてあった。皆の来ているのかな?太一くんに着いていってドアを開けると…

パン!パン!パン!

「」「」「花陽(ちゃん)!お誕生日おめでとう!!」「」「」

「ええ!?ど、どうして皆私の誕生日しってるの!?!」

「凜が皆に教えたんだにや!」

「そえなの?」

「そうゆうことだ皆がパーティーの準備をしてきている途中お前にバレルのはまずいから今回のイベントに誘ったんだよ」

「そう言うことでしたか」

急なサプライズに驚いちゃったけど、こうやって皆に誕生日を祝ってくれるなんて嬉しいな。

「よし花陽にサプライズすることも出来たしじゃあ恒例のプレゼントを渡しましょうか!俺からはこれだ!」

「こ、これはさっきのイベントの販売エリアに売ってた腕時計だく」

「花陽に隠れてコソツと買うのに苦労したわ」

「欲しいなくって言ったこと覚えていたの!?!ありがと太一くん!」

「どういたしましたして、またイベントに行こうな！」

「はい！」

「次は穂乃果だよ！花陽ちゃんはいプレゼント！」

「これって普通の穂むまんだよね？」

「ふふふ… 実は少し違うんだよねこの穂むまんお米を使ってるんだよ！」

「えー!? そうなの！ならよく味わって食べなきゃありがと穂乃果ちゃん！」

「えへへ… どういたしましたして」

「次は私ですね、花陽誕生日おめでどうございませす、どうぞ私からのプレゼントです」

「うわあ〜かわいい着物だ〜」

「花陽の好きな黄緑色の着物を選んだのですが、気に入りました？」

「凄い気に入ったよ！ありがと海未ちゃん！」

「どういたしましたして今度のお祭りとかで着てみてください」

「次は私よ、はい誕生日プレゼント」

「これってさっきのイベントの宮崎ブースのお米だどうして!？」

「さっきイベントで買ってかたのよ3ヶ月分はあるわ」

「うわあ〜ありがと真姫ちゃん！」

「どういたしましたして」

「次は凛だにやくはーい、かよちゃん！」

「チケツト？」

「駅前ストリートの『GOHANYA』のポイントにやく凛頑張って貯めたんだよー！」

「凛ちゃんありがと今度一緒に食べにいこー！」

「約束だにやく」

「次は私と希よ花陽誕生日おめでと」

「凄い綺麗なネックレスだね」

「うちが今年最もスピリチュアルパワーを持っている宝石を使ったから絶対運氣があがるよ」

「早速付けてみるね… どうかかな？」



## 第2章 fastliveに向けて

### 第9話 グループ名は…？

前回のラブライブ！

学校の廃校を知った穂乃果は太一さそって今一番人気のUTX高校の人気の秘密を見に行く、人気の秘密は色々あったが一番なのが話題のスクールアイドルをやっていることだった。それを知った穂乃果はことり、海未、太一を誘ってスクールアイドルを始めようとしているのだった。

朝、俺と穂乃果はいつもどうり学校に登校しいつもどうり授業を受けていた。だかいつもとは違った、昨日穂乃果にスクールアイドルに誘われて俺達は少し違っていた。

「またお前昼食。パンかよ」

「太一君たってカレーパンじゃん！」

「カレーパンとお前のパンを一緒にするな」

「もう！ん？」

俺達は昼食のパンを買いに購買に行ってきた戻っている時、穂乃果は何か気に付く。

「どうした？」

「太一君あれ見てよ」

「ん？あれってことりだよな？何してるんだ？」

「何か書いてるよ」

ことりを見ると何やら絵を書いていた。何の絵かはわからないが色ペンを使っているのだから凝っている。

「ことりちゃん、何描いてるの？」

「これだよ♪」

「うわー！可愛い！」

「凄いな！これことりが描いたのか？」

「うん！」

ことりの絵をみるとそこには可愛い衣装をまとった女の子が描か

れていた。赤色のワンピースで各ボタンは黄色で髪は赤色のリボンで結ばれていた。

「この絵の子って穂乃果だよね!？」

「そうだよ♪あと、これがことりで、これが海未ちゃん♪そしてこれが太一くん♪」

「俺のもあるのか？」

「当たり前じゃん!昨日申請書に名前を書いたからには、太一君もスクールアイドルやつてもらおうよ!」

「お……おう……でも俺がやつてもいいのか？」

「有名なA—R—I—S—Eも男の子がいるよ♪」

「そうか、わかった俺もやつてみるよ!ことり、カッコいい衣装を頼むな」

「うん♪」

ことりの絵を見てみると、後ろから海未がやって来た。

「何を見てるんですか？」

「あつ!海未ちゃん、見てみて!これ海未ちゃんの衣装可愛いよね!？」

「こ……これは……」

「ことりが描いたのどうかな？」

「絶対海未に似合うと思うぞ」

海未は絵を見ると顔色を変えた。

「このスラーつとしているのは何ですか？」

「足だよ♪」

「ことり……」

「なあに、海未ちゃん？」

ことりの返答を聞くと海未は凄い目でことりに向き両手をことりの肩へ置いた。

「いいですか?ことり、スカートは膝より下に丈を下げてください!」

「えー!そんなんじゃないよ!」

「アイドルだからと言ってスカートを短くするのが鉄則ではないはずです!」

「そうか!分かったぞ!海未足が太いからスカートをはきたくないん

だな!？」

「太一……あなたって人は……!」

「海未さん? すいませんでした、やめて……やめて!」

「問答無用!」

俺は海未に痛い1発を喰らった。

「ことり! スカートの膝より下にしてください良いですね?」

「はっ……はいー!」

「そして穂乃果?」

「何?」

「このような衣装をあなたは着れますか?」

「そ……それは……」

穂乃果はお尻、腰、お腹回りをさわる。

「よし、ダイエツトだ!」

「はあ……そうゆうことも考えてその衣装を着ようとは思わなかったんですか!？」

「それは……なかったかも」

「大体あなたは……」

「待て待て海未、衣装よりも大切なこと忘れてるぞ!？」

「何なんですか?」

「グループ名決めてないぞ!」

「二あ! そうだった! (でした)」

「お前らな……」

「そう言う太一君は何かあるの?」

「そうだな? 普通に音ノ木坂学院スクールアイドルでいいんじゃないか?」

「二……」

3人は黙り混み不安な目でこつちを見てきた。

「なんだよ?」

「それはないと思うよ太一君……」

「さすがにそれは……」

「ないよねー……」

「そんじやあ穂乃果は何か良い名前あるのかよ!？」

「穂乃果？穂乃果はね……」

話は穂乃果の妄想へ……

場所は公園、園内のふちの方に置いてある自衛隊の宣伝の置物、顔の部分が切り抜かれていて俺達4人はそこに顔を埋める。

「穂乃果は陸、海未ちゃんは海、ことりちゃんは空、太一君は市民4人そろって陸海空市民!!」

「守れ市民の平和を!!」

「なんじやそれ!?ことりと海未は分かるが何で俺は市民なんだよ!？」

「そこに突っ込みますか……?」

「他に何かないのか?」

「他に?それじゃあ……」

話は再び穂乃果の妄想へ……

ここはとある舞台、お客さんがたくさん拍手してくれるなかで俺達はグループ名を言う。

「どうも!」「どうも……」「どうもく」「どうもく♪」

「私達!!」

「穂乃果!」「海未!」「太一!」「ことりでくす♪」

「お願いしま〜す!!」

「ってそれじゃあ漫才師じゃねーか!」

「だって、これしかないんよ」

「俺達はスクールアイドルをやるんだぞ!漫才やってどうするんだよ!」

「じゃあ、もうあれしか方法はないよ!」

「あれって何だよ?」

「それは……」

そう言うとき穂乃果は箱を使って何かを作り始めた。

~~~~~※~~~~~

「これでよし!」

「何かと思っただけの箱かよ……」

穂乃果はただの箱に入れ口と取り出し口を付けて廊下に置いた。いわゆる他人頼みということだ。

「はあ……誰かがやってくれれば良いけどな」

「信じるしかないよ！」

「今日海未達と今後の予定を話し合うか？」

「そうだね、やらなきゃいけないことがいっぱいあるよ！作曲でしょ作詞でしょ……」

「なら直ぐに帰らないとな」

「うん！」

俺と穂乃果は今後の予定を話し合うため海未とことりよりも先に帰る。

~~~~~※~~~~~

「さき、入って〜」

「おじやましま〜すって！汚いな〜」

「えっ!?うわ！見ないで太一君！」

穂乃果の部屋に入ってみるとそれは悲惨だった。机の上には宿題のやりっ放し、床には本が落ちていた。

「これはひどいな……よし！」

「えっ？」

そう言う俺は穂乃果の部屋を片付け始めた。

〜10分後〜

「これなら良いだろ？」

「凄いね！10分でこんなに綺麗になっちゃうなんて！」

10分程掃除すると汚かった机や床はあつとゆうまに綺麗になった。

「これなら海未が来ても怒られないな」

「さすが！太一君ありがと！」

ピンポン

「誰か来たらしいな」

「出てくるよ！」

そう言う俺と穂乃果は下へ降りていき玄関の扉を開ける。

「ことりちゃん！いらっしやい！」

「おじやましまゝす」

「よう！ことり」

「あゝ太一くん来てたんだ」

「色々あつてな」

「ことりちゃんお饅頭食べる？」

「貰おうかな」

「じゃあ、取ってくるよ！」

そう言うとお穂乃果は奥の部屋へ入っていった。

「そっういやことり？」

「なあに？」

「海未が学校で衣装を変えろって言ってたけど直した？」

「あつ！やってない……」

「おいおい……大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、海未ちゃんにすっかり謝れば許してくれるよ」

「だと良いけどな……」

ことりは海未に言われたことを忘れてしまったらしい。海未にばれたらヤバイぞ。

「お待ちせゝ穂むら限定穂むら饅頭どうぞ」

「いただきますーす！」

俺達が呑気にお饅頭を食べている頃遅れて海未が穂乃果の家に着いた。

ガラガラ

「すいません、弓道部に顔を出しに行っていたので遅れてしまいました……何をしているんですか？」

「いらっしやい海未ちゃんお饅頭食べる？」

「今お茶入れるね」

「うまいぞ！この饅頭」

「……」

お饅頭を食べている俺達をみて海未は黙ってしまった。

「どうしたの？海未ちゃん？」

「あなた達ダイエットをするって言っていますませんでしたか？」

「あー！そうだった！」

「はあ……あなたって人は！」

「ごめん海未ちゃん決して忘れていた訳じゃなくて」

「忘れていたってことですか？」

「ごめんなさい！」

「海未、穂乃果もこうやって謝っているんだから許したれよ」

「太一が言うなら仕方ないですね。」

「ありがと海未ちゃん！」

「その代わり明日朝練します私とマンツーマンで」

「そんなく海未来ちゃんそれは勘弁してく！！」

穂乃果の声が家中に響き渡った。

## 第10話 作曲者は!?

朝、早起きするのが苦手な人もいるんじゃないだろうか？学校や勤務先が家から遠かったり、朝練等で早く家を出ないといけない日は早起きしなければならぬ時もあるだろう。まさに今日の俺がそうだ、穂乃果達とダイエツトをする約束をしていたのにも関わらず俺と穂乃果、ことりはそれを忘れてしまいその事が海未にバレてしまいダイエツト謙、基礎練習を強制的にやらされるのだ。

『ブーッ！ブーッ！』

携帯の目覚まし機能が鳴り響き俺は目が覚める。

「あーっ……眠たい」

時刻は朝の6時30分穂乃果を迎えに（起こしに）行かなくてはならないので更に早く起きなければならなかった。

俺はいつもどうり起きたらトイレに行き制服に着替えてテレビを見ながら朝食を食べる。

「行つてきまーす（！）」

俺が家を出ると同時に穂乃果も家を出ていた。

「穂乃果、今日も家を出るのが早いな？」

「やっぱり太一君に起こされると海未ちゃんに怒られるからね！」

「じゃあ、これから俺は起こさなくていいな」

「えくたまには起こしてよ〜」

穂乃果と合流してそんな話を俺達は朝練をする場所である神田明神に向かう。

「あつ！穂乃果ちゃん！太一くん！こつちだよ〜♪」

神社に着くと海未とことりが先に待っていた。

「二人ともおはよう！」

「おはよう、ことり、海未」

「おはようございます、穂乃果、ちゃんと朝起きれましたか？」

「ちやくんと1人で起きたよ！」

「穂乃果にしては珍しいですね」

「誉めて誉めて！」

「三日坊主で終わらなければいいですけど……」

「大丈夫だよ！多分……」

「こっち見るな！」

穂乃果は目を海未から反らし俺の方を向く。

「まさか自分で起きたと言っていましたけど太一に起こしてもらったの  
では？」

「違うよ！ちゃんと今日は自分で起きたよ！」

「本当ですか、太一？」

海未は凄いい目で俺の方を向くその目はただ真実を知りたい嘘厳禁  
でここで嘘をつくと後々厄介だ、ここは本当のことを話す。

「ああ……今日は穂乃果を起こしてないぞ、朝迎えに行こうと家を出  
た丁度に穂乃果も家を出ていたから本当だぞ！」

「太一が言うなら本当なのでしよう……では気を取り直して朝練を始  
めましょう」

「「はーい」」

海未の掛け声と共に朝練が始まる。

「まずはストレッチからです足などがつらないようしつかりとやって  
ください」

「よし！やるぞ！」

まずはストレッチから始まりいろいろな体勢で体をやわらげる。

「次はこの階段を往復2回やってください」

「よし！これは余裕だろ？」

「穂乃果もこれならいけるよ！」

「では、やってみて下さい」

「よし行くぞ穂乃果！」

「うん！」

俺は穂乃果と一緒にスタートした。最初はスピードも早くピョン  
ピョン！と下ったが、上がるときに体力を消費してしまい息も切れて  
いた、2週目に入る時には既に走ることが出来なくなっていて歩いて  
上り下りしていた。

「はあ…… はあ…… お、終わった……」

「やつと……ゴール……」

「はあ……情けないですね」

「まさか、ここまで体力が無くなっているとはな」  
「びっくりしたよ……」

「あなた達2人がのんびりと階段を上り下りしているせいで、もう登校時間ですよー！」

「まじで!? もうそんな時間?」

「気付けば時刻は8時10分登校時間まであと20分程しかない。

「今日の朝練はここまでです! 午後からは今後の事について相談したいことがありますので居残りしないように、特に穂乃果!」

「わかってるよ! 時間がないから早く行こー!」

「俺達は近くの更衣室で練習服から制服に着替えて学校に向かった。

↳放課後↳

「昼休みだし少し時間あるから今後の午後練が出来る場所を探そうぜ」

「そうだね! レッツゴー!」

「俺達は午後練が出来る場所がないか校内を廻る。

場所が変わって体育館。

「体育館はバスケット部とバレー部が使ってるな?」

「舞台の上が空いてるけど……狭いからダンスの練習には向いてないね……」

更に場所が変わって外のグラウンド

「外はソフトボール部、フットボール部、陸上部がぎゅうぎゅうに使ってるからむりそうだな」

「中庭なんてどう?」

「中庭は他の生徒がいっぱいいるので私は反対です!」

「そんな〜」

「だったら校舎内の空き教室なんてどうかな?」

「流石! ことりちゃん! ナイスアイデア!」

しかし物事はそう簡単には行かない

「うーん!」

穂乃果は空き教室の扉を開けようとするが鍵が掛かっている事が出て来ない。

「どうして開かないの!」

「空き教室は鍵が掛かっているので使いたかったら先生に相談しなくてはいけないですね」

「じゃあ、先生の所に行ってくる!」

「まてって穂乃果!」

「まてって下さい、穂乃果!」

「まてってよく穂乃果ちゃん」

そう言う穂乃果は走って職員室に向かい俺達がその後を追った。

〜職員室〜

「失礼します!」

職員室に着いた俺達は中に入り担任の山田先生の所へ向かう

「山田先生!ちよつと良いですか?」

「ん?高坂と園田と南、黒崎も何だ?」

「実は空き教室を使いたいです...」

「空き教室?何で?」

「何で?スクールアイドルの練習に...」

おい待て穂乃果!いきなりそれは不味いだろ!絶対に笑われるやつだこれ...

「お前らがアイドル!?ふっ...」

「は...鼻で笑った...」

「更に黒崎もアイドルやるのか!?笑っちゃおうよ!」

「いやー、別にそんな...」

「太一君もやるって言ったじゃん!なんでやめちゃうの」

「ダメだ穂乃果!ここは戻ろう!」

「ちよつ...止めてよ太一君!」

この場の空気に耐えられなかった俺は穂乃果の腕を引っ張って職員室を出ていった。

「もう!何で帰っちゃうの?」

「わりー山田先生のあの顔を見ると、もう無理だった」

「じゃあ何処で練習するの？」

「あそこしかないだろ？」

「「あそこ？」」

俺達は階段を上がり最上階の屋上へ上がる。

「屋上か：：」

「雨が降ったら出来ないけど贅沢は言えないね」

「しかたない：：今は我慢だな」

「よーし！じゃあ少しダンスと歌の練習しよ！」

「そうだね♪じゃあ早速始めよ♪」

「おう！（うん！はい！）」

そう言う俺達は横一列に並び前を向く。

「「：：：：」」

「そーいや歌が無かったな：：：」

「これじゃあ意味が無いじゃないですか!？」

「そーいや穂乃果、1年生の赤毛の子に作曲のお願いしたのか？」

「あゝ!?忘れてた!」

「おいおい：：：今の時間帯はあの子は多分帰っちゃったと思うから

明日聞いてみようぜ」

「そうだね」

~~~~~\*~~~~~

「こんばんは」

「あらいらっしやい、新作のお団子が出来たの、食べる？」

「いえ、遠慮しときますダイエツトをしなければいけないので」

場所は変わって穂乃果の家、昨日と同様今後の活動の予定等を話し合うために4人全員が集まる。俺と穂乃果、ことりの3人は先に穂乃果の家に向かったが海未は弓道部に顔を出してから来るため俺達よりも遅くやって来た。

穂乃果のお母さんに挨拶をした海未は階段を上がり穂乃果の部屋に向かう。

「海未ちゃんいらっしやい、お団子食べる？」

「お茶入れるね♪」

「この団子昨日のお饅頭とまた違う味がして美味しいぞ」

海未が見た光景は悲惨だった俺達3人は昨日と同様ダイエットをする事を忘れてダラダラと和菓子を食べていた。

「あなた達……ダイエットは？」

「「あー!!!」」

「はあ……全くあなた達は……」

「穂乃果、ことり直ぐにそれを片付けろ！」

「うん！」

俺達は海未に怒られる前に机の上に置いてあったお団子等を片付けて本題に入る。

「よし、じゃあ本題に入ろう。歌の事だが作曲は1年生の子にお願いして許可してもらったら良しとしよう、しかし問題は作詞を誰がやるのかだ」

「穂乃果がやれば良いじゃないですか？」

「それは無理だよ、だって穂乃果は……」

それは、さかのぼること数年前小学校低学年の事らしい国語の作文を書くことがあったらしい、その時の穂乃果の作文は……

「お饅頭ウグイス団子もう飽きた!!」

と言ったらしい、それを聞くとこいつに作詞をやらすわけにはいかない。

「それを聞くと穂乃果にやらすわけにはいけないからな」

「だから穂乃果には無理かな……」

「じゃあ太一はどうなんですか？」

「俺はライブのセッティング等をやらないといけないから無理だな」

「じゃあ……な、何ですか？」

「じー……」

俺達3人は海未を見つめる。

「海未、さつき穂乃果から聞いたぞ、中学の頃ポエムを書いていたらしいな」

「な……!」

「読ませてもらった事もあったよね♪」

「あ……っ！」

「あっ！逃げた！」

「追うぞ！」

海未は俺達の言葉を聞くと顔を赤くし穂乃果の部屋を出ていき俺達の後を追う。

「捕まえた！」

「離して下さい！」

「ひとまず部屋へ戻すぞ！」

「うん！」

暴れる海未を俺と穂乃果が引つ張って部屋へ戻す。

「はあ……はあ……海未頼むよ……お願い！」

「海未ちゃんお願い！」

「お断りします」

海未は断固拒否をしていた、仕方ないここは秘密兵器だ！

「仕方ねえ、ことり！お前の出番だ！」

「ことり？」

そう言われると、ことりは手を胸に当てて……

「海未ちゃん……オネガイ！」

「はっ……！」

「グハッ……！」

やばいやばい！海未にやるはずが俺にまで影響するぞ！ヤバイ

……ヤバスギル……オチツケ……

「ずるいです……ことり……」

海未はことりに参ったのかすんなり受け入れてくれた。

「良いの!?海未ちゃん！」

「わかりました。作詞は私がやりましょう、しかし、ライブまでの練習メニューは私が作ります！良いですね!？」

「二!わかった!（うん!）二」

「よし、あとは1年生の子だな！絶対勧誘するぞ！」

「おー！」

~~~~~※~~~~~

昼休み俺達は作曲をお願いするために1年生のいる教室へ向かった。

「あの子は……いないな？」

「すみませーん、ここに西木野さん居ますか？」

辺りを見回すがこの前見た赤毛の子は見当たらなかった。廊下を見ると探していた赤毛の子が歩いてきた。

「穂乃果いたぞー！」

「本当だ！西木野さーん」

穂乃果は彼女を見つけると走り彼女の所へ向かう。

「ヴェッ！」

「やっと見つけたよ〜」

「何ですか？」

「ちよつと来て！」

そう言いうと穂乃果は彼女を屋上へと連れていく。

~~~~~※~~~~~

「お願い！西木野さん、力を貸して下さい！」

「オコトワリシマス！」

「そこをなんとか！」

「オコトワリシマス！」

「作曲だけでもいいから！」

「失礼します！私アイドルには興味ないんで……」

そう言うと彼女は下に降りていった。

「オコトワリシマスなんて海未ちゃんみたい」

「それが普通なんです！」

「どうする、曲は？」

「曲は他のスクールアイドルの曲を使うしかないですね……」

「まだだよ！」

「えっ？」

「まだあの子に言えば分かってくれるかもしれない！」

「そうだな！俺も諦めきれない！」

「だよね！よし！もう一回行こう！」

「いや、待てここは俺に任せろ！」

「でも……………」

「穂乃果、ここは太一に任せましょう」

「分かったよ……………」

「じゃあ放課後に音楽室に行ってみるか？」

そう言っていると昼休みの終了のチャイムが流れる。

「そーういや昼休みだったのを忘れてた!？」

「すぐ教室へ戻るぞ！」

「うん！（はい！）」

俺達は走って教室へ戻って行った。

# 通算UA5000突破記念 太一と海未のFuture restory

この物語は海未と太一が付き合っていたらこのIFの世界、すこしとある休日を見てみよう……

『チュン、チュン、チュン……』

「う……うーん！もう朝なんですかね？」

すずめの鳴き声と朝の太陽の光で園田海未は目を覚ます。

ここは海未の家、今日は隣の布団で寝ている太一と今日1日一緒に過ごす約束をしているらしく海未は朝から機嫌がよかった。

「まだ寝ていますね、今日1日一緒に居てくれるって約束した人が私よりもまだ寝ているなんて……って何で私の布団でしかも隣で寝ているんですか!？」

横を見ると太一が寝ていた、目を擦って何回も見るが確かに太一が横に寝ているのだ。

「たしか昨日の夜は別々の布団で寝ましたよね？はあ……私の布団で寝ている時点で重罪なんですから！もう……起こしてあげますか……」

海未は人差し指を太一の頬つぺたに当ててツンツンする。2、3回ツンツンすると太一は夢の中から目覚めた。

「ん……何だよ？人が気持ちよく寝とったのに起こしやがって……」

「今日1日一緒に過ごすって約束した張本人が私よりも早起きしないといけないのに寝坊しているので起こしました」

「それにしても起こす時間が早いんだよ！今何時だよ？」

「今ですか？5時過ぎですね」

「5時!？」

太一は今の時間を海未から聞くとあまりにも早い時間

なので驚いていた。

「私はいつもこの時間に起きています、もしかしていつも私が早朝の稽古の鍛練を知らなかったんですか？」

「全く知らなかった、いつも6時30分位に起きていると思った」

「全く……私の彼氏なんですからパートナーの生活習慣位知って下さい」

「悪い……」

「昨日の約束した通り、今日1日私と一緒に過ごす約束をしたんですからやってももらわないといけません！」

「わかった！わかった！じゃあ何をするんだ？」

「最初ですか？ひとまず動きやすい服装に着替えて外で待って下さい」

「了解！」

太一は動きやすい服装に着替え、外で海未が来るのを待つ、早朝なのか外の温度はかなり寒く海未を待っている間太一は体を暖めていた。

「お待たせしました、では始めましょうか」

「何をするんだ？」

「まずは普通に準備体操です、最初は長座体前屈です、足を曲ずに手足の爪先に当ててください、先に私がやるので太一は後ろからゆっくり押ししてください」

「わかった」

そう言うと海未は地面に座り両足を揃えて伸ばし、手を揃えていつでも出来る状態にする。

「ではお願いします、ゆっくりと押しして下さい」

「おう、行くぞー！」

太一は手を海未の背中に手をおき背中を押す。

「そんな感じですか、もうちょっとやってください」

「こうか？」

「そうです……そう……痛たた、痛いです！ストップ、ストップ！」

「ああ！悪いやり過ぎた」

海未に言われ太一はあわてて手を海未の背中から離す。

「大丈夫か、海未？」

「はあ……痛かったです……次は太一の番です！痛がっても止めませ

んからね」

「わ……わかった」

次は海未と太一が交代して太一が押され海未が押す方になる。

「では、行きます！」

「おう！来い！」

そう言うとき海未は太一の背中に手をやり背中を押す。

「どうですか？」

「余裕だな」

「ではこれならどうです？」

海未はさらに力を入れて太一の背中を押す。

「お前……これが本気か？」

「なっ……！言いましたね？なら、本気で行きます！はああ！」

太一の言葉を聞いた海未は遂に本気モードになって太一の背中をおもいつきり押す。

「どうですか？これならあなたもギブアップじゃあないですか？」

「お前、本当に本気なのか？」

「はい……結構強めにやっているつもりなんですけど……太一の顔を見るとつらそうには見えないですね？」

海未は太一の顔を見る。太一は辛そうな顔を一切しておらずむしろ幸せそうな顔をしている。

「ふふふ……何で辛いのか教えてやろうか？」

「私も気になっていました、ぜひ教えて下さい」

「それは……」

「それは？」

「海未の胸が背中に当たっているから痛くても我慢出来るんだよ！」

と太一は親指を立てて答える。

「当然じゃあないですか?!当たっているんじゃないかと当てているんですか……うええ！」

海未はようやく太一が言った言葉を理解し突然驚く。

「なっ！なんだよ急に!?!」

「当たってる！胸が!?!キヤーー!?!」

海未は自分の胸が太一の背中当たりに気づきとつきに背中から離れ距離を置く。

「はあ……全く太一はいやらしいんですから……とりあえず準備運動はこれくらいにしてこの後のトレーニングのメニューを走りながら言いますから聞いてください」

「お……おう……」

そう言うと二人は家の敷地内から外の道路に出る。

「まず最初はウォーミングアップにこの辺の道路を10周します。そのあとは竹刀の素振りです。太一の目標は最初のウォーミングアップのラーニングでダウンしないことですかね。では！頑張ってくださいよ！」

海未は目をキラキラさせながら太一に朝練のメニューを伝える。目をキラキラさせている理由は簡単でただ自分の考えたメニューを他の人にやらせる事が出来るからである。以前穂乃果達にやらせようとしたが厳しい過ぎると反発があつて行えなかつた分太一にやらせることで気合いが入っているのだろう。

「最初はランニングか！久しぶりに走るから腕が鳴るぜ！」

「良い返事ですね、ではペースを上げるので着いてきて下さい」

そう言うと海未は走る速度を上げていき太一は海未の後を追う感じで走る。

~~~~~※~~~~~

「はっ……はっ……どうです？このペースなら太一も……つて！全然着いてきているんですけど……むー！普段運動してないのに生意気ですね……」

走り始めて7週目、最初の頃と比べるとペースもかなり早くなつていて、流石に疲れているだろうと後ろを見ると太一は余裕そうな顔で疲れを見せず普通に走りながらついてきた。

「こんなもんか、海未？」

「うう……言わしておけば！ならもつとペースアップです！」

海未は更にペースを上げて速度を上げる、だがペースアップしても太一は着いてきた。

「何で付いて来れるんですか!?これじゃあ毎朝走っている私の面目が丸つぶれじゃないですか!?こうなったらもつとペースアップです!はぁー!!」

海未は更にペースを上げて本気で走って速度をグングンと上げる。本気で走っているため、だんだん太一との距離は離れていった、そしてグルーッとコースを1周して太一を逆に後ろから追い越した。

「どうですか?太一と1周分差をつけました!」

海未はどうだ!?と自慢気に太一に言う。

「お前いくら俺が付いて来れるからって本気出しすぎだぞ!」

「これが……私の……園田海未の実力です……はぁ……はぁ……、では次のメ……メニューに……いき……ま……しょう……」

海未は持つている体力を全て使ってしまったのか、次のメニューに入ろうとした時に倒れてしまった。

「おい、海未!大丈夫か!おい!」

「すう……すう……」

「何だよ……結局は眠たくて倒れちゃったのか?仕方ない……ここは優しい俺が部屋の布団まで連れていくか」

そう言う太一は海未に近付き右腕に頭を左腕に足の間接を持ち持ち上げる俗に言うお姫様抱っこである。海未を抱っこした太一はそのまま海未を寝室の布団に寝かせリビングで早朝のコーヒーを飲むもうとしていた。

~~~~~※~~~~~

「うう……うん?あれ、天井?確か朝の稽古をしていたはずですが……どうして布団に?」

太一が倒れた海未を布団で寝かしつけてから2時間半後ようやく海未は目を覚ます。

「あれ太一は何処に?」

海未は辺りを見回すが誰もいなかった。海未は起き上がりリビングに向かう。

「おはよう海未、もう体は大丈夫なのか?」

「はい?どうしてそんなことを……?」

「お前、覚えてないのか？」

リビングには太一がおり海未に気付いた太一は彼女のもとへ駆け寄り心配そうに聞くが海未は自覚しておらず太一に事情を聞いて始めて知る。

「そう言えば確か太一と朝練で少し本気で走ったら何かフラツときて……そうでしたか……倒れてしまったのですね……うーん、倒れたことが情けないです……たった少しのラーニングで倒れてしまうなんて……まだまだ鍛え足りないですね……なら明日からもっと早く起きて倍のメニューを増やさないと……」

「おいもつとやるのか!? やめとけよ」

海未は自暴自棄になっており太一の言葉が耳に入っていないかった。このままでは海未が危ないと思った太一は海未におもいきり声を掛ける。

「だめです明日からなんかじゃ遅いです!これから朝練のやり直し……」

「おい、海未!今日は体を休めろ!」

「え?体を休めですか?大和撫子たるものこれしきの事で休んでられません、それに洗濯、掃除等をしないといけないんですから」

「なに言っているんだ?今日一日俺が家事をやる!」

「ほ……本気で言っているんですか?」

「当たり前だ!」

今日一日太一が家事をやると聞いた海未は心配そうに言う、無理もない一緒に暮らす前の彼の家に行ったが部屋は服や漫画等が散らかっておりそれを見ている海未は信用していなかった。

「いつも私が洗濯して、私が掃除して、私が料理をしているのを、知っているんですよ?」

「見ていて大変そうだから俺がやるって、言っているんだ!」

太一の目を見ると、それは本気の目をしていた、その本気の目をしたのは久しぶりだった。太一から告白された時、プロポーズされた時の目と同じだった。その目を見た海未ら首を縦に降った。

「そうですか……なら今日はお言葉に甘えて休まして貰いましょうか

……」

そう言うと太一は早速家事に取りかかった。一方海未はリビングのソファアーに座りながらテレビを見ていた。

「家事をお願いしたとは言ったものの少し心配ですね……よし！少しだけ様子を見ていきましよう。だめならだめで手伝ってあげればいいですし」

そう言うと海未は太一が家事をやっている脱衣場に行く。

「早速やっていますね……って何も見境もなく洗濯機にいられているんですか!？」

「駄目なのか？」

「駄目です！洗濯物は色物と白物は分けなくちゃいけないんです！ほら、ここにネットがあります、ここに入れてください」

「そんなものもあるのか？」

太一は初めて聞いたらしくカルチャーショックを受けながら色物の洗濯物をネットの中へ入れていく。

「そう……そうやってやってください、でもネットにはあまり詰め込まないで下さい詰めすぎると汚れが落ちにくくなりますので」

「はい、はい」と

「待って下さい靴下と下着は一緒に入れないで……そ、それは!？」  
太一の手を見るとそこには海未の好きな色である水色の綺麗な下着を持っていた。

「……これは、下着!？」

「それは私の下着!?!見ないで下さい！触らないで下さい！そして匂いを嗅がないで下さい！」

「待って待って！俺は匂いまでは嗅いでないぞ！」

海未の顔を見ると壮絶な顔をしていた余りにも凄く言葉では表せられないほどである。

「問答無用！覚悟！」

「やめて海未さん！あー!!!」

家中に太一の悲鳴が響き渡る。ホラー映画の様にえげつない声だった。

「もう！早く洗濯物を片付けて下さい！次やったら命はないですよ」  
「匂いは嗅いでないのに……」

海未のパンチは見事太一にクリティカルヒットして太一の顔は赤く腫れていた。

「この下着は私が後で洗濯物しますので返して貰います」

「もともと海未が洗濯かごに入れているからいけないんじゃないか！」

「いつも私が洗濯していたのですっかり忘れていました……さあとりあえず色物を先に洗濯しましょう」

「わかった、洗剤は……あった、よつと」

太一はそばにあった洗剤を軽量カップに入れて洗濯機に入れようとする。

「待ってください、その洗剤は漂白剤入りだから色物に使っては駄目なんです！」

「せ……洗剤にまでそんな効果があるのか？」

「はあ……色物はこつちの水色の洗剤を使ってください、私に白い服だけ着てろって言うんですか!？」

「いえいえ！一切そのようなことは思っていないません！」

「もう！あと柔軟剤を入れ忘れていますよ」

太一は柔軟剤を入れると聞き辺りを見回す。

「あとう……柔軟剤はどれだ？」

「柔軟剤が分からない!?はあ……ちよつとどいて下さい」

太一に呆れた海未は太一と交代し洗濯に取りかかる。

「私が華麗な洗濯って物を見せてあげます。良いですか？柔軟剤はここにに入れて下さい、洗剤と同じように水の量に合わせてカップで量を量ります。カップは小さいので慎重に……」

と海未が言おうとした瞬間太一は洗剤を少しこぼしていた。

「言っているそばからカップから溢れているじゃないですか！私にも少し付いていますし……うう……気持ち悪いです……」

太一は気を使いタオルで海未の胸に付いている洗剤を拭こうとする。

「何どさくさに胸を触ろうとしているんですか？」

「いや洗剤が付いているから拭いてあげようかなと……」

「このくらい自分で拭けますよ」

「そ……そうか」

海未は少し顔を赤くし恥ずかしながら洗濯を続ける。

「洗濯は私がやりますから他のことをやって下さい」

「わかった」

そう言う太一は他の家事に取りかかった。

~~~~~※~~~~~

洗濯を終えた海未は体を伸ばしリビングに向かう時刻はお昼時の12時半を回ったところだ。

「はあ……やつと終わりました、気のせいでしょうか？ 普段の洗濯よりも疲れた気がします、誰かに何かを教えるっていうのは想像以上に疲れるものなんです。さて太一が昼食を作ってくれるとは言っていました、ちゃんと作れているんでしょうか？」

そう思いながら海未は、太一が料理をしているキッチンに向かう。

「何かしら？ 香ばしい匂いを通り越して焦げた匂いは？」

キッチンに近づくにつれて香ばしかった匂いは段々焦げた匂いになっっていく。

「まさか!？」

海未は何か異変に気付き急いでキッチンに向かう。

「うっわー！ こげちゃったか？ 火力を間違えたかな？」

「やっぱり変な匂いがすると思っただら案の定焦げ付かせていますね……どうやったらチャーハンをここまでする事が出来るんですか!？」

太一が作っていたチャーハンを見ると黒く焦げており、なぜかネチヨネチヨしていた。

「最初はよかったんだぞ！ だけどあんまり上手くないから火を強くしようと思って油を大量に入れたらこうなった……」

「もう！ 何でそんなことを思い付くんですか?！」

「すいません……」

「私がお手本を見せます。見て下さい」

洗濯の時と同様、海未は太一と交代し代わりに料理をする。

「まずはフライパンに油をたっぷり垂らします。そのあと解いた卵を入れます。それで卵が油を含んで半熟になったところで素早くご飯を入れて素早く混ぜるんです！そしたらご飯粒に卵の膜が付いてくっ付きにくくなります。混ぜたら刻んでおいた玉ねぎやお肉などの具材を入れて後は強火でほぐすだけです」

「凄いな!?海未!」

「これくらい当然です!では一回味見してください」

「どれどれ?」

パク!!

「どうですか?」

「スツゴク美味しい!作り方はレシピと一緒になのに少しアレンジしただけで、こんなに味が変わるんだ!」

「私を作ったんですから当たり前です!ではこれをお皿に盛り付けて……完成です!では冷めない内にいただきます!」

「おう!」

~~~~~※~~~~~

「さあ午後から掃除をしましょう」

昼食も食べ終わり午後からは一番大変掃除を行う。太一と海未が住んでいること家はわりと広く廊下など通路が長いので結構苦労する。

「掃除か、これなら海未に頼らず一人で出来るな、海未今度こそ休んでろ!」

「休んでろですか?あのですね、まともに洗濯も出来なければチャーハンも作れない人が掃除をする事が出来るんですか?」

「そこまで言わなくても……」

海未の一言で太一はトドメを刺され一人で壁の縁で落ち込む。

「ごめんなさい……私もきつく言い過ぎました。でもですよ……何事も経験のない人がやろうとしてもできないものは出来ないんです。だから……」

「だから?」

「今日は私が太一に家事を教えて差し上げます」  
「本当か!？」

それを聞いた太一は目をキラキラさせながら海未に近づく。

「ですので、今日は私が教えるのでしつかりと覚えて次からは少し位私を楽にさしてくださいよ」

「よし!頑張って覚えるぞ!」

「まずは掃除機がけです!」

海未は倉庫から掃除機を取り出しコードをコンセントに取り付け準備を整える。

「掃除機はこうやって床の米地にそって掛けて下さい、そうするとノズルのブラシが汚れやゴミをかき出して入り込んだ汚れを取ってくれます。どーぞ次は太一の番です、やってみてください」  
「よし!まずは掃除機を床の米地にそって動かすんだな」

海未は掃除機を太一に渡し、太一は海未がやったのを真似しながら掃除機を掛ける。

「どうだ?こんな感じか?」

「そうです、中々、見覚えが良いです。けど言い様によっては私の教え方が上手いからでしょうか♪」

「そうかもな♪」

「はははは!」

「ふふふ♪」

二人は仲良く笑いながら仲良く掃除を続けた。

~~~~~※~~~~~

掃除をやり始めてから数時間時間後、太一にある程度掃除の仕方を教えた海未は太一に掃除を任せ晩御飯の支度ちよをしていた。

「あとはスープを煮込むだけですな...」

「ふう... 終わった」

「どうです?掃除は終わりましたか?」

「ああ!そこらじゅうくまなく綺麗にしたぞ」

「お疲れさまでした。こちらもうすぐで晩御飯が完成するのでソファで待っていて下さい... ちよっと!なに抱き着いているんです

か!?!」

キッチンにきた太一はそのままふらふらとまるでお酒に酔ったみたいに歩き海未に抱き着いた。

「疲れたらもう立っていられない〜」

「疲れたからって、このタイミングで抱き着かないで下さい! スープを煮込んでいるんですから危ないじゃないですか」

「えーちよつとくらい良いじゃん!」

「せっかく太一の好物を作ったのにそんなことをするならあげませんよ!」

「え!? それだけはご勘弁を...」

海未が太一にそう言うのと太一はとっさに立ち上がり抱き着くのをやめる。

「ふふ♪ 分かればいいです。それでは最後の気力を振り絞ってテーブルに向ってください、それが太一の最後のミッションです。」

~~~~~※~~~~~

「ごちそうさまでした!」

「ふうー美味しかった!」

「では私は食器を洗いますので太一は先にお風呂に入ってください  
い」

「ちよつと待ってくれ海未」

「何ですか? 急に?」

「明日って海未の誕生日だよな?」

「そうですね?」

「はい! 誕生日プレゼント!」

そう言うのと太一は自分のズボンのポケットからリボンで包装してある袋を海未渡す。

「こ... これ私にですか!?!」

「そうだよ」

「開けてもいいですか?」

「どうぞ!」

そう言われた海未は袋を開けて中身を取り出す。

「これは！綺麗なネックレスですね」

「だろ！ちよくちよくと貯金してやっと買ったんだ気に入った？」

「すごく気に入りました！」

太一があげたのは水色の弓矢の矢が付いているネックレスだった  
太一曰く割と高いらしい。

「喜んでくれて良かったよ明日渡そうか迷ったんだがみんな来るから  
今日にしようと思ったんだ」

「そう言うことでしたか、ありがとうございます。では…」

そう言うとき海未は席を立ち上がり太一の隣にきて太一のほっぺた  
に

キスをした。

「ヴえ!?急にどうした？」

「これは私からのお礼です。これから一緒にいて下さね♪」

~~~~~※~~~~~

「わっ！あわわ私は何という夢を見てしまったのでしょうか…」

海未は夢から覚めて現実世界に戻って来た。

(はあ何という夢を…これは早く忘れなくては！)

時間は進んで朝の登校の時間

「おはよう！ことりちゃん！」

「おはよう、ことり」

「おはよう♪穂乃果ちゃん、太一くん」

「あれ海未ちゃんは？」

「まだ来てないよ」

「海未が遅刻とは珍しいな…」

「あっ！来たよ！海未ちゃん！」

「あっ、すみません遅くなりました。」

申し訳なさそうに海未は謝る

「海未ちゃん遅刻したけどなにかあったの？」

「いえ別に何もありませんよ

「ほんとかな？」

穂乃果はジト目で海未を見る。

「何もありません！」

「本当は夢で俺が何かしてたんじやねーのw？」

『ギク！』

「おっ！なんかあんな… って海未？なに怒っているんだ？」

「太一… 知ってしまいましたね？」

「え？何を？」

「問答無用！！」

「まて海未あーーー！！！！」

路上で太一の声が響き渡った。

## 第11話　これが私達の曲!! 私達のグループ名!!

放課後、俺は1年生の赤毛の女の子に会うために1年生の教室へ向かう。今年の1年生は入学者が少なく1クラスしか無いため簡単に教室の場所が分かる。

「これで忘れ物はないね」

茶髪の眼鏡を掛けた女の子が自分のロッカーに忘れ物はないか確認し帰ろうとした時たまたま通りかかった3年生の先輩が何か喋っていた。耳を傾けると何やらこの学校でアイドルができた事を話していた。

「そーいや知ってる?」

「何々?」

「この学校に廃校を阻止するためにスクールアイドルが出来て屋上で練習しているらしいよー!」

「そーなの?この学校にそんなのが出来たんだ!」

耳を傾けて聞いていると後ろからショートヘアの女の子がやって来た。

「かよちくん帰るにや〜」

「うん……あれ?」

「どうしたにや?」

「あれってこの前の始業式に出てた男の子だよね?」

「本当だにや!」

1年生の教室にやって来た俺は教室のドアを開けるがすでにみんな帰っており教室の中には誰一人いなかった。

「うわ〜誰もいないな、みんな帰っちゃったかな?」

「にや!?!」

「わ!?!びっくりした!」

教室の中を見ていると急にショートヘアの女の子が喋りかけてきた。

「どうしたんです?」

「あの子を知らないか?」

「あの子?」

「西木野さんですよ? 歌の上手い...」

眼鏡の女の子に名前を言われ思い出す。よし居場所を知っているかもしれない聞いてみるか。

「そうそう西木野さん、そんな名前なんだ?」

「はい... 西木野真姫さん、何かあつたんですか?」

「用があつただけけどこの感じだともう帰っちゃってるよな...」

「音楽室じゃないですか?」

ショートヘアの女の子は音楽室じゃないかと答える。確かにこの前の放課後にも音楽室に居たな。

「音楽室?」

「あの子あんまりみんなと話さないんです。休み時間は図書室で過ごすし放課後は音楽室ですし...」

「そうなんだ? ありがと、二人とも!」

俺は二人に彼女の居場所を聞き音楽室に行こうとした時。

「あの!」

「ん? どうした?」

「スクールアイドル頑張ってください!」

「ああ! ありがと、じゃあ!」

眼鏡の女の子にお礼をし俺は二人を後にする。

~~~~~※~~~~~

音楽室に向かうと次第に彼女の歌声とピアノの曲が流れてきた。やっぱり前に聞いていた時もそうだが相変わらず良い歌を歌っている。これは何としても彼女にスクールアイドルをやってほしいな。

ちやうど音楽室に着くと彼女の演奏も終わり俺は音楽室に入る。俺に気付いた彼女はヴえ、とした顔でこつちを見ていた。少し戸惑ったが俺は彼女の前まで歩き本題を喋る。

「で、私に何の用ですか?」

「やっぱりもう一回お願いしようと思ってさ、今回は穂乃果じゃなくて俺が来た」

「しつこいですね?」

「そうなんだよなく俺もよく海未に言われるんだよな」

「私は、あうゆう曲を聞かないですから」

「何を聞いているんだ？」

「クラツシツクとかジャズとか……」

「へ〜どうしてなんだ？」

俺は彼女に何故クラツシツクとジャズ等しか聞かないかを聞く、確かに人それぞれ好みはあるがなぜそれしか聞かないのか逆に気になる。

「軽いからですよ！なんか薄っぺらくて、ただ遊んでいるみたいで……」

そう彼女は強気で答える彼女の中ではスクールアイドルなどが歌っている歌や曲にはあまり関心を持ってないのだろう。

「そうだよな……」

「え？」

「俺もついこの間まではそう思っていた。なんかこうお祭りみたいにパァー！つと盛り上がって楽しく歌っていれば良いのかなーって」

「それで？」

「でもな、結構大変なんだ……」

「……」

少し場の空気がシーンとなる。正直自分も何を言っているのがわからなくなっていた、だが少しでも彼女が興味を持ってくれればと思いつつながら熱心に説得する。

「はい、これ」

「何ですかこれ？」

「海未が書いた歌詞だ」

「だから私はやらないって言ったじゃないですか！」

「曲は作らなくて良いから一回だけ読んでみてよ」

「よんでも気は変わらないと思いますけど」

「まあ読んでみてな、じゃあ！」

強引に歌詞を彼女に渡し終わりは音楽室を後にし自分の教室に向かう。

~~~~~※~~~~~

「戻ったぞ〜って、どうした?」

教室に戻ると穂乃果達3人は黙っていた。

「お帰り太一君」

「おう、ただいま、どうした?穂乃果、暗い顔して?」

「……………」

俺は穂乃果にどうしたと聞くが彼女は黙ったままでその代わりに海未が何があったか答えてくれた。

「実はさつき生徒会長が来て私達に言ったんです」

「何を?」

「それは……………」

~~~~~※~~~~~

〜時間は遡って10分前〜

「太一くん大丈夫かな?」

「大丈夫だよ!〜ことりちゃん!」

「どうしてそんな事が言えるんですか?」

この時3人は俺がどうしているか話していた。

「ふふふ… 実は海未ちゃんが書いた歌詞を太一君に渡したんだよね

!〜これで真姫ちゃんも快快乐スクールアイドルに……………」

「さすが穂乃果ちゃん♪」

「ああ… 本当ですか!」

「うんそうだよ何かあった?」

「くう……………」

それを聞いた海未はとつさに音楽室に向かおうとするも穂乃果とことりに止められる。

「だめだよ海未ちゃん!今行ったら!」

「そうだよ、太一くんが頑張っているんだから邪魔しちゃうダメだよ」

「二人とも放して下さい!」

3人でガヤガヤしていると生徒会長の綾瀬絵里がやって来る。

「あつ?生徒会長?」

「ちよつと良いかしら?」

「ん？ん？」

「あなたたち本気でスクールアイドルをやるつもり？」

「もちろんです！」

「なら直ぐに止めなさい」

「どうしてですか!？」

「スクールアイドルが今までなかったこの学校でやってみただけダメでしたとなったらみんなどう思うから？ 私もこの学校が廃校になってほしくない本当にそう思っているから簡単に考えて欲しくないの！」

~~~~~※~~~~~

「つと言われたと」

海未に理由を聞いたら確かに生徒会長が言ったことには賛同できるが、まだやってもいけないのに諦めることは出来ないな。

「私もちよつと考えが甘かったかも」

「やつと気付いたのですか」

「でも！ふざけてやろうつて言ったわけじゃないよ！海未ちゃんが考えたメニューすっかりこなしてるし、お陰で足が筋肉痛だけど」

「確かに生徒会長が言った言葉もちゃんと受け止めなきゃいけないな」

「そうだよね、ファーストライブまで1ヶ月もないんだよね」

「ライブまでに歌う曲も決めていなくちゃいけないけど」

「今から1年生の子を待っていても時間がありません曲は他のスクールアイドルの曲を使うしかありませんね..」

「まだわからない！明日もう一回1年生の子に聞いてみる！」

「太一君.. そうだね！今度は穂乃果も付いてくよ！」

「おう！それじゃあ午後の練習と行きますか！」

「うん！あつ.. ちよつと待つてグループ名募集の箱の中に何か入っているかもしれないから、先にそっち行かせて！」

「わかった、それじゃあ先にそっち行こう」

そう言い俺達四人は箱の置いてある場所に向かう。

~~~~~※~~~~~

「え〜つと」

「どうだ？」

箱の置いてあるところに来た俺達は穂乃果に中を開けさせる。

「あっ！あったよー！」

「何枚だ？」

「一枚！」

「早速開けてみようぜ！」

「何て言う名前なの？穂乃果ちゃん？」

「ことりがそう言うのと穂乃果は折ってある紙を広げて中の文字をみる。そこには大きく『μ s』と書かれていた。

「ゆーす？」

「多分ミュージズではないでしょうか？」

「ああ！石鹸の！」

「違います…。」

「あはは…。」

「何て意味なんだ？」

「恐らく神話から出てくるものではないでしょうか？」

と海未が解説をする。

「へ〜良いんじゃないか？俺は良いと思うぞ！」

「私も♪」

「ミュージズ… うん！今日から私達はμ sだ！」

「じゃあ練習に行くか！」

「うん！（はい！）」

そう言い俺達四人はその場を後にし練習場所の神田明神へ向かった。

~~~~~※~~~~~

夕方真姫は学校から家に帰る所だった。ほんの一時間前二年生の俺から歌詞をもらいそれを読んでいた、ずっと歌詞に集中して見ていたため気付けば神田明神に来ていた。そこでは俺達四人が階段ダツシユをしておりそれに気付いた真姫はふと建物の壁に隠れて俺達を見た。

「もくだめくはあ…はあ…」

「もう…足が動かない…」

「俺も…ちよつとギブかも…」

そこには俺、穂乃果、ことりが息を切らして座って弱音を吐いていた。

「だめです！後にして二往復残っていますよ！それとも諦めますか？」

「もう！海未ちゃんの悪代官！」

「それを言うなら鬼教官だよ」

「いや違う！ただの鬼だ！」

「鬼ですけど何か？」

「いえ！何でもないです…」

俺達の練習を見ていた真姫は何かを感じていたが、後ろから来る何かに気付かなかった。

「キヤー！」

「ん？何だ？」

「さあ…」

気付くと真姫は自分が胸を触られている事がわかった。後ろを向くと巫女姿の生徒会副会長の東條希だった。

「な…何するのよ！」

希に強気で言うのと希は喋り始めた。

「まだ発展途上ってところやな」

どうやら真姫の胸の事を言ってるらしくそれを聞いた真姫は希から離れ距離を置く。

「はあ…？」

「でもまだ望みを捨てなくて大丈夫や！大きくなる自信はある！」

「何の話？」

「恥ずかしいならこっさりっていう手もあるんやない？」

「だから何？」

「わかるやろ？」

真姫は希に何を言っているのか理由を聞いたかったが希は何も言

わず階段を登って神社へ向かった。

「…!？」

何かに気付いた真姫は家に帰りピアノの前の椅子に座った。

~~~~~※~~~~~

「行つてきます！」

この日の朝も太一と穂乃果は同じタイミングで家を出る。

「おっ！今日も寝坊しなかったな」

「うん！今日も元気バツチリ！」

「お姉ちゃん」

「ん？」

「雪穂どうしたの？」

二階の窓から穂乃果の妹の雪穂が何か呼んでいた。

「これお姉ちゃんのこと？宛名が無いんだ、『μ, s』って書いてあるんだけど……」

雪穂が持っていた物はCDでピンク色の紙ケースに入っており裏に俺達のグループ名の『μ, s』と書かれていた。

「これって!？まさか……!!」

雪穂にCDを貰い急いで俺達は学校へ向かった。

~~~~~※~~~~~

昼休み俺達四人は屋上でパソコンを開きCDを入れる。

「行くよ……」

「「うん……」」

そう言うと穂乃果は再生ボタンを押した。すると聞いたこともない曲が流れ始める。前奏が終わると歌が流れ始める、声は何処かで聞いたことのある声だ、音楽室で聞いた声と一緒に間違えない真姫の声だ。

「すごい！歌になってる！」

「これが……」

「私達の……」

「歌……俺達だけの歌……」

歌を流し続けていると何やら画面にアイコンが出てきた、そこには

『RANK999』と書かれたアイコンが出てきた。

「ああ！票が入った！」

「誰かがいれてくれたんだ！」

「よし！じゃあ少しだけダンスの練習しよう！」

「うん！」

そう言うのと俺達は練習を始めた。

(ありがとな…)

そう思いながら俺は空を見上げた。

同じ頃1年生の教室で真姫が窓から空を見上げていた。

## 番外編

μ Sメンバーがぶちぐるやってみた

「太一君！ぶちぐるいれた!？」

穂乃果は急に喋り出す。最近ラブライブの運営会社がリリースした新しいアプリで人気のあるグループを使うゲームだ正直言つて悪いがとある会社の〇ム〇ムとほとんど一緒だ。むろん俺もスクールアイドルでμsのメンバーだから俺のキャラクターも存在する。穂乃果もちろん他のメンバーもやっているらしいが俺はフォローをしていないので誰がどれくらいやっているかは、分からない。

「そりゃ俺が入っているからむろんやってるぜ！」

「本当に!?!じゃあフォローしようよ！」

「いいぞ！番号は？」

「穂乃果はね……339751110だよ！」

「俺のは……907599502だ」

「えーつとあつたよ！凄いね！スコア200万超えてる!?!」

「そんなに凄いか？」

「うん！穂乃果はまだ100万ちよつとしかいつてないよ」

「やりまくれば直ぐにスコアは上がるぞ！」

「穂乃果も太一君に負けないうよう頑張るよ！」

「そのいきだ！」

穂乃果と互いにフォローしたがやはり他のメンバーが気になるな穂乃果に教えてもらおう

「ちなみに他の皆はどれくらいやつてるんだ？」

「他の皆はね……ことりちゃんと凜ちゃん、真姫ちゃんは穂乃果と同じ位かな」

「他の皆は？」

「絵里ちゃんと希ちゃんが太一君よりちよつと多いくらいかな？にこちゃんと花陽ちゃんが凄いよー！」

「あの二人はアイドル好きだから結構スコアは多いんじゃないか？」

「えーつとね凄いよ！350万だよ！」

「さすがだな!?!あとは海未だけどアイツはどれくらいなんだ？」

「海未ちゃんだけ教えて貰ってないんだ」

「じゃあ聞いてみようぜ」

「うん！」

俺と穂乃果は海未の所に向かう。

「海未ちゃん！」

「な、何ですか!？」

「海未、お前ぷちぐるやってるよな？」

「はい、やってますが…何か？」

「フオローさしてよ」

「い、いえ私は遠慮しておきます……」

「仕方ない、穂乃果！」

「うん！ごめんね海未ちゃん」

「はっ！返して下さい穂乃果！」

穂乃果は海未のスマホを取り上げぷちぐるを開いて番号を見る。

「よし、これでフオローできたぞ！えーっと海未のスコアは？げっ!？」

「どうしたの？太一君!？」

「穂乃果、これを見ろ！」

「あーっ！見ないで下さい穂乃果！」

「凄いよ！海未ちゃん！スコアが500万だよ！」

「以外に海未がめちやくちややっていたんだな」

「……………」

「あ、あのー海未さん？」

「見てしまいましたね？」

「ごめんなさい！許して海未様！」

「穂乃果あっち行ってるよ……」

「逃げるな穂乃果！俺を見捨てるのか!？」

「穂乃果？逃げる気ですか？」

「そ、そんなことないよ！」

「では、覚悟してください！」

「やめて海未様！」

「ごめんなさい海未ちゃん！」

「問答無用！」

「あー!!!」

学校中に俺と穂乃果の悲鳴が鳴り響いた。

## 誕生日特別編 真姫誕生日記念

今日は4月18日真姫の誕生日の前日である。そのため毎回サプライズで祝っていたが、それでは飽きてしまうという穂乃果の提案で事前に告知して何かして欲しいことを彼女から言ってもらおうという事になった。

早速俺、穂乃果、凜の3人は真姫のいる一年生の教室に向かう。

「明日は真姫の誕生日か……プレゼント買いに行かないとな……」

「あれ？太一君、まだ買ってないにやん？」

「2人はもう買ったのか？」

「うん!!」

「早いな〜何を買ったんだ？」

「それは秘密だにや〜!」

「そうだよ!」

「まあいいや」

そんなことを話していたら一年生の教室に着いた。教室の中に入ると教室の窓側の後ろの席で髪の毛をクルクルしながら本を読んでいた。

「あつ!いたにや!」

「お〜い!真姫ちゃん〜!」

「ヴええ!!何なの!?!」

穂乃果と凜の急な呼び声で真姫はビックリしていた。俺達3人は真姫の近くに行き明日の事について話す。

「真姫ちゃん!明日は真姫ちゃんの誕生日だよね!」

「明日の放課後皆で誕生日パーティーにや!」

「プレゼントもあるから楽しみにしとけよ!」

「なっ!……何なのいきなり?」

俺達の急な誕生日パーティーのことを聞いて真姫はビックリしていた。

「も〜またクールぶっちゃって〜」

「凜知ってるよ!真姫ちゃんが明日の誕生日をずっと楽しみにしてい

ること！」

「本当かそれ!？」

「本当にや!この前真姫ちゃんの手帳を見たら誕生日の日にちに二重丸が書いてあったにやー!」

「へへそうなんだ」

「真姫ちゃんにも可愛い所があるんだね」

凜から面白い情報を聞いた俺はニヤケが止まらず凜と穂乃果と一緒にニヤニヤしながら真姫の方を向く。

「ちよ!何勝手に私の手帳を見てるのよ!？」

「でも誕生日を楽しみにしてたんだよな?」

立て続けに俺は真姫に質問する。

「はあ!?ベ……別に誕生日なんて大した事なんてない普通の日だし!楽しみになんかしてないから!」

と真姫は顔を赤くしながら言う、まさにツンデレそのものだ。

「もへ真姫ちゃんは素直しやないにや」

「もつと素直になればいいのに」

「ごもつとも」

「うるさい!別に素直じゃなくてもいいじゃない!」

俺達がどんどんイジっているとき真姫は少し怒った。

「そんな真姫ちゃんの為に?」

「明日は真姫ちゃんをお願いを何でも聞くにや!」

「だから明日までに俺達9人にして欲しいことを考えて来てくれ」

「え?え?!」

~~~~~※~~~~~

その後真姫は9人に何をしてもらうか考えていた初めてこんな事をされるため戸惑っていた。

〜授業中〜

「えへ世界四大文明は……」

(何でもお願いって何をしてもらえば……)

「西木野さん……?」

「……」

「西木野さん？」

「は……はい！」

「どうしたの？ぼくつとして具合でも悪い？」

「いえ、大丈夫です……」

↳下校中

「でね！海未ちゃんが……」

「そうなの、真姫ちゃん？」

「……」（何でも……？）

「真姫ちゃん？」

「はっ！な……何？」

「もう！この前の海未ちゃんのやつだよ！」

「何だったけ？」

「もう！だから……」

家に帰って勉強している時も夜晩御飯の時もお風呂の時も真姫は考えていた。気付けば夜の10時を回っていたが何一つ思い浮かばなかった。

「だ……ダメだわ……何つつつにも思い付かない……！」

ベットに座つてもう一度考えたのだが何一つ思い浮かばなかった。

「今まで小学校、中学校の友達にお願いしたことなんてないし、パパやママにだつてほとんど甘えてないから……」

と悲しいボツチの過去を思い出しながら自分がいかに情けないと思つた真姫だった。

「もしこのまま明日になつて何もないうつて言つちやつたら……」

話は真姫の妄想へ……

「真姫ちゃん、お願いは決まつた？」

「何でも良いわよ真姫」

「穂乃果……エリー……ごめん……お願いして欲しい事は何も無いわ……」

そう真姫が言うと9人は暗い顔になる。

「えっ？して欲しいこと何もないの？」

「せつかく真姫ちゃんの喜ぶ顔が見たかつたのに……」

「がっかりだにや〜」

「真姫ちゃん少し位うちらに心開いてくれたと思ったのに書き出せな……」

「真姫……そんなこと言うなんて俺は悲しいぞ……」

~~~~~※~~~~~

「不味いわ！このままじゃ！」

何も無いとこの様な事があるとヤバいと判断した真姫はノートを開き何をしてもらうか考え、思い付いたら書く作戦を始める。

「落ち着いて一つ一つ書き出せば何かしらはあるはずよ！別に何だつて良いんだから！」

真姫はどんな些細な事でもノートに書いた。真姫のノートにはこんなことが書かれていた。

- 1、穂乃果に突っ込まれたい。
- 2、海未におもいつきり『ラブアローシユート!!』と言って貰いたい。

- 3、こどりに『ア〜ン』して貰いたい。

- 4、凜をからかいたい。

- 5、花陽に助けて貰いたい。

- 6、エリーの膝でよしよしされたい。

- 7、希の胸をワシワシしたい……

- 8、にこちゃんに甘えたい……

- 9、太一に壁ドンされたい……

「そんつつつな恥ずかしい事言える訳ないでショーっ!?」

と真姫は顔を赤くしながらノートのお願いであるページを破る。

「そもそも別にそんな事してもらいたい訳じゃないし！私こんな子供っぽいこと嫌だし！ただちよつと頭に浮かんだだけで……」

とツンデレ満載でポンポン一人で怒っていた。

「……ダメだ私……誰もいないのに言い訳始めて……」

と今さら自分が何をやっているのかを理解し恥ずかしいあまり頭を抱える。

「もつとこう大人っぽいこと……そう、王様や女王様になれる特別な

1日なんだから……皆を私の『従者』だと思つて『真姫王国の女王様に!!』なれば良いんだわ!!」

と再び話は真姫の妄想へ……

「ここは真姫王国、女王真姫は9人の従者を使つて優雅に暮らしていた。」

「にこ?どこを揉んでるの?あー違う、もつと右右!」

「はっはい!」

「もつと強く!」

「はいっ!」

真姫はにこに肩を揉ませていたが揉んでる所が違うため呆れている。

「エリー?これ私が飲みたいジュースじゃあないんだけど?」

「申し訳ありません!女王様!すぐに他のジュースを」

絵里が持つてきたジュースが真姫の口に合わなかったらしく他のジュースを頼む。すると下で椅子になつていた穂乃果と海未がバランスを崩して座つていた真姫はビツクリする。

「ちよつとく椅子が動いちやダメでしょ?」

「すつすいません女王様!」

前を見ると俺が踊つていた。

「太一?その踊り見飽きたんだけど?」

「すつすいません!真姫様!」

~~~~~※~~~~~

「私、最低じゃない!」

真姫はさつきの妄想を思い返す。

「ううつ妄想とはいえこんなヒドイ事考えちゃうなんて私つてば最低……みんなゴメン……」

そんなことをしていると気付けば夜中の2時を回っていた。

それでも真姫は必死にノートに考えを書き続けた。

「子供っぽくなくて、恥ずかしくなくて、誰も嫌な思いをしなくて私も楽しくて……」

真姫は色々書くがあまり良い考えがでなかった。

「む……難しい……もういつそ私がもてなした方が……はっ!!」

真姫はもてなしのことを考え良い案を浮かび出した。

「そうよー・マッキー・オン・ステージよ! 芸能人のディナーショーみたいに私が皆をもてなせばいいんだわ!」

話は再び真姫の妄想へ……

真姫はμsのメンバーを自宅にまねきディナーをご馳走し真姫のソロライブを行っていた。

「真姫ちゃん誕生お〜〜?」

『タチツテトー!!』

真姫の声がけに皆が合わせる。ライブは盛大に行われ真姫本人と皆も凄く満足している。

「良くてきました! ありがとう皆」

『真姫ちゃんおめでどう!!』

ライブは最高潮を向かえた。

「それでは次の曲です。愛してるばんざい!」

真姫が次に歌う曲を言うと辺りは暗くなり着ている衣装、ステージが変わった。

「それではお色直しを終わまして、第2部スタートよ!」

~~~~~※~~~~~

「よし! 完璧なセットリストだわ!」

真姫が考えた案をノートにまとめたころには既に時計は午前6時を回っていた。

(私……何やってるんだろう……)

と思いつながら真姫は学校の準備を進めた。

~~~~~※~~~~~

授業後……

『真姫ちゃん! お誕生日おめでどう!!』

「あ……ありがと……」

皆が真姫を祝うが真姫は寝てないため凄く眠たそうだった。

「あれ、真姫? 何だか元気ないけど大丈夫か?」

「そ、そんなことないわ、そ、それよりあの……」

『ん?』

「み、皆にしてもらいたい事なんだけど……あの……その……えっと」

「思いつかなかった?」

「うっ……」

皆に真姫の考えがばれて真姫は少し後ろに下がる。

「ずっと考えてたんだけど、あの……」

「じゃあ俺達から真姫にしたいことにするな」

「え?」

「真姫ちゃん素直やないからもしかしたら思いつかないかもって気づいて」

「だったら私達がそれぞれしてあげたいことをしようかって」

「真姫ちゃんの期待にそわないかもだけど……」

「それでもいいかな?」

「え、えと、それって……??」

真姫は突然の言葉に動揺していた。

「えつとねくまずことりは真姫ちゃんにケーキをアーンってしてあげたいなって♪」

「え!?わ、私そんな子供っぽいことは……」

「お願い♪ねっ、アーン♪」

「………おいしい」

真姫はことりのアーンを結局やり食べた。

「次!次!凜はね!真姫ちゃんの膝の上でよしよしされたいにや〜!」

「それって凜がされたいことじゃないの!?!」

「にやあ!?!」

「もーっ!」

『アハハハハ!!』

(皆………ありがとね)

真姫は心でそう思いながら誕生日パーティーを楽しんだ。

## 第12話 人前では恥ずかしい!?

『ピッ!』

海未の笛の合図で俺と穂乃果は同時にダッシュをする。ここ二週間ずっと毎朝やっている階段ダッシュ、最初の頃と比べると体力がつき登るのにも息が切れていたが今ではかなりスムーズに走れるようになっていた。

「はっはっゴール!穂乃果の勝ちー!!」

「うわー!負けたー!」

穂乃果は俺との競争に勝利し喜んでいる。実は競争する前、穂乃果と勝った方がジュース奢りと言う賭けをしていた。結果は俺の負けで後で彼女にジュースを奢らなくてはいけない。

「三人とも前回より数秒早くゴールできていますよ!」

「本当!?やったー!」

「やったね太一くん♪」

「二週間やったかいが、あつたな」

「ではこのままダンスの練習をしたいと思います!」

このままダンスの練習を始める。一年生の西木野真姫さんに曲を作曲してもらい直ぐにダンスの練習を始めていて既にほとんど踊れる状態になっている。

「ワン!ツウ!スリー!フォー!ファイブ……」

「ことりちゃん、ちよつとずれてる」

「うん!」

「穂乃果?」

「タッチ!」

「いい感じですよ!」

「うん!」

一通り歌をどうして踊り上手く踊れていないところを中心に練習をする。今日もいつも通り練習する。

「では本日の朝練は終了です」

「太一君!」

「分かった分かった！買えばいいんだろ？」

「うん！」

俺は穂乃果にジュースを奢る。やばい今月あと一万しかない……。

「ふう〜終わった〜」

「まだ放課後の練習が残っていますよ」

穂乃果は俺が奢ったジュースをほっぺに当てて涼んでいたが海未はそれを見て少し呆れていた。

「でも、ずいぶんと出来るようになったね♪」

「穂乃果と太一がまさかここまでやるとは思ってもなかったです、穂乃果は寝坊すると思っていましたし」

「大丈夫！その分授業中寝るから！」

「そうだな俺も多分寝るな」

そうやって喋っているのと遠巻きに真姫がこちらを見ていた。

俺達はそれに気付き真姫の方を見ると真姫はバレた！と思いきそつと逃げようと思ったが穂乃果に声をかけられた。

「西木野さ〜ん、真姫ちゃ〜ん！」

「本当だ！真姫〜」

「っ……!?!大声で呼ばないで！」

「えっ何で？」

「恥ずかしいからよ！」

真姫は少し顔を赤くして怒るがその顔も何だかんだで可愛い絶対に勧誘したい！

「あつ！そうそうこの曲、四人で歌ってみたから聞いてみてよ！」

「はあ！何で!?!」

「だって！真姫ちゃんが作ってくれた曲でしょ？」

「だから私じゃないって言ってるでしょ？」

「まだ言っているのですか？」

「……」

「ぐふふふ……ガオー！」

穂乃果は少し変な笑い声をし真姫に飛びつく。

「はあ？何やってるの!?!放して！」

「うひひ！」

「い、いやー!!」

「ほい! 作戦成功!」

何をするのかと思いきや穂乃果はイヤホンを真姫の耳に当てる。彼女は理解し、イヤホンに手を当てて聞く準備をした。

「結構上手く歌えたんだ! いくよー!」

「μ, s!」

「ミュージック!」

「スタート!」

スタート!と同時に曲が流れる。

~~~~~※~~~~~

「ふあ~~~~~」

「完全に寝るつもりですね」

「俺も寝ようかなー」

「あははは……」

朝練を終え俺達は一旦家に帰り着替え登校中である。最近朝練を始めたせいかわたくし眠たい、穂乃果はもちろん俺も授業の合間を狙って寝るつもりでいる。

「ねえあの子達じゃない?」

「本当だ!」

学院に近づくにつれて他の生徒達も集まってくる、最近午後練で学院の屋上で練習しているため俺達の事を知っている人たちも増えていた。今がまさにそれで俺達を見て何か話していた。

「ねえ! 君たちって確かスクールアイドルやってる……」

「はい! μ, s って言うグループです!」

「みゅーず? ああ! 石鹸の!」

「違います」

「そうそう家の妹がネットであなた達を見かけたって」

「本当ですか!？」

「まじて!」

「うん!今度ライブやるんでしょ?」

「そうです!やったな穂乃果知つてくれる人が増えて!」

「うん!この調子で頑張っていこう!」

自分達の事を知っている人達がいて俺と穂乃果は少し機嫌が良くなった。

「ライブっていつやるの?」

「今度の新入生歓迎会の後にやります!」

「ちよつと、ここで少し小渡つて見てくれない?」

「え!?!ここでですか!？」

「ちよつとだけで良いから!」

「ふああ……!」

「ふふふ良いでしょう!もしライブに来てくれたらここで少しだけ踊りましょう!」

「更にお友達を連れてきてくれるならもう少しだけ見せます♪」

「本当に!?!行く行く!」

「毎度あり〜!」

穂乃果は商売をしているかの用に声を掛けてきた先輩に取引をする。それが頂になったか先輩方は快く引き受けてくれた。

「じゃ頭の所だけ見せちゃいま〜す!」

俺達はダンスの最初の位置に立つ。あれ?なんか足りないような気が……

「あれ?もう一人は?」

「え？」

「海未ちゃんは？」

「さては逃げたな!？」

「どこー!海未ちゃん!」

俺達はダンスをすることを忘れ海未を探しに行く。

「やっぱり無理です……」

「何いつてるの海未ちゃん!」

海未を探して10分海未は屋上でうずくまって顔を隠していた。

「どうしたの!?!海未ちゃんなら出来るよ!」

「そうだよ!」

「できます…歌と躍りをこれだけ練習したんですから、しかしそれを人前でするととなると……」

と海未は顔を赤くして言った確かにアイドルである以上人前で披露しなくてはいけないのだが人前で披露するのが恥ずかしとなると考えなくてはならない。

「恥ずかしと……」

「はい……」

海未はまた顔を隠した。

「そういえば!お母さんが言ってた!お客さんの顔を野菜だと思えて」

「それは良い案だ!」

「私に一人で歌えと!？」

「そこかよ!」

「もー困ったなー」

「海未ちゃんが辛いんだったら考えないと」

「そうだよなー」

「人前じゃなきや大丈夫なのですが！人前じゃなきや！」

考えている途中で穂乃果が行動を起こす。

「色々考えるより、慣れちやった方が早いよ！じゃあ行こ！」

~~~~~※~~~~~

やって来たのは秋葉原人が沢山いる所でチラシを配り人前での苦手を克服しようと言う作戦に入った。

「じゃーん！ここでライブのチラシをくばろう！」

「ひ、人が沢山!?!」

「当たり前でしょ！そういう所を選んだんだから！それにライブの宣伝にもなるし！大きな声を出していればそのうち慣れてくるよ！」

「わ、分かりました……お客さんは野菜お客さんは野菜……」

「駄目かな？」

「私は平気よ♪」

「俺も大丈夫だが海未がな……」

海未の方を向くと海未は一人ガチャガチャをしていた。

「あつ！レアが出たみたいです。」

「もう！海未ちゃん！」

~~~~~※~~~~~

「ここなら平気でしょ!?!」

「まあ……なら……」

場所は戻って学院、時間帯は下校時間で生徒が帰り校門を出ていくのでチラシ配りにはうってつけの場所だ。

「じゃあ始めるよ！μ's Firstライブのやりまーす！」

「μ's Firstライブでーす！」

「是非見に来て下さい！」

俺達は手早くチラシを渡したが海未は依然と渡せていなかった。

「あつ……お、お願いします！」

「いない！」

「ダメだよ海未ちゃんそんなんじゃあ！」

「穂乃果はお店の経験で大丈夫かもしれませんが私は……」

「ことりちゃんと太一君はちゃんとやってるよ！」

「だから海未ちゃんもやってよ！」

「無理です！」

「海未ちゃん私が階段を五往復できないって言った時に何て言ったわけ？」

「うう……わかりました！やりましょう！μ's Firstライブやりまーす！」

海未は穂乃果の言葉でやる気をだし気付けばチラシを全部配り終えていた。

## 第13話 ライブ直前!!

「ん〜? やっぱり動きが少しだけ違うよね…こう! かな?」

チラシ配りを終えた俺達はことりがデザインした衣装が完成したということと穂乃果家でことりが来るのを待っていた。ことりが来るまでの間俺、穂乃果、海未はA—RAISのPVを見ていた。

「うお!?!」

「どうしたの?」

「どうしたんですか?」

「聞いてくれ票がまた入ったぞ!」

「ホントに!?!」

「さっきのチラシを見て投票してくれたんですね!」

確かにさつき見たときより票が2票入っていた。少ないが確実にチラシ配りの成果が出てきた。

「お待たせ〜」

「あつ! ことりちゃん!」

嬉しがっていると丁度ことりが完成した衣装を紙袋に持ってやって来た。

「見て! ことりちゃん! また票が入ったよ!」

「本当に!?! すごい!」

ことりも票が増えていたことに喜びを感じていた。

「それって衣装だよね!?!」

「うん! さっきのお店屋さん最後の仕上げをして貰って、じゃ〜ん!」

とことりは紙袋から衣装を出した。

「うあ〜! 可愛い!」

「良いんじゃないか!」

「……」

ことりが出した衣装はとても可愛かった。赤色のワンピースで襟の大きなピンクのリボンが目立つfirstライブにふさわしい衣装となっていた。

「すごい！本物のアイドルみたい！」

「本当?」

「すごいよ!すごいよ!ことりちゃん!」

穂乃果は目をキラキラとさせながら興奮のあまり腕を伸び縮みしていた。

「本物とは言えないけどなるべく本物そっくりに作ったつもり♪喜んでもらって嬉しいな♪」

「ああ……!」

「ことり……」

「ん?」

「そのスカートだけは?」

「あつ……」

ことりは以前に海未に衣装について言われたがことりは忘れてしまいこれになってしまった。

「ことり…私、言いましたよね?スカートは膝下でなければ履かないと!」

「だってしょうがないんだもん!アイドルなんだから」

「アイドルだからってそんな決まりじゃないはずです!」

「だけど、今から直すのはさすがに時間が……」

「なら私は1人だけ制服で歌います」

「ええー!そんな!」

「大体3人して私に黙って結託するなんて」

海未の怒りは当然だったしかしこれは大事なfirstライブ、ここでメンバーの気持ちがあひとつじやないと後からめんどくさい事態になるから早く対象しないと。

「だって絶対成功させたいんだもん!」

「穂乃果……」

「歌を作ってステップ覚えて衣装を揃えてここまでずっと頑張ってきたんだもん!四人でやってみて良かったって思いたいもん!」

「穂乃果ちゃん……」

「つつ、思いたいのに!!」

穂乃果は部屋の窓を開けて大きく叫んだ日も沈んだ静かな住宅街で大きな声で、彼女もかなりの覚悟を持っているのだろう。

「何をしているんですか!？」

「それは俺も同じ考えだな」

「私も♪3人でライブを成功させたい！」

「ことり…太一…もう、ずるいです、わかりました。」

穂乃果の覚悟に海未は心を撃たれ首を縦に降った。

「海未ちゃん…海未ちゃん！大好き！」

「これで決まりだな！じゃあ神田明神の明神様に明日のライブの成功を祈りにいこう！」

「うん！」

結託したら俺達は制服のまま神田明神に向かった。

~~~~~※~~~~~

「ライブが成功しますように、いや大成功しますように!……」

「会場一杯にお客さんが来てくれますように……」

「緊張しませんように……」

「みんなが楽しんでくれますように……」

「「「よろしくお願いいたします!!」「」」

俺達は手を合わせて出来る限りのお祈りを明神様に祈願した。後ろを見ると沢山の星が輝いていた。まるで俺達を応援するかの様に

……

## 第14話 f a s tライブ!!

「これで新入生歓迎会を終わります。各部活体験入部を行っておりますので興味があつたら是非参加して見てください」

生徒会長の綾瀬先輩の言葉で歓迎会は幕を閉じた、俺達四人も歓迎会に参加し、それを見ていたが相変わらず冷たそうな人だと思った。

「お願いいたしますーこの後4時からf i r s tライブやりま〜す」

「是非来て下さい♪」

「お願いいたしますー!」

俺達は講堂から出る新入生、在校生にチラシを配るこの前のチラシ配りでは少しながら成果が出ているので期待もできるだろう。だが……

「吹奏楽部希望の方こちらへ集まって下さい!」

「陸上部はこちらで〜す!」

他の部活も同じような事をしており思うようにチラシが配れない。

「うう!他の部活に負けてられないよ!」

「うん!」

「そうだな、だが海未は勝ってると思うぞ!」

「ん?」

「よろしくお願いいたします!午後4時からライブやりま〜す!」

後ろを見ると海未が前回とはまるで違うように笑顔で大きな声でチラシを配っていた、それに答えるかの様に海未の、前に通りかかった生徒は皆チラシを受け取っていた。

「俺らも負けてられないな!」

「そうだね!頑張ろ!〜ことりちゃん!」

「うん!」

俺達も他の部活や海未に、負けないよう全力でチラシを配り続けた。さらにヒデコ、フミコ、ミカの3人がライブの手伝いをしてくれるらしい、これで俺らもリハーサルを行う事ができる!

3人がライブの準備をしてくれている頃俺達は控え室にて衣装を着て本番を待っていた。

「わあ〜可愛いよ!どう!?!」

「うん!凄く似合ってるよ!」

「えへへ……」

「どうだ?着替えたか?俺は着替えたぞ」

「あつ!太一君!」

「どうだ?俺の衣装?似合ってるか?」

「うん!凄くカッコいいよ!」

「ありがとな!」

俺の衣装もことりが作ってくれたらしく私服とスーツが合体した衣装だった。着心地も良く動きやすいのは凄く良いと思うな!

「海未は?どうなんだ?」

「海未ちゃん!」

「はい!」

試着室でもぞもぞと動いてはいたが海未もようやく恥ずかしながら外へ出た。

「「うおー!?!お?」」

海未の衣装も可愛く俺達もおー!と思ったが下を見るとスカートの下にジャージを着ていた。

「海未ちゃん!どういうこと!?!」

「こ、これは……」

「もう!往生際が悪いよ!さっきの海未ちゃんはどこに行ったの!?!」  
「鏡を見たら急に……」

「てあー!」

「いやー!!」

穂乃果は強引に海未のジャージをおろす。

「隠してどうするんだよ、スカートはいてるのに?」

「ですが!」

「海未ちゃん!可愛いよ♪」

「えっ……!?!」

「ほら!」

穂乃果は海未を鏡の前へ出す

「ほら、海未ちゃんが一番可愛い！」

「そうですか？」

「ほらこうして並んでいると恥ずかしくありませんよ？」

俺達は横一列に、並びもうひとつの大きな鏡をみる。それを、見た海未は次第に不安の顔が勇気の顔になっていた。

「はい、確かにこうしていると！」

「でしょ！最後にもう一回練習しよう！」

「そうだな！」

四人の気持ちも一つになった事だし俺達は最後の練習をする。

~~~~~※~~~~~

「やっぱり……恥ずかしい……」

最後の練習をした俺達は講堂の舞台の上上がった前には垂れ幕がおりておりお客さんがどれだけ来ているかはわからない、だが沢山来ていると願いたい。だがここで海未がまた緊張をってしまった。だがそこは穂乃果が行動を起こす。

「大丈夫だよ！」

「穂乃果？」

穂乃果は震えていた海未の手を握った。手を握られた海未の震いは止まり落ち着いた。

「私達がついてる！」

「はい！」

「こういう時何て言うのか？」

「μ'sファイトオーとかどうだ？」

「それでは運動部見たいですよ」

「うーんそれならどうしようかな？」

「そう言う時は番号を言うんだよ！」

「面白そう♪」

「じゃあ！行くよー！」

穂乃果の、掛け声で

「いち！」

「にい！」

「さん！」

「よん！」

「」「ふふ！あはははは！」「」

何故かわからないが自然に笑えてきたこれなら行ける！

「μ，sのfirstライブ！最高のライブにしようね！」

「うん！」

「もちろんです！」

「ああ！」

ブザーが鳴り幕が上がったそこには……

お客さんは誰も居なかった……

「頑張つて見たんだけど……」

フミコは申し訳無さそうに俺達にあやまる

「穂乃果……」

「穂乃果ちゃん……」

「穂乃果……」

穂乃果の顔をみると少しだけだが泣いていた、彼女の初めて見た涙を、見て俺は何も言葉を掛けられなくなった。

「そうだよ、世の中そんなに甘くないよね……」

「穂乃果……」

俺達も諦めかけていたその時……

「はあ……はあ……あれ？ライブは？」

そこには1人の少女が息を切らしてやって来た。その子は前に見た子だった。

「花陽ちゃん……」

「やろう！穂乃果、全力で！」

「え？」

「1人だけでも大事なお客さんだ！この日の為に頑張つて来たんだ！やるぞー！」

「太一君……うん！やろう！」

「うん！」

「はい！」

「楽しみだな……！」

I s a y…

Hey, hey, hey, START : DASH !!

Hey, hey, hey, START : DASH !!

うぶ毛の小鳥たちも

いつか空に羽ばたく

大きな強い翼で飛ぶ

諦めちやダメなんだ

その日が絶対くる

君も感じてるよね

始まりの鼓動

明日よ変われ！

希望に変われ！

眩しい光に照らされて変われ

START !!

悲しみに閉ざされて

泣くだけの君じゃない

熱い胸 きつと未来を切り開く筈さ

悲しみに閉ざされて

泣くだけじゃつまらない

きつと (きつと) 君の (夢の)

チカラ (いまを) 動かすチカラ

信じてるよ…だから START !!

(Hey, hey, hey, START : DASH !!)

(Hey, hey, hey, START: DASH!!)

雨上がりの気分で

高まる期待のなか

躓いたことさえも

思い出ししよう

明日が咲くよ!

希望が咲くよ!

楽しいメロディー口ずさみ咲いた

DASH!!

喜びを受けとめて

君と僕つながろう

迷い道 やつと外へ抜けだした筈さ

喜びを受けとめて

君と僕 進むだろう

それは

(それは)

遠い

(夢の)

カケラ

(だけど)

愛しいカケラ

彼方へと…僕は DASH!!

俺達は全力で、歌った。気付いたら一人だったお客さんはいつの間にか4人に増えていた。その中の一人に生徒会長の綾瀬先輩もいた。

「生徒会長……」

「どうするつもり?」

綾瀬先輩は穂乃果に問いかける、無論穂乃果や俺達の答えは……

「続けます!」

「穂乃果……」

「穂乃果ちゃん……」

「何故、続けようと思うの？これ以上続けても意味がないと思うけど？」

「やりたいからです！」

「……」

「私、もつともつと歌いたいって思ってます！きつと3人とも」

「もちろんだ！」

「うん♪」

「はい！」

穂乃果は自分の思っていることを絢瀬先輩に告げる。ここで引き下がってしまつてはもう、二度とこんな事は出来ない！

「こんな気持ち初めてなんです！やつて良かったって思つたんです！今はこの気持ちを信じたい！このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない、応援なんかもしてくれないかもしれない、でも一生懸命頑張つて皆に届けたい！今、私達がここにいるこの思いを！」

穂乃果は全てを先輩に伝えた。

「いつかこの講堂を満員にします！」

穂乃果はこの講堂を満員にすると先輩に言った、先輩は穂乃果を見つめ、そのまま何も言わず帰つて行つた。

「敗北からのスタート……か、」

ボソツと言つた言葉は分からないが一応認めて貰つたということ  
はわかつた。

「さあ！明日も頑張つて練習しよう！」

「うん！」

「はい！」

「よし！頑張るぞー！」

「」「おー！！」「」

気付けば当たりは夕焼け景色で赤く染まっていた昔の様に……

## 第2・5章 旅行へGO!!

### 第15話 買い物は女子の修羅場です!?

新学期が始まってもう半月が経ちクラス替えなどで静かだった教室は一段と賑やかになっていた。無論穂乃果達以外知り合いがいなかった俺も徐々に話せる女の子達が増えていた。この日も俺はいつも通り授業の間休み時間を使って日向ぼっこをしている。季節はまだ春で今日は五月後下旬並みの暖かさでポカポカしていて気持ちよいくつい居眠りをしてしまう。日向ぼっこしていると穂乃果、海未、こたりの3人が俺の所にやってきた。

「ねえ、太一君!」

「ん?何だよ穂乃果、人が気持ちよく日向ぼっこしているのに邪魔しやがって…」

「もう!聞いてよ!」

と穂乃果がポカポカ肩を叩いてくるが別に痛くなく丁度肩が凝っていたので意外にも気持ちいいがしつこいので聞くことにする。

「わかった、わかった!何があったんだ!」

「はい、実は五月の初め頃隣の神奈川県と伊豆一泊2日の旅行という行事があるのですが…」

「ああ:そういうや先生が言ってたな、それがどうした?」

「ですので、一緒に行動する班を決めなくてははいけません」

「そういう事な:俺はどうしようかな?」

「私たちは海未ちゃんと、穂乃果ちゃんの3人であと一人足りないから太一くんはどうかな?って思うんだけど…」

「俺は全然いいぞ!」

「さすが!太一君話が早い!これで決まりだね!」

「場所は神奈川だけど、何処に行くんだ?」

「そーいや何処なんだろう?」

「そこは先生も話していませんでした」

「それならお母さんに聞いたよ♪」

「理事長に？マジで!？」

「何処に行くの？」

「それはね…♪」

ことりの言ったプランはこのようになっていた。

9時、学校集合

9時20分、学校出発

11時50分、横浜中華街でお昼と自由時間

13時50分、横浜中華街出発

14時30分、小田原城見学

17時30分、旅館到着分かれて各部屋へ

2日目

9時から14時、温泉街散策自由時間

14時10分、温泉街出発

17時20分、学校到着解散

「と言うことになってるよ♪」

「ことり…意外にやってはいけない事をやっちゃってるな…」

「まあ良いじゃん！」

「聞いた感じだと2日目の服装は私服可になってるな…今度の日曜日  
買いに行こうかな…」

「じゃあ穂乃果も行く！」

「ことりも♪」

「では…私も」

という事になり、日曜日に、服を買いに行く事になった。

~~~~~\*~~~~~

当日、日曜日

ピンポン！と家のインターホンが鳴る、まだ集合時間までかなり  
あるがこの時間に鳴らすのはアイツしかいない。

「ったく…早過ぎんだよ」

玄関の覗き窓を見ると案の定穂乃果だった。

「太一君！そこにいるんでしょ!?!見えてるよー！」

穂乃果は玄関越しに俺がいる事を感じ取ったらしく強気で言った。

流石に誤魔化すのもできないし、可愛そうなので俺はドアを開ける。

「やつときた〜おそいよ〜」

「来るのが早過ぎんだよ」

「だって暇なんだもん！」

穂乃果は、暇だから来たと言うが生憎俺は暇じゃない、この後、穂乃果達3人と初めてのショッピングなので服を出来るだけカツコよくしたいので、誰にも家に入らせたくなかった。

「おっじやましま〜す！」

「おいおい！待てよ!?誰が入って良いって言った!?!」

ドアを開けた途端に穂乃果は強引に家の中に入り、リビングの俺専用のソファーに横たわった。相変わらずだらしない…

「え〜良いじゃん！」

「特に理由が無いなら帰れ！俺は暇じゃね〜んだ！」

「だって〜家にいるとお店のお手伝いしないといけないから嫌なんだもん！」

「うちは、お前の暇つぶしスポットじゃね〜ぞ！何も用が無いなら帰んな！」

「もう…太一君の意地悪…」

少しだけ強く言ってしまった…穂乃果は少し涙目になっており今にも泣きそうだった。流石に強く言い過ぎたな…しゃあない今回だけだぞ今回だかな〜！

「わかった、わかった！居ても良いよ！」

「本当!?流石太一君！やさしい！」

「急に態度変えやがって…」

さっきまで涙目だった穂乃果は急に笑顔になる。こいつめ…いつか覚えとけよ…

俺の許可を貰った穂乃果はソファーで横になりテレビを見ていた。その間俺は家の家事を一つ一つ片付けていた。

リビングを行ったり来たりしているとソファーにつく穂乃果に目がいくいつもは学校の制服しか見ていなかったため彼女の私服を見ると新鮮味を感じた。彼女の服は青色の長袖の服で下がショートパ

ンツ、穂乃果らしい可愛さだ。

「ん？どうしたの？」

「いや、何でもない…もう待ち合わせの時間だし行こうか？」

「うん！」

家事を終わらせ俺はお気に入りの私服に着替えて穂乃果と一緒に家を出て海未とことりと待ち合わせしていると駅前に向かった。

~~~~~\*~~~~~

「あつ！穂乃果ちゃん！太一くんこっちだよ」

「いたいた！おはようことりちゃん海未ちゃん！」

「おはよう！海未、ことり」

「はい、おはようございます。二人はいつも通り元気の様子で」

駅にはすでに海未とことりが待っていた。

「太一くんその服かっこいいね♪」

「本当か？結構選ぶのに時間がかかったから喜んでもらってうれしいわ」

「いつも制服でしか見たことなかったので少し新鮮味を感じます」

「ことりと海未だつてその服結構可愛いぞ！」

「本当!?嬉しいな〜えへへ」

「そ、それは…ありがとうございます…」

「え〜穂乃果は？」

「穂乃果の十分にあつてゐるって」

「えへへ嬉しいな〜」

穂乃果の服を褒めて本題に入ろうこのままでは話が進まない

「んじやあ合流できたし行こうか」

「うん！」

俺たちは近くのショッピングモールに向かった。

~~~~~\*~~~~~

「大つきいな〜」

「そうだな、愛知にはこんなに大きいショッピングモールは無いな」

「ことりは何回か行ったことあるけどいっぱい服があるよ♪」

「なら尚更楽しみだ早く行こうぜ！」

俺たちが来たショッピングモールはこの辺では一番大きく家具、家電、服、食品などがあり、ほぼ何でも売っているらしい。今回は旅行用品と服を買いにきただけなので一緒に買えるな。

「どこ行こうか？」

「まずは服じゃない？」

「ことりも服かな」

「ではそれでよろしいのでは？」

「よし！じゃあ服屋から見に行こう」

最初は2日目の自由時間に着ていく服を買うことになった。

「ここは有名な服屋『サトクロ』だな俺もよく買うな」

「じゃあ別れて服を決めようかな？」

「そうだね」

「では、ここで別れて服を決めたら集合して会計でどうでしょうか？」

「わかった！」

「じゃあまた後で！」

そう言い俺たちは空々しい気になった場所へ向かった。

「それじゃ俺も探そうかな」

2日目当日の天気は晴れで珍しくこの時期では一番気温が高いらしいので薄着で動きやすい服を選ぶ色は少し白っぽい……よし！これで行こう。他の気になる候補を3つくらい選んで集合予定の場所に向かった。

「誰もいない……」

集合場所には誰もいなかった。3人はまだ熱心に服を選んでいたり、ことりに至っては未だに一着も決めていないようでこれは長くなりそうだった。

「ごめん長くなっちゃった！」

「すみません、遅れました……」

十分位すると穂乃果と海未が選び終わってやってきた。

「ことりはまだかかりそうか？」

「そうですね、私が声をかけた時にはラスト一着と言っていました……」

「まあ、待ってるか」

気長に待っていたがかなり遅く気づけば20分もたっていた。

「ごめん、遅れちゃった」

「やっとな来た」

こつりは沢山の服を持ってきた、その数はかなりの量で俺の3倍はあった。

「さあ服も決まったしお会計をしますか」

「太一君はどんな服を買ったの？」

「俺か？俺はこれだ！」

俺は自分が買う服を穂乃果達に見せる。この服は意外に俺の目に入り一眼見たときこれだ！と思った俺にはカッコいいと思うがこいつらはどう思うかだよな。

「どうだ？」

「うん…」

「なんか…」

「しつくり来ませんね…」

「え!？」

まさかの3人からの評価はあまり良くなかった。なんでだ？いいだろ？

「なんでだ？」

「何か太一君ほくないんだよね…」

「じゃあ誰が良いんだ？」

俺は他の3点の服を見せるがあまり良い評価をもらえなかった。

「じゃあ私達が決めてあげる！」

「へ?」

何故かわからないが3人が服を選んでくれるらしい、俺は試着室に連れられてそこで待機させられている。

「じゃあこれ着てみて！」

「お、おう…」

俺は穂乃果に渡された服に着替える。

「どうだ？」

「良いよ良いよ！穂乃果はこれが良いと思う！」

「ダメです！次は私が選びます！」

穂乃果が選んだ服は海未か納得いかず次は海未が服を選ぶ。

「はい、ではこれを着てください」

海未に服を渡された俺はまた試着室に入り着替える。

「今度こそどうだ？」

「良いと思いますよ」

「本当か!？」

やっと合格をいただいたのでこれで終われると思ったが…

「ダメだよ海未ちゃん！ここはことりにお任せ♪」

「えく!？」

「ちよつと待つてて！」

海未が選んだ服は今度のことりが納得いかず服を選びに行った。

「はい♪これに着替えて！」

ことりに服をもらい俺はまたまた試着室に入る。

「どうだ？」

「だめだよ！やっぱり穂乃果のだよ！」

「いえ！私のです！」

「違うよ！ことりのだよ！」

「おい！お前ら喧嘩なんかすんなよ！」

「二太一（君、くん）は誰のが一番いいの!?!」

穂乃果達3人が、喧嘩を始めた。こうなったら面倒くさい。ええい

！こうなったら自分のでいいわ！

「俺か？俺はやっぱり自分が決めたやつだ！」

「えく穂乃果のにしてよく！」

「ずるいです！私のにしてください！」

「ことりだよ！絶対！」

はあ…どうするんだ一体？はあこれは女子の買い物修羅場だな

……

この後1時間位穂乃果達と、服をどれにするかを討論したが、結局

俺が選んだ服になった。

## 誕生日特別編

## 穂乃果誕生日記念

『穂乃果（ちゃん）！誕生日おめでとう！』

「皆ありがとう！穂乃果今までで一番嬉しい誕生日パーティーだったかもー！」

「それは皆のプレゼントがよかったからかしら？」

「それとも、ことりとにこちゃんで作ったケーキが美味しかったから？」

「皆結構良いプレゼントを用意してくれたからね！穂乃果もう死んでも良いかもー」

今日は8月3日穂乃果の誕生日である毎回皆が誕生日の人を盛大に祝うんだが今回は少し違っていた。

「もー太一君はこんなベロンベロンになつてー！」

「これは太一のせいではありません！全てこの二人のせいです！」  
「にや！にや！凜も!？」

「うちは関係ないと思うんやけど？」

「希ちゃん！それはないにや！凜だけ責任押し付けるなんて！」  
「とにかく！あなた達二人は練習メニューを倍にします！」

「えーそんな〜！」

「さあもう夜も遅いし帰るわよ」

「太一はどうするの？エリー？」

「そうね…家はすぐ目の前だけど一人だと少し心配ね？」  
「良いよ良いよ！穂乃果の家に泊まらせるから」

「そう？悪いわね」

「ううん、ありがとね最高の誕生日パーティーだったよ！」  
「喜んで貰えて嬉しかったわじゃあまた明後日ね♪」

「うん！バイバイ！」

そう言うとは皆は帰っていった。

~~~~~\*~~~~~

「ん〜よく寝たな、ん？ここはどこだ？」

目を覚ますと俺はいつもの家のベッドの上では無かったどこか見

覚えがあると思ったらそこは穂乃果の部屋だった。

「あつーやつと起きたー！」

「うわ！穂乃果!？」

「もう！凄く眠ってたね穂乃果待ちくたびれちゃったよ」

「今日って、何日？」

「8月4日だよ！」

「げっ！誕生日過ぎちまった！」

「気付くの遅過ぎ」

穂乃果の誕生日が過ぎたのを知った俺は申し訳ないと謝るが穂乃果は許してくれた、だが何か忘れてる気がする…

「わりと穂乃果また今度プレゼントやるからもう少しまっててくれ」

「良いよ良いよ、太一君今月あまりお金ないんでしょ？」

「うう…」

「だからこれ！」

穂乃果は一枚の紙切れを俺に見せてきた。そこには俺が書いた字があった。

「これは俺が書いた字だ！」

「昨日太一君、凜ちゃん和希ちゃんに騙されてお酒のんじやったでしよ？その時に太一君が、酔った勢いで書いて穂乃果にくれたんだよ！」

「そーいや、そうだったな、えーつと？内容は？」

「そこには一日言う事を聞きます券」と書かれていた。何故こんな事を書いたかと言うとそれは昨日の夜に遡る。穂乃果の誕生日を忘れていた俺はプレゼントを買うのを忘れてしまった。さらにプレゼントを買いたいのだが生憎今月のお金がありません。さらにプレゼントを買ってしまうと今月が生きて行けなくなる。以前同じような事があり、もやし生活を経験している俺はもう二度としたくないと思った穂乃果には謝ろうと思ったが謝る直前凜と、希に騙されてお酒を飲まされてしまった。酔ってしまった俺は何も知らないまま穂乃果にこの券を渡してしまったということだ。今にいたる。

「まあ確かに、これは俺の責任だから取るしかないが今日は予定が

あつてなまた今度にしてくれないか？」

「言うと思つたよ、はい」

穂乃果は券を裏返したそこにはまた俺の字で何か書いてあつた。

【もし、先延ばししたら百万円あげるby太一】

あゝ!!なにしてんだよ!俺!

「と言う事で太一君!観念してね!」

「おい!なにするだよ!」

「うしし!」

「や、やめ!あゝ!!!!」

この日から近所で噂が、たったかなりの美少女がものすごいスピードで犬に追いかけられていたということ。

## 第16話 絶対にさせてくれないバスの中!?

旅行当日、集合時間が早く朝の8時半までに学校に行かなくてはいけないのでいつもより早く家を出なくてはならない。そのためいつもより早く起き、準備をして家を出る。前日に穂乃果と一緒に行く約束をしたため俺は穂乃果を迎えに行く。まあ：すぐ目の前なんだけどな…。穂乃果の家のインターホンを押すと押したと同時に穂乃果が出てきた。こいつ玄関前で待ってたな？

「おはよう！太一君！」

「ああ…おはよう…」

「あれ、元気ないね？」

「正直凄く眠たい…」

「あく！もしかして旅行が楽しみ過ぎて眠れなかった!？」

「げ!?!バレた！確かにそうなんだが、まさか一番鈍感な穂乃果にバレルとは…!？」

「なっ!?!そんなわけでないだろ?」

「いったくい、もう！ひどいよ!！」

俺はいじった穂乃果の頭にチョップした。穂乃果は少し涙目になるがいつもの事なのですぐにもとどろりに戻るだろう。

「時間がないから早く行くぞ!」

「うわあ!?!もうこんな時間!」

俺と穂乃果は服などが入っている重いカバンを持って急いで学校へ向かう。

~~~~~\*~~~~~

「おーい！後はお前らだけだぞ!？」

「すみません！いてて！ストップ、ストップ!」

「ったく…早く乗った乗った!」

学校に着くと山田先生が待っていた。山田先生の顔を見ると鬼の様な顔をしていたのでこれはやばいと思い謝るが、山田先生は容赦なく俺の耳をつねる。この先生、耳のつねりが強力に強く、毎回俺が授

業中に穂乃果とことりと喋っていると問答無用で耳をつねるため、今の俺にとつては非常に怖い存在になつてゐる。

「あつ！穂乃果ちゃん、太一くん！こつち！こつち！」

「また遅刻ですか？」

「ああ：痛て〜」

「もう！太一君のせいで遅れちゃったじゃん！」

「ごめんて〜」

バスの中には既にクラスの皆が揃つており、俺と穂乃果が遅刻してまあいつもどうりやなつて思つてゐた。俺と穂乃果は海未とことりが教えてくれた座席に行き座る。

「それにしても豪華な作りだな〜」

「そうだね！座り心地いいし！」

今回乗るバスはとても豪華な作りをしていた。座席はふわふわと弾力があり座り心地満点で座席と座席の間は広く足も伸ばせてリラックスできる。

「それじゃ〜行くぞ〜！」

山田先生の掛け声でバスは走り出し目的地の神奈川に向かう。

~~~~~\*~~~~~

「それじゃ〜目的地までまだ時間があるから寝ようかな〜」

「え〜!?せつかく皆で旅行なんだからランプとかやろうよ〜」

「それなら今日泊まる旅館でも出来るだろ？」

「バスはバスでやりたいの！」

「俺はやらないからな！」

俺は色々あつて寝たいのだが穂乃果は許してくれない。穂乃果は頬つぺたを膨らましてスネているが済まないな後で遊んでやるからな…

「穂乃果？太一は寝たいって言っているんですからそんなに駄々をこねてはいけませんよ！」

「もー！だつてだつて！」

「わかつた！わかつた！一回だけな！」

「ことりもやりま〜す♪」

「それは良い案です」

「じゃあ早速やろ！」

穂乃果の機嫌も良くなり俺たちはババ抜きをやり始める。結果は海未がババを最後まで持つていてゲームは終わった。海未は顔に出るので正直かなりわかりやすかった。

「なあ、穂乃果？頼むからそろそろ寝さしてくれよ」

「もう仕方ないな」

「ありがとよ」

トランプから抜けて俺は速攻で眠りにつく、しかし穂乃果達は俺が抜けてもトランプで、遊んでいるためうるさくて眠れない、さらに他のクラスメイトもゲームやらなんやらで盛り上がっていてももう動物園並みだった。

「あー！うるさくて眠れねー！」

「この盛り上がりだから寝るのは無理だよ！」

「くそー！」

一人でブツブツ文句を言っていると前がなにやら騒がしくなっていた。

「しゃー！歌うぞー！」

どうやら山田先生が熱くなつてカラオケを始めた。

「あー！もう！これじゃあもう眠れない！先生！」

「何だ？黒崎？」

「俺も歌います！マイクを！」

「歌いたいなら私より高い点数を取るんだな！」

「良いでしょう！やってやりますよ！」

結局俺はやけになり移動中、山田先生とカラオケ勝負をしていた。声がガラガラになるころには目的地の中華街に着いていた。

「よし…全員バスから降りろよ」

「つ……着いた……声がヤバい……」

「もう……歌いすぎだよ」

「次のライブまでには治しておいて下さいよ」

「ファイト！太一君！」

バスを降りた俺達は早速中華料理の匂いに誘われた。

「良い匂いだね〜」

「何食べようかな」

「私は美味しいものなら何でも良いです」

「甘〜いスイーツとかもあるのかな？」

そんなこんな話していると山田先生がガラガラになった声で話し出した。

「じゃあここで昼休みにするから予定通り一時解散な集合場所はここ、間違えて迷子になるなよ！じゃあ解散！」

山田先生の一声で俺達は解散しあらかじめ決めていた班にかたまりご飯を食べに行くことになった。ああ眠たい……

## 第17話 恐るべし!?!中華の辛さ

バスに降りて解散した俺は、予定通り班でかたまり中華を食べに行く班は4人班で俺、穂乃果、海未、ことりである。まあいつものメンバーなのでそこまで気まづくなることないだろう。

「さあ、中華街に来たんだから中華料理を食べたいよな!」

「穂乃果はもちろんあれを食べたいな!」

「あれって何だ?」

「それは秘密!」

「私は何でもよろしいですよ」

「ことりも太一ちゃんと穂乃果ちゃんに任せるよ♪ことりは食後のデザートで甘いアイスクリームが食べたいな」

「穂乃果も!」

「私もです!」

「じゃあどこのお店で食べようかな?」

「あその店はどうか?」

「良いのでは?」

「じゃあそこにするか」

俺たちがやってきたのは中華料理屋『広州』外見はレンガ造りの洋風で扉の前には中華と書かれたちょうちんがぶら下がっていた。すでに外にいるだけでもすごくおいしい匂いがしてちょうちんお昼時なのでますますお腹が空いてきた。

「いらっしやいませ!何名様ですか?」

「4名です」

「4名様…ってあなた達は!?!」

「?!?!?!」

「もしかして『μ's』の太一さんですよね!?!」

「は…はい…そうですね?」

「そちらは穂乃果さんと海未さん、ことりさんですよね!?!」

「はい!そうですね!」

「うう…何か恥ずかしいです…」

「どうして私たちを知っているんですか？」

「私、実は…最初の動画の時からずっとファンでした！」

「『ム』ファン!?!」

「ここでまさかの俺達『ム』s』のファンがいるとは驚いた。今でも俺たちに投票してくれる人が少ないのにまさかその少ない人の中の1人に会えるとは思ってもなかった。

『ム』s』の皆さんの歌声と踊りが大好きで!これからも頑張ってください!」

「ありがとう!これから応援よろしくね♪」

「はい!おっと今はお客さんでしたテーブルへご案内いたします!」

ウェイトレスの子について行き俺たちは2階のテーブル席に座る。

「太一君!これって中華テーブルだよね!」

「机の1部分が回るから多分そうだろう?」

「あまり遊んではいけませんよ!」

「大丈夫だよ!」

「穂乃果ちゃんこういう時壊しちゃうからね♪」

「うう……」

「まあ時間があまりないし早く頼もうぜ」

メニュー表を開き中に表示してある食べ物を見る。さすが中華よりの様々な料理があるここはやっぱり代表的な食べ物の坦々麺の辛口かな。

「ことりは天津飯かな♪」

「では私はエビチリを」

「俺は坦々麺!」

「じゃあ穂乃果は麻婆豆腐!」

「!!?!」

「お、お前ほんとにそれ食べるのか?」

「そうだよ!穂乃果、前から食べて見たかったんだ!」

「穂乃果、本当に大丈夫なのですか?」

「大丈夫だよ!」

「じゃあ以上で」

「かしこまりました！」

俺たちの注文を聞いたウェイトレスの子は厨房へ入っていった。

「さあどんな味かな？」

「それはガイドマップにも載ってるお店なんだからおいしいだろう？」

そんなことを話していると厨房からおいしい匂いがしてきた

そんなことを話していると厨房からおいしい匂いがした。

「お！来た来た！」

「待たせいたしました！エビチリになります」

「これは私ですね」

「時間がないからお先にどうぞ」

「そうですか？ではいただきます」

パク！

「どうだ？味は」

「すごくおいしいです！味も良く、辛くないです！何よりこのエビが

プリプリしてすごくおいしいです！」

「匂いを嗅いただけでもおいしさが伝わるよ♪」

ことりの言う通り匂いをかいただけで美味しさが伝わってくる。

これは後から来る残りの料理も楽しみだな。

「待たせいたしましたこちらは天津飯となります！」

「これはことりだよ♪」

次の料理はことりが頼んだ天津飯だった。ひとつの大きな丼の茶

碗に大きな黄色い卵が乗っていた。

「じゃあことりもいただきます♪」

パク！

「どうだ？」

「すごくおいしいよ!?卵がすごく柔らかくてご飯とすごく相性が良い

！」

「へえ、俺も次来たときに食べようかな」

「お待たせいたしました坦々麺です！」

「これは俺だなさてどんな味か」

ズルズル…

「お味はどう太一君？」

「すつげえ美味い！正直今まで食べた担々麺よりもおいしいから普通に辛いんだが俺にはちょうどいいな」

俺は辛いものが好きなのでメニューには激辛注意！と書かれてあったが俺には普通と感じた

「待たせたいしましたこちら麻婆豆腐になります！」

「はい！これは穂乃果だよ！」

「では以上の品でよろしいですか？」

「はい！」

「ではごゆつくりどうぞ！」

「じゃあいただきま〜す！」

パク！

「どうだ？」

「辛〜い!?何でこんなに辛いのか!?!」

「どれどれ？」

「だ〜め！」

「何でだよ!?!」

「これは穂乃果が一人で食べるの！」

「そ、そうなのか？」

穂乃果は一人でヒーヒー言いながら食べているまあ中華料理の怖いところは辛いのがあって所だよな、恐ろしい中華料理…

~~~~~\*~~~~~

「ふう〜食った食った！〜ごちそうさま！」

「ふあ〜辛かったよ〜」

「よく頑張ったな！」

「えへへ！」

「ごとりもついつい食べ過ぎちゃったよ〜」

「さあ…もう集合時間もギリギリですので行きましようか」

「うん！」

俺たちは会計を済まし店を出ようとした時。

「あ、あの！」

「ん？」

「サ、サインいただいてもよろしいですか!？」

「「さ、さいん!」「」

サインだど!?俺…練習なんてしないぞ!?ど…どうする？

「ここは穂乃果に任せて!」

カキカキ

「あ、ありがとうございます!」

穂乃果はスラスラと自分のサインを書いた。

「応援これからもよろしくね!」

「はい!」

そう言う俺達は店を出て集合場所へ向かった。

「どうしたんだ穂乃果?サインどこで練習したんだよ?」

「え?してないよ適当に書いた!」

「おいおい…」

「でも、さつき書いた時すっごくしっくり来たからこれからサインを  
求められたらさつきので書いていくつもり!」

「てか?今何時だ?」

「ええ!?大変です!あと五分しかありません!」

「まじかよ!じゃあ全速力で走るぞ!」

「「うん! (はい!)」「」

食べたばっかで横腹が痛い俺達は走って集合場所へ向かった。

## 第18話

### これぞ難攻不落の城!

中華街でまさかの俺たちのファンが居ることに驚いた。さらにそのファンの子にサインを求められようかと思っていたところ穂乃果がまさかの自分のサインを書いた。これにはオレも驚きで実はかなりの才能を秘めているのではないかと薄々思っている。中華街を後にしバスに揺られて30分ついに俺が今回の旅行で1番楽しみにしていた小田原城にやっ到着いた。

「やっときたー小田原城!」

「太一君テンションmaxだね!」

「当たり前だと小田原城だぞ!そりゃテンションも上がるて!」

「はしやぎすぎてはいけませんよ!太一」

「大丈夫大丈夫そこら辺は穂乃果と一緒にするな」

「ひどいこと言うな」

「ことりお城なんて初めて!」

「そうなのか!お城を知らないのは損してるぞ」

「そうなの!」

「この俺が1から10まで全て教えてやる」

「本当!?お願いしますいち先生♪」

「穂乃果も穂乃果も!お願いします!」

「おう!任せとけ!」

いや〜先生って呼ばれるのも悪くないな!あはあははは!おっと集中集中、さあこの知らない生徒に教えて差し上げましょう。

「それじゃここも班行動な!解散!」

山田先生の合図で俺らはまた班で固まる。さあ行きましょう!

「最初にくぐる門は馬出門だ」

「大きな門だね!」

「この門はこの城の一番最初にくぐらなくてはいけない門だ」

「重要な門だね」

「この門の名前の由来は馬屋曲輪が近くにあったからだそうだ」

「へ〜そうなんだ!」

「この門の様に近くに何かがつてその名前から来てるって言う門はあるのですか？」

「流石海未！いい質問だ！実は他にもそう言うのがあるんだ！例えば皇居の半蔵門あれば門のすぐそこに徳川家臣、服部半蔵の屋敷があったからって言われているんだ！」

「なるほど」

馬出門をくぐると広い場所に出た

「少し広い所にでたね！」

「ここは虎口（こぐち）って言うんだ」

「虎口？」

「城の守りの一つで馬出門を突破出来てもここで迎え撃つことが出来るってわけだ」

「突破できても次があるだね」

「守る人たちも必死ってことだな」

馬出門の虎口を抜けると広い空間がでてきた。

「でた〜！ひろ〜い！」

「ここは馬屋曲輪だ主に登城する人の待機所や番所、馬屋今はないがあそこの石垣の上には二重櫓って建物があつたんだ！」

「馬屋って？」

「読んだ字のごとく馬を置く建物があつたんだ！」

「へ〜」

「じつはこの小田原城は江戸幕府の將軍様が上洛（京都へ行くこと）するルートにあつたから宿泊地として使われていたんだ、だから將軍様の馬をここに置いて一夜を過ごすんだ」

「將軍様の馬なんですから良い馬なんでしょうね」

「そうかもな」

住吉橋を渡り銅門にやってきた。

「おっきな門！」

「これは銅門って言うんだ！その名の通り一部分には銅版が使われているらしいぞー！」

「へ〜！見た感じ一番大きな門だよね！」

「そうだな馬屋曲輪と二の丸を繋ぐ大切な門だなここも馬出門と一緒に虎口が、あるんだここも守りは大切ってことだな」

銅門を抜けると二の丸がでてきた。行った事がある人にはわかるがかなり広い。

「ここは二の丸だ！」

「さっきのよりもヒッローイ！」

「ここには、何があったの？」

「ここには御殿があつてな主に小田原藩の行政関係の執務を行なっている場所だったらしい、かなり豪勢だったが地震が起きてその火事で焼失してしまつたんだ」

「それは残念ですね」

「こういう火事とかで焼失しちゃつた建造物は多いんだよな」

「勿体無いよね！」

次に俺たちは常盤木門にやってきた。

「この門は本丸への最後の門だから他の門よりもかなり大きいぞ！」

「この門も大きいね！櫓もあるよ！」

「あそこの櫓は多聞櫓って言つて武器とかが置かれていたらしい」

「この門も地震で倒壊してしまつたんだ」

「これも再建なんだね」

ついに俺たちはメインの天守閣へとやってきた。

「さあ！ついに天守閣ですよ！」

「すつごうい！ゴージャス！」

「おつきいね！」

「流石お城つていう感じですよね！」

全体真っ白の天守閣を見上げる俺達、すぐ隣には駅があり電車と重なつて写真を撮ると良いのが取れそうな気がする。

「んじゃあ早速登ってみましょう！」

「はいー！」

俺たちは入り口のお姉さんにチケットを私展示品等を見ながら最上階へ向かった。

「うわー！綺麗！」

「高いから周りを良く見渡せるよ♪」

「昔のお城の城主も見ていたんですね」

「どうだ？今回の解説でお城の事は少しは楽しめたか？」

「うん！」

「おっ！穂乃果は返事が良いな！じゃあ問題だ！」

「え？」

「馬屋曲輪には主に何があつた？」

「えつと…えつと…」

「はあ…」

「あはは…」

「残念！時間切れ！」

「ええー！」

「穂乃果さん？俺の話を聞いていましたか？」

「聞いてた聞いてた！」

「本当は」

「聞いてたけど忘れちゃった…」

穂乃果は必死に謝ったがこれ指導がいらしますね…

「では復習だな♪」

「太一君!?ごめんなさい！許して〜!!」

「うひひ！」

これ以降穂乃果はお城については聞きたくないほど俺に教え込まれるんだった。

## 第19話

### 君たちのバスシーンを見たい!

小田原城を見学した俺たちはバスに戻り今晚泊まる旅館『北条』に向かっていた。バスの中でも俺の豆知識を穂乃果の頭に叩き込んでいた。やり過ぎだろと思う人も居るだろうが学校に戻ったら今回の小田原城の事を感想レポートに書かないといけないと言う課題があるんだどうせ穂乃果のことだ、俺に泣き付いて手伝って欲しいと言われるそんなことを言われる前にこちらから手を打っていこうと言う作戦だ俺って頭いいな!

「と言うわけだ分かったか?」

「は〜いわかりましたよ〜」

「ならよろしい」

「ねえねえ!今晚泊まる旅館のお風呂は大きいのかな!」

「どうでしょうか?昔からある旅館らしいので広いのでは?」

「今から行く旅館の温泉は美容効果もあるからお肌すべすべになっちゃうかもね♪」

「おー!それは良いね!」

「他にも疲労回復などがありますから日頃穂乃果を叱っている為ストレスが溜まっているのでちようど良いですね」

「それはひどいよ!海未ちゃん!」

「俺も日頃の疲れを癒すとしますかね〜」

そんなこんなを話しているとバスは目的の場所、旅館『北条』へ着いた。

「みてみて!女将さん達だよ!」

「本当だ!」

「おーい!」

「穂乃果!?!はしやぎ過ぎです!」

「まあまあ海未ちゃん♪リラックスリラックス♪」

「はあ…全くしようがないですね」

既にバスの停車場には女将さんが数人待っていて出迎えをしてくれたみんなすごく美人で美しい人ばかりだった。(見とれていると山

田先生に足を踏まれたのはまた別のこと…)

「今回はようこそおいで下さいました」

「こちらこそ今日はよろしく願います」

『願います！』

女将さんの歓迎の言葉を聞きこちらも一言お礼を述べた。

「では、ロビーへ案内します」

「はぐれるなよ」

『はい！』

女将さんについて行き旅館のロビーへ入った。そこには大きな熊の剥製がドン！と置かれていて俺たちを歓迎していた。

「おっきな熊だな」

「穂乃果はその下の子熊の方に目がいつちやうよ」

「可愛いよね」

「だよね！だよね！」

「私はあつたの兜の方に目が行きます」

「あれは関東具足だな」

「関東具足？」

「その名の通り関東の武士達が多く使っていた具足らしい」

「そんなとこまで詳しいですね」

「そうか？うへへ」

「んじやあ各部屋の鍵を渡すから貰った班から各部屋に行けよ」

『はい！』

山田先生に鍵を渡された俺達は泊まる部屋へ向かう

「海の間だつてさ海未ちゃん」

「もう！そんなに名前を呼ばないで下さい！」

「海の間って書いてあるんだから窓の向こうは海景色だろ!?」

「じゃあ入ろう」

スーツと襖を開けるとまず目に入るのは窓の向こうの海景色だった。

「うあゝ綺麗！」

「本当絶景ですね！」

「感激〜！」

「当たり前部屋だったな」

「さあ着替えよ！」

「「え!?」」

い、今こいつなんて言った!?着替えようだと!?俺がいるのに…

「あつ、太一君いるの忘れてた…」

「そうだぞ!俺がいるぞ!」

「何で太一君いるの!?!」

「何でつて部屋がないから」

「「着替えるから出てつてよ! (ください!)」」

「はい!すみません!」

俺は大急ぎで部屋を出た。てか何で俺あの部屋なんだ?

「山田先生!何で穂乃果達と一緒に部屋なんですか!?!」

「簡単な理由だ部屋がない」

「それだけですか!?!」

「いやなら私と一緒に部屋にするか?」

「え、それはいやですわ」

こういうところはこの学院の抜けてるところだよな。山田先生の部屋を後にし元の部屋に戻る。

「穂乃果くも面白いか?」

「うん、いいよ!」

「はいりまくす、おっ!」

「どう?似合う?」

「似合うかな?」

「似合いますか?」

穂乃果達が着ていたのは浴衣だった3人とも青色で白色の藤の花の模様が描かれていた。帯は少し薄い紫色でこの皮それをリボンのようにうまく締めていた。

「似合ってるよ!すつごく可愛い!」

「本当!?嬉しい!」

「喜んで貰って嬉しいな♪」

「は、恥ずかしいです！」

「じゃあ俺はこのまま温泉に入っとうかな」

「穂乃果達はまだ準備しなくちゃいけないのがあるから先に行つてて！」

「了解！」

俺は穂乃果達より先に温泉に向かった。海未とことりが言つてたが美容効果や疲労回復などの効果があるらしいから楽しみだな！

~~~~~\*~~~~~

「誰もいない…」

脱衣所には誰も居なく風呂場にはあるだろうと思つたが誰一人いなかった。これは貸切だな！

「あ~~~~気持ちいい~~~~」

お湯に入つた途端にくるこの衝動！気持ちよすぎだろ!? 疲れが一気に取れたわ！あ〜もうこのままでもいいわ…

何て思いながらゆつくりお風呂に入っていると

「すつごいよ！誰もいない！」

「貸切だね♪」

「穂乃果！走つたら危ないですよ！」

「ん？今の声は？」

ふと穂乃果達の声が聞こえたような…まさか!?俺は急いで湯船の中心にある岩陰に隠れる。

「な、何で穂乃果達がいるんだよ!？」

そこにいたのは穂乃果、海未、ことりだったバスタオルで体を隠してるとはいえもう布一枚ということがやばすぎるだろ!?

ん?。そーういや待てよ、さっきの時間帯から女湯つて書いてあつた!?

や、やばいどうしよ…

「ねえ！海未ちゃん！ことりちゃん！一緒に洗いつこしよ！」

「仕方ないですね今日だけですよ」

「小学生以来かもね♪洗いつこするのは」

穂乃果達は木製の椅子に座り体を洗い始めた。よし髪の毛を洗うときにこそつと抜け出すか。

それから数分穂乃果達は互いの体を洗っていた。

「ことりちゃん胸大きくなったんじゃない!?」

「そんなことないよ!穂乃果ちゃんもお肌スベスベだよ♪」

「ことりはスタイルが良いですからね」

「そう言う海未ちゃんもスタイル良いよ!制服だとわからないけど素肌を見るとわかるよ!」

「やめて下さい穂乃果!恥ずかしいじゃないですか!」

なに!?素肌:見てみたい:いや見たい!いやダメだ落ち着け俺:  
すうーはあー

「じゃあく髪を洗うよ!」

「よし!今だ!」

俺は穂乃果達が髪を洗っている今がこそつとですチャンスだ!よし行こう!抜き足差し足:

「ちよつとだけで良いから少しだけ:うあつ!」

俺は少しだけ穂乃果の方を見ようとすが運悪く足を滑らした。

「だ、誰!」

「お、俺だ:太一だ!」

「太一くん!」

「太一!」

「わりー!この時間帯は女湯だったらしい:」

穂乃果達3人の顔を見ると顔が真っ赤だった。

「……………」

「あの:皆さん?」

「太一君の:」

「太一君の?」

「変態!!!」

パチーン!!

穂乃果のビンタは俺のほっぺたにクリティカルヒットし俺はその時点で記憶が飛んだ。

## 第20話

### お土産争奪戦!

「んで……何で俺が縛られているんだ!」

「当然です!いくら間違えたとしても私たちの身体を見たことには変わりありません!」

「そうだよ!穂乃果の身体は安くないよ!」

「そこを怒るのかよ!」

「ことりも…流石にさっきのは嫌だなあ」

「天使ことりさんまでに嫌われるなんて……」

今俺は何故か分からないが手首と足首をガムテープで縛られて身動き出来ない状態だった。何故この様な事になったのかは前回俺はお風呂の時間帯を間違えてしまった。その時間は運悪く女湯の時間帯で俺は知らずに入ってしまった。ゆっくり浸かっていたが彼女らの声が聞こえた途端に女湯の時間帯なのを気付いたが時すでに遅し彼女らが入ってきた。俺は彼女らが髪を洗っているのを見計らってコソツと抜け出そうとしたが生憎欲望にまけチラツと彼女らを見た途端に運悪く足を滑らしてしまい彼女らにバレたその時点で俺は見失ってしまった彼女らの身体を…そこから正直何も覚えていない。気付いたらこうなつてたつて言う有様だ。

「海未!わかった!お前の練習メニューをしつかりとこなすから!」

「それは本当ですか?」

「約束する!」

「……」

「穂乃果!一ヶ月ラ○チパツク奢つたるから!」

「本当!」

「約束だ!」

「……」

「ことり!お前には何でもしてやる!絶対な!」

「本当に!?じゃあ着せ替えしたり〜カツラを被せて女の子にしたり〜」

「な!だから許して!」

「どうする？海未ちゃん？」

「ではこう言うのはどうですか？」

「ん、なにになに？」

コソコソと穂乃果達は小声で話している何やら嫌な予感が……帰り歩いて帰れとか……一週間10倍の練習メニューとか……考えるだけでも悍ましい……!!

「では！決まりました！」

「何だ!?言ってみろ！」

「私達のお土産を買ってきて欲しいんです！」

「お土産？簡単じゃないか！てことはパシリやな」

「それが違うんだよね」

「え？」

「まあこれ欲しい物だから今日中に確認してね」

「頑張つてね！」

しゃくしゃくやるかこれで許してくれるんなら安いもんだ！さあ明日に備えて飯だ！楽しみ！

「よし！飯だな！」

「夕飯でしたら、もうとつくに終わりましたよ」

「え？」

「太一君が気絶してる時に穂乃果達が食べちゃったよ」

「美味しくてことり舌がとろけちゃいそうだったよ」

「お、俺の夕飯が……ない……」

嘘だー!!と言うことで俺の夕飯ライフはここで終わった。じゃあせつかくだから穂乃果達が欲しいものを見てみようか……え？

~~~~~\*~~~~~

『ブー!』とスマホの目覚まし機能が鳴り響く時刻は朝の5時いつもの学校へ行く時よりも1時間以上早く起きた。穂乃果を見るとまだぐっすり眠っていた。さあまずは穂乃果がお願いしたお土産だな。

俺は服を着替えてこっそりとドアを開けて部屋を出た。まだ皆んな寝てるから静かにな。

「えーっと穂乃果の欲しいお土産は？」

俺は昨日穂乃果から貰った紙を見る。

「太一君へ穂乃果が欲しいのはお饅頭だよ！でも売店とかで売ってるお饅頭じゃダメだよ！穂乃果が欲しいのは温泉街の超人気のお饅頭なんだ！朝早くから並ばないと直ぐに売り切れになっちゃうから朝早くに起きて買ってきてね！」

と書いてあった一様穂乃果からのアドバイスでこの時間帯に起きてお饅頭屋さんに向かっているんだが……どんなけ人がいるかだよな……

「え!?こんなにおるのかよ!？」

お饅頭屋に着くとかなりの人が並んでいた。お店の目の前から信号を渡り約50メートル程の超行列が出来ていた。これは侮っていただわ……

「仕方ない並ぶか……」

俺は最後尾に並ぶ少し肌寒いが我慢して気長に待つ待ってる間にも人が沢山並んで来て後ろを見ると倍以上の行列が出来ていた。

2時間後

「お待たせいたしました！販売スタートです！」

「おっ始まったな！」

従業員の掛け声で長蛇の列がようやく動き出した。この2時間はかなり暇だったがある意味精神統一できたら良しとしよう。

「よし！ようやく俺の番だ！」

列が動き始めて10分俺の番がやってきた。えーつと穂乃果が欲しいお饅頭は……これか!？」

俺は箱に詰められるお饅頭を二箱買ってお会計を済ませる

「申し訳ございません！先程ので完売になりました！」

「えっ！まじかよ！あつぶね、あと数十秒遅かったら完全に終わっていた……運が良かった……」

穂乃果の欲しいお土産を手に入れた俺は次の海未のお土産を見る。

「太一へ、私が欲しいのはお守りです！この地方では有名な神社でかなりの人が参拝に来るそうです。ですが一つ問題がありますそれは見てからのお楽しみです頑張ってください。」

「海未が欲しいのはお守りか……とりあえずその神社のある場所に行くか！」

俺は海未が要望しているお守りを手に入れるべく神社がある場所にむかう。

~~~~~\*~~~~~

「おい……まじかよ……」

神社の場所は想像を絶する場所だった。そこは山のとっぺんなのだそこへ行くには階段しか見当たらずその階段もからなり段数である。

「これは神田明神よりもしんどいぞ……でも許してもらうために行くぞ！」

覚悟を決めては俺はこの険しい階段を一步また一步と汗をかきながら登っていった。

~~~~~\*~~~~~

1時間半後

「や、やっと着いた……頂上だ！」

登山開始から1時間半後ようやく神社のある山頂へ到達した。ここからの景色は絶景で俺らが泊まっている旅館を含め温泉街を一望できた。

「よし！お守りも買えたり戻るとしようか……てか老人ばかりだな？でと登山中は老人とかいたか？聞いてみるか」

俺は近くで写真を撮っていたおじいさんに声をかける。

「すみません、おじいさんはどうやってここまで来たんですか？」

「どうやって？ロープウェイに決まっておるじやろ？」

「ロープウェイ？」

「まさかアンタ階段でここまで来たのかよ！」

「その、まさかです」

「はえ〜？まだそんな事する奴がおるんやの〜」

まさかのここに来て海未に騙されるとは一生の不覚やな……

俺は帰りはおじいさんに教えてもらいロープウェイに乗って楽しんで帰った。

「よし、海未のも終わったな後はことりだな、どれどれ」  
俺はことりから貰った紙を見る。

「太一くんへことりのは穂乃果ちゃんや海未ちゃんより簡単だよ♪美容エキスが欲しいだ！エクスが実は温泉と同じ効果があるからことり、凄く欲しいんだ！よろしくね！」

良かったく流石天使ことり様！ありがとうございます！

とお祈りしながら俺は化粧洋品店へ向かう。

「やっぱりそうだよな」

やっぱり一筋縄ではいかなかったそのお化粧品売り場にはかなりの女性、おばはん、等が熾烈を極めていた。それはまるで虎と龍との戦いの様だった。

「よし！行くしかない！」

俺は勢いよく突撃する。

「あらアンタじゃまよ！どきなさい！」

「じゃまじゃま」

突撃するもおばはん達に跳ね除け飛ばされてしまう。恐ろしいこれほどまでに人気の品にかなりの人だ俺も覚悟するしかねーな！よしオオ神よ俺に力を！

「うお〜!!」

~~~~~\*~~~~~

「おい、高坂！黒崎はまだなのか？」

「もうすぐ来ます！」

「太一くん遅いね…」

「流石にやりすぎました…」

穂乃果達3人はバスの前で俺の帰りを待っていた。すでに時間は3時を回っていた。予定では3時出発だが俺が到着してないのでバスは俺を待っている。

「や、やっと見えた…おい！」

「太一君だ！おい！」

「良かった♪」

「心配しました」

約10分遅れで俺はバス駐車場に着いた。

「ほらよお土産だろ？」

「ありがとう！太一君！」

「ありがとうございました！」

「ありがとう太一くん♪」

「へへ…それはよ…かつ…た…」

俺はそのまま倒れて寝てしまった。かなり眠たかったからな

「もう仕方ないですね…明日から約束守ってもらいますよ」

「もう許してあげようよ！海未ちゃん！」

「おねがい！海未ちゃん！」

「もう…仕方ないですね」

結局海未は許してくれて丸く収まり俺たちの絆はさらに硬くなつた。

### 第3章 新メンバー!!

#### 第21話 あの子を勧誘!

神奈川への旅行へ行き無事に帰ってきて2週間ほど経った時期はまだそこまで暑くない5月、4月のポカポカとした暖かさもありなくどちらかと言えば湿度が上がリ熱苦しくなってきた。この日はいつもより暑く、いつもならのんびりひなたぼっこしている俺もあまりの暑さに教科書で仰いで暑さを紛らわしていた。

「暑い!今日はいつもよりも尋常じゃないほど暑い!」

「ほ…穂乃果も、もうダメかも…」

「だらしないですね…夏になったらこれ以上暑くなりますよ!」

「今日は5月で1番熱い光持って天気予報が言ってる、まだ上がるらしいよ」

「まじかよことり!これじゃ身が持たない!メンバー集めは今日はやめよ…」

「そうだね…流石に無理だよ…」

「何を言ってるですか!生徒会長にやるって言っただのはあなたでしょ!」

「そうだけど〜」

話は4週間ほど前に遡る。俺たち4人は行動で初めてライブをやった、知ってるの通りお客が来なかった。だが1人だけ1年生の子が息を切らしてやってきた。1人しか来ていなかったら俺たちは全力で歌った。歌を歌う前は1人だけだったが曲が終わるときには4人に増えていた。そこには生徒会会長、副会長の絢瀬、東條先輩もいた。絢瀬先輩は「まだ続けるの?」と問いかけると、穂乃果は「やります!」と言った。それを聞いた絢瀬先輩は何も言わず去って行ったが東條先輩は一つだけアドバイスをくれた。「部員を6人集めたら部として活動を認めれる」とそれを聞いた俺達は早速メンバーを集めよう!と思ったがこの暑さだからやる気が出ない…

「て言うかよ、誰か勧誘出来る子居るのか?」

「穂乃果はこの前のライブで来てくれた花陽ちゃんが良いな！」

「それはことりも思った！」

「私もです！」

候補に挙がったのはライブに来てくれた一番最初のお客さんであつた一年生の花陽さんが挙がった。

「じゃあ後で言ってみるか？」

「うん！」

~~~~~\*~~~~~

休み時間俺達は早速花陽さんを勧誘する為に一年生の教室に向かう。

「あれ？いない…」

「本当だ」

「どこで居るのでしようか？」

「あの子に聞いてみたら？」

俺達は近くに居た一年生の子に聞いてみることにした。

「小泉さんですか？たぶん飼育小屋ですよ」

「飼育小屋？」

「あの子飼育委員ですから今週当番なんですよ」

「なるほど」

一年生の子に居場所を聞いた俺達は飼育小屋に向かう。

「あそこが飼育小屋だな」

「あくアルパカさん〜！」

「うわ！どうした！ことり!？」

飼育小屋に着いた途端にこどりの雰囲気が一気に変わった。どうゆう事だ!？」

「うへえ〜ふわふわ〜うへへ〜」

「もう！ことりちゃん！早く探そうよ！」

「もうちよつと〜」

「いつからこんな風になったんだ？」

「この前の体育の時間に器具庫があそこにあるので飼育小屋の前を通るのですがその時に…」

「なるほど、アルパカの可愛さに負けてしまったと…」

ことりは一向に止める際なくむしろさつきより夢中になっていた。

「えへへ〜アルパカさん♪」

「メエ〜ペロ」

「キヤ！うえ〜んべとべとだよ〜」

「ことりちゃん大丈夫！」

「うん…なんとか…」

アルパカは、自分の舌をペロリとこつりの顔を舐めた。こいつ羨ま

…ゴハン！けしからん！

「だ…大丈夫ですか!？」

「なんとか大丈夫そうだ…って君は!？」

「あつ！この前の…太一先輩！」

「覚えててくれたんだ！小泉さん」

「はい！この前のライブ凄く感激しました！」

「それはありがとう！そう言えば小泉さんは飼育委員なんだって？」

「はい！丁度今お水がなかったので交換に…」

「なるほど」

小泉さんは飼育委員の仕事で丁度今水の交換に来たらしい。これはチャンスだ！言ってみるか。

「穂乃果！」

「うん！」

「小泉さん！」

「はい！」

「単刀直入に言います！μ'sに入つてアイドルになつて学校を守りませんか!？」

「え!?!わ…私に!？」

「お願い！」

「お願いします！」

俺たち4人は小泉さんをお願いした。それを聞いた小泉さんは少し驚いていた、さすがに急に言われて彼女が少し動揺していた。そして彼女はいちど息を整えて答えた。

「すいません！私はアイドルには向いていませんから！私は遠慮しておきます！もう授業が始まりますからこれで失礼します！」

　　と言い顔を赤く染めて走って行ってしまった。

「ダメだったか…」

「ん〜どこがダメだったかな？」

「急に言っちゃったから驚いてるんだよ」

「有力候補を逃しちゃったな」

「他の候補の子は居るんですか？」

「俺はまだ西木野さんが欲しい！」

「穂乃果も！」

~~~~~\*~~~~~

「ふう：ヴェエ!？」

最近の日課になっている事業後の音楽放つてのピアノ演奏。今日も引き終わり一息つこうと思った矢先またあの人たちが来た。そう、俺、穂乃果、海未、ことりである。

「良い曲だね〜」

「確かに太一と穂乃果が勧誘したい気持ちもわかります」

「今日は私に何の用ですか？」

「もう一度誘ってみたくて…」

「しつこいですよ！」

　　ここ連続で彼女にもお願いし続けており西木野さんも少し嫌気がさしていた。ここは一つ賭けに出るか…

「ならこれが最後のお願いだ！」

「え？」

「太一君？」

　　俺は深呼吸して

「俺と勝負だ！」

「勝負？何で？」

「楽器の演奏で勝負だ！」

「誰が審判になるわけ？」

「これさ！」

俺はズボンのポケットにしまっていたスマホを取り出す。

「採点アプリ？」

「最近のスマホ便利でな、こういう機能がついているんだよ！」

「ふくん：それで私はピアノで行くわ！あなたは何で行くの？」

「俺か？俺はこれで行く」

俺は隣の準備室に置いてあったバイオリンを手に取った。

「バイオリン？」

「勝負は簡単、お題の曲を演奏してそれを採点機能を使って点数が勝った方の勝ちだ」

「なるほどね：で、あなたが勝ったらどうするの？」

「俺達の：μ sに入ってもらおう」

「負けたら？」

「もう二度と君にこの件に関しては喋らない」

「良いわ！相手になってあげる！勝負は一週間後のこの教室でこの時間帯よ！」

「わかった！」

そう言うと西木野さんは去って行った。

「大丈夫なんですか!? と言うかバイオリンなんか出来るなんて初めて知りました」

「穂乃果も！」

「ことりもだよ！」

「昔な、少しだけやってた。まあやるしかない！」

今日から太一のバイオリンの練習が始まった。

## 第22話

太一 VS 真姫

楽器演奏対決!

「おはよう」

「おはよう、穂乃果ちゃん」

「おはようございます穂乃果、あれ、太一はどうしたのですか?」

「太一君?朝L I O Eを見たら先に行くって」

「そうなの?」

「では、私達も行きましょう」

「うん!」

久しぶりに穂乃果達は3人で学校に登校した。

~~~~~\*~~~~~

一方、2年A組教室では…

♪~☒~

「よし!何となくコツを戻りつつあるな!」

俺は朝一番に登校し一人でバイオリンの練習をしていた。昔やっていたこともあつてか、直ぐにコツは掴んでいた。昨日西木野さんに勝負を挑んだのはいいが、まだまだ彼女のレベルは上、初日から手を抜くわけにもいかない。

パチパチパチ

「凄いよ太一君!穂乃果の思っていたより上手い!」

「本当にバイオリンをやっていたんですね!」

「良い音色だから眠たくなっちゃうよ」

「お、お前らいつのまに!」

「演奏が始まった頃かな?」

演奏が終わり後ろを見ると3人が拍手をしていた。案外集中していると人が来ても気づかないもんなんだな。

「太一っていつからバイオリンをやっているんですか?」

「いつだっけな…確か小学1年から4年までだった気がする」

「どうして辞めちゃったの?」

「それが覚えてないんだよ…あんまり」

「そうなんだ…」

「でも凄いよね！6年以上触ってないのにここまで出来るなんて！」

「それは俺が天才だからだよ！」

「あはは…」

「きつと先生の教え方が上手かったのですね」

「先生ってどんな人なの？」

「先生？俺はビルバイオリン教室とかは習ってないぞ」

「じゃあ誰に教えてもらったの!？」

「俺のバイオリンの先生は親父だった」

「お父さん？」

「ああ！親父凄く上手でな、それを見て俺もやりたいって言ったら教えてくれたんだ！」

「良いお父さんなんだね！」

そんなことを言っていると続々とクラスメイトが登校しいつもの賑やかなクラスになっていた。

~~~~~\*~~~~~

授業中みんなが必死に黒板の字をノートに書いているが俺はこっそりと練習をしている。

「太一君、何みてるの?」

「これか？バイオリンの楽譜だ」

「楽譜？」

「これを見て苦手な所を研究しているだ」

いつもならこの時間は居眠りしている穂乃果もこれには興味津々で目を光らしてこつちを見て言った。

「おい高坂、何やってるんだ？」

「はい！太一君とちよつと…」

「何やってたんだ？黒崎」

「ちよつ！穂乃果何言ってるんだよ!？」

「二人とも立ってるろ」

「えくそんな！」

「残念だったね太一君！」

コイツ後で覚えとけよ…絶対パン一つ食べてやる…

こんな事を毎日やっていると気付いたらいつのまにか期限の1週間が経っていた。

~~~~~\*~~~~~

「太一君いよいよだね!」

「ああ!この1週間しつかりと練習したんだ!絶対に勝って西木野さんをメンバーに入れるんだ!」

「ズルはいけませんよ太一」

「流石にそこまではやらないから大丈夫だ!」

「太一君頑張ってね♪」

おお!天使ことり様がこの俺に応援を!これは絶対勝たないと!いや勝ちます!」

「ああ!絶対勝つ!」

「じゃあ!音楽室へレッツゴー!」

「おー!」

俺は穂乃果達と音楽室に向かう。音楽室には既に西木野さんが待っていた。

「やつと来たわね、さあ:さっさと倒して帰りたいわ」

「西木野さん:俺は絶対に君に勝つ!」

「たかが1週間練習しただけで私に勝とうなんて10年早いわ!」

「太一君!頑張って!」

「俺は負けない!絶対に!」

俺はズボンのポケットからスマホを取り出し例の採点アプリを開く、開くと最初に課題の曲を聞かれる。無論俺は課題曲は決まっている。

「じゃあ最初に課題曲を教えてください、それでコンピュータが自動で採点モードになってくれる」

「そう:じゃあ言うわ私の課題曲は:」

「俺の課題曲は:」

「くるみ割り人形!!」

まさかの俺と西木野さんの課題曲が一緒だった。これは色々と厄介だな:」

「一緒とはね…」

「まあ曲が被った方が採点的にはやりやすからな」

「じゃあ私が先にやらしてもらおうわ」

「どうぞ」

西木野さんはピアノの前の椅子に座り指をピアノに乗せ演奏を始める。彼女のピアノは何回も聞いたことはあるが今回は一段と良い音色になっている。

「相変わらず上手いな」

「そりゃ私達を虜にした人だよ！当たり前だよ！」

「ふう…終わったわ点数はいくつ？」

「点数は…」

94. 32点!!

「ふん！まあまあね！」

「本当かよ…本当は意外な点数に驚いてるんじゃないの？」

「そんな訳ないでしょ!？」

「じゃあ、次は俺の番だな」

「太一君！フアイトだよ！」

「おう！」

俺はバイオリンを取り出し演奏体型に構える。そして大きく息を吸って演奏を始めた。

「!?なんなの、この音は！」

「どうゆう事？」

「彼は本当にバイオリンはあまりやってなかったの？」

「太一君曰く触ったのは6年ぶりだって」

「……」

俺は全力で曲を弾いた。その時は穂乃果達おろか周りの事をまったく気にせず全力で曲を弾いた。

「ふう…弾き終わったぞ」

「ふ…ふん！絶対に私には勝てないわよ！」

「どうだか…じゃあ点数を見てみようか」

96. 34点!

「勝った…勝った!?!」

「凄い!凄いや!太一くん!」

「やりましたよ!ことり様!」

「おめでとうございます太一」

「これで真姫ちゃんは仲間だよ!」

「ど…どうして…私が…1週間しか練習していない人に負けないといけないよ!」

「西木野さん…どうして勝てなかったか分かるか?」

「勝てなかった理由?」

「君が俺を侮りすぎて本気を出してなかったからだ!」

「!?!」

「君が本気を出していれば君の圧勝だったのに…」

「悪かったわね!本気出してなくて…私はただ…ただ…」

「理由は聞かないでもこれだけは約束だ!俺たち…いや、sに入つて下さい!」

俺は西木野さんに手を差し出した。それを見た西木野さんは自分の手を俺の手に乗せた。

「よろしくね真姫ちゃん!」

「よろしくね真姫ちゃん♪」

「よろしくおねがいます真姫」

「よろしくな西木野さん!」

「その、西木野さんはやめてよ!これからは真姫ってよんで!」

「じゃあよろしくな真姫!」

新たに新メンバー真姫を迎えて俺達は4人から5人になった。目標の6人まであと一人!

「希…勝手に何言ってるのよ?」

「うちのはあの子らに部の新設の方法を教えただけよ」

「まさかあの子が入るなんて…私達も手を打たなくてはいけないわね」

生徒会室、生徒会長と副会長は密かに何かを始めていた。

## 第23話

### 内気なあの子の本音

「かよちゃん!」

「凜ちゃん!?!」

「また、ボーツとしてたでしよ!」

「ごめんね…」

「もう…聞いたよ!」

「何を?」

小泉さんが一人考え事をしていると前から同じクラスメイトで、幼馴染の星空さんがやって来た。

「この前ライブをやった先輩達から部活に入らない? って誘われたけど断ったんだって?」

「うん…そうなんだ…」

「どうして断っちゃった?」

「そ…それは…」

話は1週間ほど前に遡る。俺は穂乃果達を連れて小泉さんのところへ行き、単刀直入にスクールアイドルをやらないか? と勧誘してみたが、小泉さんはそれを聞いて動揺してしまい『ごめんなさい!』と一言だけ言って去ってしまった。それから小泉さんは誰にもこの事を言わず気が付いたら1週間経っていた。

「私には向いてないよ…スクールアイドル」

「え〜! 絶対出来るよ! かよちゃん本物のアイドルみたいで可愛いもん!」

「凜ちゃん…」

「今度先輩達に言お!」

「む…無理だよ〜」

「かよちゃん!」

「……」

小泉さんと星空さんが喋っているのを真姫はコソツと本を読むフリをして聞いていた。

~~~~~\*~~~~~

「向いてないか…」

「本人はそう言ってたわよ」

さっつきの一連の流れを真姫は俺に全てを話した。

「海未もそうだったが彼女も無理無理言ってたが結局はあそこまで成長してるから小泉さんも出来ると思うんだけどな…」

「何か向いていない理由があるんじゃない?」

「それはあるな」

「今度聞いてみようかな?」

と俺が言うと真姫は大きくため息をつく。

「はあ…またあなたが来ると逃げられちゃうわよ」

「そうですね…」

「ここは私に任せない!」

「いいのか?」

「私に掛かればこんなの簡単よ!」

「それなら頼んでもいいか?」

「わかったわ!それじゃあ」

そう言うとき真姫は去っていった。

~~~~~\*~~~~~

「じゃあちよつと付いていってみようかしら」

授業後真姫はこっそりと小泉さんの後を追う。小泉さんから10メートルほど離れてこっそりと追いかける。

「あそこは…」

後をついていくときそこはお前俺たちが作った募集中の紙が置いてある所だった。そこで小泉さんはその紙を取りカバンの中へしまい立ち去った、だがその時小泉さんは知らぬ間に何か落としてしまった。

「これって、あの子の…」

真姫は小泉さんが落としたものを拾う、それは小泉さんの生徒手帳だった。そこには証明写真、生徒番号、住所等が書かれていた。

「どうしようかな…」

真姫はどうしようか迷った、先生に渡すか直接本人に渡すかを。

「いや！本人に渡すしかないわ！」

真姫は早速小泉さんの生徒手帳見てそこに書いていった住所を頼りに小泉さんの家に向かった。

~~~~~\*~~~~~

「ここね」

学院から歩いて15分、真姫は生徒手帳に書いてあった通りの家に到着した、その家の表札には『小泉』と書かれていたのでまず間違いはないだろう。

「よし！押すわよ」

真姫はインターホンを押した。押すと家の玄関から小泉さんが出てきた。

「はあ〜い…どちら様ですか？つて西木野さん!？」

「これ落としたでしょ？」

「あ…ありがとう、上がってく？お礼と言ったらなんだけどお茶くらいならだすよ」

「ありがとう頂くわ」

小泉さんに誘われて真姫は小泉さんの家に入った。

「どうぞ…」

「ありがとう…」

すすつとお茶を飲んで真姫は朝星空さんと話してた事について小泉さんに聞く。

「小泉さん…」

「なんですか？」

「スクールアイドルやらないの？」

「!?どうして知ってるの？」

「朝、星空さんと話しているのを聞いたの」

「そうなんだ…」

最初に聞いた時どうしよう!?!と戸惑っていたが小泉さんは理由を聞くと落ち着きを取り戻す。

「何でやらないの？」

「わ…私には向いてないよ…」

「どうして向いてないって言うの？」

「わ…私、声を大きく出すの苦手で…おまけに運動も苦手なんだ…だから私が入ったら足手まといになると思うの…」

「なるほどね…わかったわ！私が何とかしてあげるわ！」

「え？」

「明日私があなただを練習してあげる」

「で…でも！」

何か言おうとしたがその時には真姫は自分のカバンを持って帰っていた。

「別に…いいよ…」

~~~~~\*~~~~~

「ん？真姫どうした？」

「小泉さん入る気はあるらしいわ」

「まじで!？」

家に帰る途中真姫は俺に電話をしてきた。話の内容はさっきの事らしい。

「さっき、とある事情であの子の家に行ったのよ…」

「それで？」

「私には向いてないって言ってたわ」

「それは朝聞いたな理由はわかったのか？」

「声を大きく出すことが苦手で運動神経もあまり良くないから足手まといになるなら入らない方がいいって」

「なるほどね…ってことは!？」

「さっき言ったことが何とかならば入ってくれるってことよ！」

「よし!わかった、真姫君にこの事は任せても良いか？」

「言われなくても分かっているわよ！」

「じゃあ頼む！」

「了解！」

そう言うと真姫は電話を切った。俺は今の事を穂乃果達3人に伝えると3人は凄く喜んでいた。

~~~~~\*~~~~~

「私なんか出来るのかな…」

小泉さんは自分の写真のアルバムを開いてマイクを持って楽しそうに歌っている小さい頃の自分を見て一人部屋で考えていた。そのとき、LONEを見ると星空さんから連絡が来ていた。中を見ると…

「かよちん！明日凜が練習してあげるにゃ！」  
と書いてあった。

「練習…」

練習と聞くと小泉さんの頭の中に真姫の事が浮かんできた。

## 第24話 内気なあの子に勇気を!

「…ちん! かよちん!」

「り…凜ちゃん!」

「やつと起きたね! おはよう!」

朝なぜかわからないが起きたら星空さんがいた。

「どうして私の部屋にいるの!」

「昨日言ったよ! 朝かよちんの練習するって言ったにや!」

「いくらなんでも起こしに来ることはないよ!」

「ごめんごめん!」

小泉さんは急いで学校の準備をして急いで朝ごはんを食べた。

時間は朝の7時30分登校の時間まで1時間以上ある。小泉さんはジャージに着替えて体を動かしやすい服になる。

「じゃあ最初っから走ってくにゃー!」

「え〜!?!いきなり走るの!?!」

「アイドルはダンスもするから少しでも運動出来るようにしないと! そんな時は走って持久力を付けるのが良いにや!」

「そ…そうなの!?!」

「いつくにゃ〜!」

「ちよ…ちよつと待って…ダレカタスケテ〜!」

星空さんは小泉さんの手首を持って走る。だが全く走った経験の無い小泉さんは星空さんに付いていくだけでも精一杯だった。

「り…凜ちゃん…少し…早いよ…」

「え〜これでもダメなのかにや? じゃあ少しペースを下げるにや!」

町内をグル〜と一回りし終わるといつのまにか登校する時間帯ちなっていた。

「じゃあ今日の練習はこれで終わりにや」

「え〜明日もやるの!?!」

「かよちんがしっかりとスクールアイドルを長くやるためにやってるんだよ!」

「そうだけど…」

「早くしないと遅刻するよ！」

「う…うん…」

小泉さんはさっきのランニングで下半身が筋肉痛になって一歩一歩歩くだけでもかなりの痛みだった。それを我慢して小泉さんは星空さんと二人で学院に向かった。

「や…やつと着いた…」

「もう…元気が無いなく、かよちゃんは…」

「朝からあれだけ走ったらこうなるよ」

学校に着いたは良いが既に小泉さんの体力は限界が近づいていた。下半身は筋肉痛で動けず息は切れてしまいボロボロの状態だった。

「ねえ凜ちゃん…」

「何にや？」

「私がスクールアイドルやるなら凜ちゃんもやらない？」

「凜も!？」

「うん！」

「無理無理!だって凜…髪は毛短くて男の子みたいだし…だから無理だよ！」

「そんな事ないよ！」

「そうかな…」

そんなことを言っていると朝のチャイムななり星空さんも自分の席に戻った。

「スクールアイドルか…」

星空さんは小さく呟いた。

授業中小泉さんは考えていた。星空さんと真姫といったクラスメイトが応援してくれて、俺、穂乃果、海未、ことり、先輩達が入ってくれるのを待っているという事を、しかし自分は声が小さく運動も苦手で、自分にスクールアイドルが出来るのかという事、だがアイドルになりたいって言うのは昔からの夢、せつかくなれるチャンス逃していいのかと言うことを。

「小泉さん？」

「は…はい！」

「27ページの3行目読んで」

「はい…」

「……」

そんな小泉さんを真姫は一人チラツと見ていた。

~~~~~\*~~~~~

「ねえねえ…太一君」

「何だよ？」

「本当に花陽ちゃん…入ってくれるよね？」

「それは、本人次第だ俺にはわからん」

「でも真姫ちゃんが任せてって言ってるんだよね？」

「真姫の事ですし彼女に任せてみましょう」

「そうだな」

俺達は小泉さんに入ってもらえるよう手を打ちたいがこの前の様に逃げられてしまつてこのまま入つて貰えないって言う展開になつたら困るので俺達はただ真姫に任せる事しか出来なかつた。

「太一君！穂乃果後で真姫ちゃんに聞いてくる！」

「ちよ、穂乃果！声でけーよ！」

「おい！黒崎、高坂何やってるんだ？」

「山田先生俺は何も！」

「言い訳はいらんぞ！二人ともそこで立つてろ！」

穂乃果が大声で俺に喋ってきてそれを山田先生に見つかり俺と穂乃果は立たされた。

「穂乃果…後でジュース奢りな」

「えへへ、道連れだよ！」

~~~~~\*~~~~~

授業後学院中庭

「小泉さん！練習するわよ！」

「ここです！恥ずかしいよ…」

「こんなところで恥ずかしいがってちゃスクールアイドルはやらないわよー」

授業が終わり今から家に帰ろうと思ったところ真姫に見つかつて

しまい、小泉さんの手首を引つ張り中庭に連れてきた。なぜ中庭かと言うところの時間帯、家に帰る生徒、部活動をしに部室に向かう生徒が多いため中庭には全く人がおらず絶好の場所なのだ。

「でも…」

「良いからやるわよ!」

「う…うん…」

真姫に強気で言われて小泉さんは小さく頷く。

「アー、アー、アー、アーア…さあ今度はあなたがやってみて」

「う…うん…アー、アー、アー、アーア…」

「声が小さい、もう一度」

真姫が先に綺麗な歌声で音階を唱える。それを歌い終わると真姫は小泉さんにバトンを渡して今度は小泉さんが音階を唱えるが声が小さく真姫にもつと声を大きく!と少し怒られてしまった。

「アー、アー、アー、アーア…」

「よし、いい感じ!そのままの声でいっしょに!」

「二アー、アー、アー、アーア」

小泉さんは今度は大きな声でリズムカルに音階を唱える。その声を聞いて真姫は満足したのか次は一緒に二人で音階を唱える。二人の声は綺麗にはもり少し風が吹いてザワザワしていた木も、二人が歌っている時はピタリと静かになっていた。

「良いんじゃない?」

「あ…ありがと…」

「じゃあもう一度…」

「かよちん居たにゃ〜!」

「凜ちゃん!」

「星空さん…?」

次のステップに行こうとすると渡り廊下から星空さんが走ってきて小泉さんの手を握る。それを見た真姫は少し驚いていた。

「かよちん!今日こそ先輩達にアイドルになりますって言わなきや!」

「今日言うのはちよつと…」

「ダメだよ！早い方がいいよ！」

「でも…！」

「待って！アイドルになる前に基礎的なことは学んでおかなきゃ！」

星空さんは小泉さんに早く行かなきゃ！と言っているが小泉さんは心の準備をまだしていない、それに気付いた真姫は星空さんを止めにかかる。

「何で西木野さんが止めるの!?!」

「私は小泉さんの事を思っで！」

「凜だっでかよちんの事を思っで言っでるにや！」

「ちよつと！二人とも喧嘩はやめて！」

「小泉さん（かよちん）はどう思っでの!?!」

「わ…私!?!」

二人が言い合いになり、喧嘩をしているところを止めようと喧嘩の仲裁に入るが逆にどう思っでのか?と聞かれてしまった。

「私は…」

「そう言っばどうしてかよちんにこんな事をさせているの!?!」

「私はこの前『μ's』に入ったの！前もそうだっただけで『μ's』の曲は私が作曲してるとの！だから私は彼女にスクールアイドルになる気持ちがあるのならそれを叶えてあげたい！」

と真姫はスクールアイドルになった事、『μ's』の曲の作曲者である事を二人に話した。それを聞いた二人は勿論驚いていた。

「そうだったの!?!」

「初耳だにや！」

「さあどうなの?スクールアイドルになるの!?!」

「決めました！私はスクールアイドルをやります！」

「よく言ったにや、かよちん！さあ、先輩の所に行こ！」

「うん！」

「ちよつと待ちなさいよ！」

星空さんは小泉さんの手首を引っ張り午後俺達が練習している屋上へ向かった。真姫はその二人を見て小さくため息し二人の後を追った。

~~~~~\*~~~~~

「今日はこなかったね…」

「明日は絶対に来るよ、」

「だと良いですが…」

「来る！真姫を信じるんだ！」

「さあ練習を始めますよ！」

「おう！」

「ちよつと待ってください！」

「ん？君は!？」

今日もいつも通り屋上で午後の練習を開始しストレッチを始めようとした時ドアが開き中から小泉さん、星空さん、真姫が出てきた。

「小泉さん！どうしたの!？」

「はあ…はあ…ふう…私！運動が苦手で声も小さいですが！でも、スクールアイドルへの想いは誰にも負けません！一生懸命頑張ります！だから！私を…『μ's』のメンバーにしてください！」

荒れた息を整えて小泉さんは大きな声で俺達に伝えた。それを聞いた穂乃果は一步前へ出て小泉さんに手を差し伸べる。それを見た小泉さんも自分の手を差し出して穂乃果の手に触れて二人は握手した。

「それで星空さんはどうするのかな？」

「え？」

「アイドル部はいつでも部員募集中です！」

「凜なんかが入っても良いんですか！」

「当たり前じゃないか！」

「それなら！凜も入ります！これからよろしくお願いしますにや！」

「凜ちゃん…！」

「かよちゃん！やるからには全力でやるにや！」

「うん！」

この1週間で4人だった俺達は一気に7人に増えた。これで副会長の東條先輩が言っていた部員7人をクリアする事が出来た。これで部活動を新設する事ができる！

はずだった…

## 真姫の初めてのトマト栽培!!

「ねえ!太一、トマトって自分の家で作れるの?」

「急に何言ってるんだよ...?」

「ねえ作れるの?」

「作れるは作れるが中々難しいぞ!」

「だからあなたにお願いするんじゃない」

ある日の金曜日いつも通り次の日は休日なのでゆっくり過ごそうと考えていた所これだ:穂乃果:と言い真姫と言い:コイツら俺の休日を何だと思ってるんだ?

「何で俺なんだ?」

「あなたにしか頼めないのよ...」

「何があった?」

「実は...」

真姫の話はこうだ最近野菜の物価が上がり各家庭でも野菜の入手が困難になっている。もちろんお金持ちの西木野家は関係ないと思うのだが真姫のこだわりで、とある農場のトマトしか食べないらしい:だかその農場のトマトも物価が上がり中々手に入れにくいらしくそこで、真姫は自分でトマトを家で栽培して食べようと思ったのだが生憎真姫は自分だけ野菜を育てることはやった事がないらしい。こういうのに詳しいにこに聞けば良いのに彼女曰く自分のプライドが傷つくとのことで仕方なく俺に頼み込んだと言っているのだ。

「なるほど大まかだがわかった。で、俺はお前に何を教えれば良いんだ?」

「一から」

「わかった...」

「明日早速、種やら何やらを買いに行きましょう」

「どこで待ち合わせだ?」

「私が迎えに行くから良いわ家で待ってて」

「お...おう...」

迎えに来るって真姫も可愛いところがあるな、さあ明日真姫に教え

ないといけないから勉強だな。

~~~~~\*~~~~~

翌朝

「待ってるって言ったが全くこないぞ?」

真姫の言う通り家の外で彼女を待つ。だが一向に姿を現さない。10分程待っていると俺の前に黒塗りの高級車が止まった。後部座席にの窓から姿を見せたのは真姫本人だった。

「待たせて悪かったわね」

「かなり待たされたぞ」

「さあ早く乗って」

「失礼します」

俺は真姫の反対側のドアから車内に入り真姫の隣に座る。

「運転手さんお願い」

「かしこまりました」

「何処にいくんだ?」

「すぐそのホームセンターよ」

「なるほど」

俺が乗ると車は動き出し近所のホームセンターに向かう。

「真姫って、いつもこの車で移動してるのか?」

「そうよ、学校への登校以外は移動手段は車よ?当たり前じゃない」

「そ…そうなのか?」

恐るべしお金持ちのお嬢様…

そんなこんな話しているとホームセンターに着いた。

「着いたわ!」

「よし!買ってくか!」

「運転手さん車よろしくね」

「かしこまりました」

車を運転手さんに任せて俺と真姫はホームセンターに入る。園芸関係の所にやってきて種を見るがトマトはトマトでもかなりの種類があるからな。

「さあ、トマトと言っても種類がいっぱいあるからな、どれが良いんだ

「？」

「私は普通に食べているトマトが良いわ！」

「了解！じゃあこの種だな」

俺は種をカゴの中に入れて次の商品を探す。

「次は、土だな」

「畑ならこの前作ったわよ」

「そ…そうなのか？早いな」

すでに畑を作っているとは…もう俺いらないんじゃないか？

「じゃあ欲しいものはだいたい買ったから帰るか」

「そうね！」

欲しいものをあらかじめ買いお会計を済ませて車に戻る。お会計は真姫のクレジットカードだったけどな！

車には運転手さんが車のエンジンをつけて待っていた。車内に入るとエアコンが効いていてかなり涼しかった。

「んで…後は自分でやるのか？」

「何で私がやるのよ？太一がやってくれるんでしょ？」

「植木鉢程度ならいいけど？」

「何言ってるのよ？そんなわけないでしょ？」

「へ？」

真姫の家に着くと彼女が言っている意味がわかった。彼女の家は大きく庭も広い。その庭の角の隅に俺の家の部屋程の広さの畑があった。

「おい…これを俺一人でやれと？」

「そうよ」

こんな広い畑を俺一人では絶対に無理だ！やるなら真姫にもやらせないと！そうだ！…こんな時はあれだ！

「真姫…いいか！野菜は自分で作るから美味しいんだ！だからお前もやらなくちゃ食べちゃダメだぞ！」

「そ…そうなの!?…なら私も作るわ！」

ふっ、チヨロいな…こんなことを言えば俺の勝ちだ。

「じゃ…じゃあ最初は何をやるの？」

「最初は土をならすことだ！これが最初で最後で1番しんどい仕事だ！」

「う…うん…」

真姫はクワを持つと俺のやり方を見て見よう見まねでやるが上手く出来なくてイライラしている。

「どうやって太一みたいにサツサツとできるのよ!？」

「甘いな真姫、いいか？腰をこうやって下ろして最初持ち上げるときは力を入れて降ろす時は力を抜けば簡単にできるぞ」

「そ…そうね、じゃあ言われた通りに…えい！」

真姫は俺に言われた通りにやってみるとスラスラと簡単に言われたとおり出来ていた。

「出来るじゃないか！」

「ふん！当たり前前よ！私を誰だと思っているのよ？」

「真姫お嬢様です」

「次はどうするの？」

「次は耕した土をこうやって盛って一列ズラ〜つとやってく」

「わかった」

畑を耕して次は土を盛る作業に入る。すでに畑をさつき耕したので土が柔らかくて簡単にできた。これは真姫でも簡単に出来て、彼女も鼻歌を歌うと程簡単なのだ。

「土はこういうの感じで良いの？」

「上出来だ！次はさつき盛った土の上に黒のビニールを被せるぞ」

「それはどういう事に使うの？」

「これを被せると被せたところからは雑草が生えにくくなる便利だろ？」

「へ〜そんなんがあるの…」

「俺がこつちを持つから真姫はそつちを持って俺の反対側に行ってくれ」

「了解」

今度はさつき盛った土の上に黒のビニールを被せる理由はさつき言ったが被せる事で雑草を生えにくくする効果があるらしい筆者も

実際にやった事があるらしく、かなりの効果があるらしい。

俺がビニールの端を持ち、真姫はもう片方の蓋を持つ。土とビニールの間に空間が出来ないように上手く被せる。

「いいか！絶対に離すなよ!」

「言われなくてもわかってるわよ!」

俺は真姫が支えている間にビニールの端に土を被せる。これにはすこし苦戦した土をかぶせたと思ったら土の量が少なくビニールが露出してやり直しが多かった。

「何とか出来たわね…」

「苦労したけどな…」

「次は何をするの?」

「種を植える穴を掘るぞ!」

「いよいよね!」

次はさつき盛った土にビニールを被せ少し穴を開け2、3センチ掘ってそこに種を植える。

「このままビニールごと掘るの?」

「そうだ、深さは2、3センチ位で直径は10センチ位で良いぞ、間は30センチ位開けてな」

「わかったわ」

真姫は小さいスコップを持って俺が言った通りに穴を掘る。10分程で12個の穴を作ることが出来た。

「よし!じゃあ種を植えるぞ!」

「一つの穴に種一個?」

「種は小さいから3個程入れてくれ」

「3個ね」

種を穴の中に入れて優しく土を被せてジョウロで水を撒き今日の作業は終了した。

「どれくらいで収穫できるの?」

「そうだな〜丁寧に育てれば1ヶ月ちよつとかな…」

「楽しみね」

「せっかくだから採れたトマトは皆に食べてもらおうか」

「それはいい案ね！」

「いいか？明日からしつかりと水やりと雑草が生えてきたら取れよ！」

「言われなくても分かってる！」

俺は真姫に農作物について注意事項を教えて俺は家に帰ってゆつくりと過ごした。

~~~~~\*~~~~~

「あら太一じゃない？」

「よう絵里どうした？」

「真姫から聞いたわ、真姫が家庭菜園を始めたそうね？」

真姫の奴もう皆んなに言ってるのか？家庭菜園なんて庶民皆んなやってるぞ？バカにされるのが見えてくる。しかもこの前植えてからそこまで日付も経ってないから真姫がいかに収穫を楽しみにしているかがよくわかる。

「そうなんだよ、あいつって結構維持を張る事があるから教えるの大変だったんだぞ？」

「真姫らしいじゃない」

「まあ…そのうち嫌でも俺に泣きついてくるさ」

「どう言う意味？」

「まあ見とけて！」

そんなこんなで絵里と話していると案の定、真姫が涙目で俺の所にやってきた。これは俺もビックリ、絵里に例え話しをしていた矢先にこれだけ、俺ってエスパーなんじゃね？

「太一〜！」

「よう真姫、どうした？」

「ちよつと来て、絵里太一貫うわよ」

「え…ええ…」

「俺って商品かよ!？」

「良いから黙って来なさい！」

真姫に強引に連れてかれ付いて行くと人気の無い無人の教室にやってきた。教室の中に入ると真姫は恥ずかしそうに要件を話した。

「んで？どうした？さては枯らしたか？」

「うるさい！違うわよ！」

「じゃあどうした？」

「虫よー！」

「虫だろうな」

「何で分かるのよ!？」

俺の予想は見事的中、簡単な話し虫らしい、この季節は虫が多いからな。

「簡単な話だこの時期は虫が多いからなその幼虫が葉を食べるんだろ？」

「そ…そうよー！」

凶星だったらしく、いつものツンデレ満載で俺に喋ってくる。相変わらずの仕草だが彼女なりに勇気を出して言ったのだろう。

「要件は言わなくても分かる。俺に虫を取れって言うんだろ？」

「ピンポン、正解当たり前じゃない、あなた以外に誰がやるのよ？」

「あんな…それくらい自分でやらないといけないぞー！」

「だって…」

俺が強く言うとうと真姫は涙目になる。穂乃果といい、μsのメンバーの多くは俺にお願いするときは上目遣いになる。卑怯だぞ…まあ結局は首を縦に振つちまうんやけどな。

「とりあえず今の畑の現状を見にお前の家に行こうか」

「どうぞ…虫いっぱいよ？」

「案ずるなー！」

真姫と共に学校終わりに真姫の家に向かうと畑は悲惨だった。

「んじゃこりゃ!？」

「だから言ったでしょ？」

「これは酷い…」

真姫の畑は俺の想像よりも遥かに酷かった。俺がこの前見たときは普通の綺麗なトマトの葉っぱ達だったのだが、現状は酷く、葉っぱには蝶々の幼虫が葉っぱを虫歯っているのだ。

「何でここまでほっておいたんだ!？」

「触れないからに決まってるでしょ!？」

「んでもな!」

「貴方ならやってくれと思うたのに」

真姫は上目遣いでこっちを見てくる相変わらずだがこのままでは俺の特殊な能力が…

「わ…わかった! やってやるよ!」

「流石太一! 任せたわ!」

「何言ってるんだ? お前もやるんだよ!」

「な…何言ってるの! 私に虫を取れって!？」

「当たり前だ!」

「い…イヤー!!!」

俺は真姫に半分強引に虫取りをやらせた、真姫は涙目で自分の手で幼虫を取っていった。これ以降真姫はしっかりと手入れをし、葉っぱに虫がつくことはなくなった。

## 真姫の初めてのトマト料理

〽前回の話!〽

何を考えたのか真姫はトマトの栽培に興味を持ち休日の日以太一に協力してもらい色々苦勞をしながらトマトの栽培を始める事になったのだった。

~~~~~\*~~~~~

前回の害虫駆除から数週間、真姫はあの恐ろしい虫の怖さを知ったせいかより一層手入りを本格的にやっていた。もはや俺が口出しする事が出来ない程彼女はガチっているのだ。

「太一見て!」

「うつわ!なんじゃこりゃ!?!」

「すごいでしょ?」

「お嬢さん、もう俺ら庶民を超えていますよ」

「ここまですれば何が起きても大丈夫よね」

真姫は俺に自慢して満足顔でその場を後にした。俺はその自慢話を聞かされた時点で真姫がガチになった事を確信した。

「太一君!真姫ちゃんと話していたけど何話してたの?」

「穂乃果達か」

「太一くと話してたって事は例のトマト栽培の事?」

「ピンポン!流石ことり、鋭い!」

「えへへ」

「それで真姫は何を言ってたのですか?」

「それがすごいんだよ!実は…」

真姫と話してた内容はさつきも言ったとうりトマトの事だ前置きで話したように葉っぱに虫が着くようになって涙目ながら虫を捕っていたのがよっぽどシヨクだったのかお嬢様の力を使って凄い事を始めていた。それはビニールハウスである。真姫に写真を見せて貰ったのだが確かにビニールハウスそのものだった。確かにこれを使えば虫一匹愚か蟻一匹も入れないだろう。もうこの時点で並みの人とは大幅に違うのだが、もう一つの方がやばかった。写真を見た時

に気づいたのだが撮影していた位置が違うのだ。普通なら真姫の背丈と同じ位の高さで写真を撮るのが普通だがその写真は真姫より遙かに上から撮ったものだった。そこで考えられるのはただ一つ防犯カメラだ真姫曰くこれを使えば、いつ何処でもスマホから防犯カメラを見ることが出来る。小動物が間違えて入ってしまった時などには使えそうだな。

「と言う訳だ」

「流石真姫ちゃん！ごっシヤス〜!!」

「ことり達は絶対に真似出来ないね」

「真姫だから出来るのでしよう」

「それともう一つある」

「「ん??」」

「真姫は収穫したトマトを是非皆んなに食べて欲しいそうだから今度皆んな真姫の家に招待するらしいぞ」

「それは楽しみですね！真姫が愛情を込めて作ったトマトですから絶対に美味しいはずですよ！」

「穂乃果も美味しいすぎていっぱい食べちゃうかも」

「また太っちゃうよ穂乃果ちゃん」

「そしたらまた私の地獄のダイエットメニューを太一とやってもらいますから」

「俺もやるのかよ!」

「連隊責任ですからね」

そんなこんな話しているが皆んなが真姫のトマトを楽しみにしているって事が分かった。俺も教えた甲斐があったぜ!

~~~~~\*~~~~~

一週間後…

今日は待ちに待った収穫当日のだが…朝起きてテレビを付け今日の天気を見るが…

「曇りのうち雨かよ…大丈夫か?」

せっかく収穫の日なのに天候はあいにくの良くない、雨の中での収

穫だと色々と面倒いので待つてくれる様にてる坊主でも吊るしてお祈りしておく。

「よし！今のところは大丈夫だな」

「雨降らないといいね！」

「本当だよ、このまま収穫まで持つてくれれば良いが…」

「せっかく真姫ちゃんが作ったトマトなんだから食べたいよね！」

「穂乃果！食べ過ぎてはいけませんよ！」

「もう！わかつてるよ！」

「でも美味しいとそのまま食べすぎちゃいそう！」

「だよね！ことりちゃん！」

「穂乃果を甘やかしてはいけません！ことり」

お昼になつても空は曇りのままだが雲行きが怪しくなり今にも降りそうな感じになっていた。

二時間後…

「まくきちゃん！」

「きやあ！やめてよ凜、後ろから！」

「えへへく今日は真姫ちゃんが作ったトマトが食べれるから楽しみなんだにゃ！」

「ふふ♪凜ちゃんずっと前から楽しみにしてたんだよね」

「うん！」

「そんな事言われると照れるじゃない」

「真姫ちゃんが照れてるにゃく」

「珍しいね」

「お話し中悪いが…」

「太一君！」

三人で話してたところを太一が入った。理由は簡単雨が降り始めてきたからだ。

「太一じゃないどうしたの急に？」

「もうHRも終わったんだろ？なら直ぐに帰るぞ！」

「え!？」

「早く！」

「わ…わかったわ！ちょっと待って！」

太一の目を見て状況が分かったらしく急いで準備をして太一と共に走って帰る。

「凜達は後で皆さんと真姫の家に来てくれ！」

「わかったにゃ！」

「気を付けね！」

~~~~~\*~~~~~

「ねえ？どうして焦ってるの？」

通学路を走りながら真姫の家に向かう中真姫は質問をする。

「雨だからだよ」

「雨の降ってる時でも収穫できるじゃない」

「お前今日ビニールハウス開けっ放しだよな？」

「何で知ってるの？」

「念のため学校行く前にお前の家の畑を見てきたんだよ」

「成る程…それと何が関係あるのよ？」

「着けばわかる」

真姫の家に着いた時にはすでに雨は土砂降り、急いで俺は予め用意させていた収穫用のハサミと籠を持ち畑に向かう。

「真姫みる、これが俺が焦った理由だ」

「これは…!?!」

真姫が見た物はトマトだが少し傷んでいた。皮が弾けて中身が飛び出しているのだ。

「ここ最近ライブが近いからあまり日中忙しくて水やり余りできなかっただろ？だからトマト達は水分不足だったんだ、そこでこの雨だトマト達は一齐に水分を摂り始めたから皮がそれに抵抗できなくて弾けてしまうんだ！さらに味も落ちる！」

「じゃあどうするのよ！」

「大丈夫だまだ弾けてるのはほんの僅か先にまだ弾けていないトマトを優先で収穫するんだ！」

「わかったわ！」

「よし！じゃあ私ははこっちから行くわ、太一ははあっちを！」

「了解！」

真姫と太一はずぶ濡れになりながらも何とかトマトを収穫する事が出来た。

「ふう…何とか収穫ができた…」

「もう…ずぶ濡れ…」

「風呂でも入って来たら？その間俺は下ごしらえするから！」

「そう…ならお言葉に甘えて…」

そう言うとき真姫はお風呂場へと向かい太一は下ごしらえを始めた。

~~~~~\*~~~~~

「ふう…さっぱりしたわ」

「おつ？丁度良いタイミングできたなこつちも下ごしらえが終わったところだ」

「何をしてるの？」

「さっきの皮が弾けたトマトを使ってトマトジュースを作ろうかな」と

「トマトジュース…！」

真姫の顔を見ると今まで以上に目がキラキラしていて本当に真姫なのか？と思ってしまう程だ。太一は早速トマトをミキサーの中に入れて液体状にする。ボタンを押すとミキサーが動き始め中に入っているトマトは粉々になり液体になる。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがと！」

真姫はお風呂上がりつて事もあるのか一気に飲み干し、満足顔だ余程美味しかったのだろう。

「お味はどうだ？」

「すつごく美味しいわ！」

「それは良かった」

「あとは料理を待っただけね！」

「料理は作ってる最中だみんなが来る頃には出来上がるからすこし待っててくれ」

「ええ…」

そう言うと太一は再びキッチンに向かい料理を再開した。すると真姫は後ろから太一を追いかけて太一の後ろから抱きつく。

「ま…真姫!?何だ急に!」

「こ…これはお礼よ…! 最初から最後まで付き合ってくれた!」

「そ…それは嬉しいが、こ、これは恥ずかし過ぎだ!」

「わ…わたしだって恥ずかしいわよ!」

「な…なら離してくれ…!!」

「それは嫌よ!」

「まつきちやくん!遊びに来たよ!ってあ…」

「あ…」

そこにはみんなが来ており一部始終を見られてしまった。

「誤解よあれは!」

「そ…そうだ!決してやましい事では無いからな!」

「いいで!いいで!お二人さん♪」

「からかわないでよ!希!」

「照れてる太一も可愛いわね♪」

「うるさい絵里!」

当分俺と真姫はμsのみんなからかわれる存在になるのであつた。

『でも…本当にありがとね、太一♪』

『ん?何か言われたような…』

『…バカ』

## 第4章 黒崎太一脱退!?

### 第25話 新たなスクールアイドル

真姫達一年生組がμ'sに加入してから二週間程たち一年生の三人は少しずつだが練習に慣れ始めていた。新曲も近々完成するしお披露目まで時間が無いので、みんないつも以上に練習に集中していた。「オツケー!一通り通したがまだうる覚えな所があるからそこを重点的にやっつけていこう!」

『はい!(うん!)』

「よし!俺はこの前のPVの盛況をしてみるか」

太一はパソコンを立ち上げいつもPVを上げているアイドルサイトへログインする。相変わらずだが再生回数はかなりの数で真姫達加入してから更に人気が高まっていた。

「相変わらず凄い再生回数だが、順位は上がってないな…これは今度出来上がる新曲で巻き返しだな。」

コメント欄も感想などがびっしりと書かれていて、これを見て元気になる。しかし今回は少し違ったコメントが多かった。

『相変わらずμ'sは凄いですね!でもこちらのグループは関係はあるんですか?』

このようなコメントが沢山あった。そのコメントにはURLも貼られていたので、それを押してみる。押すとページが変わった、サイトは同じなのだが別のスクールアイドルが表示された。

「…これは生徒会長と副会長!?!ともう一人誰だ?」

そう画面に表示されたスクールアイドルは紛れもなく太一達と同じ音ノ木坂学院であったが登場している人物が違う、普通なら太一、穂乃果、海未、ことり、真姫、花陽、凜なのだがこの動画は違った。生徒会長の絢瀬先輩と東條先輩、あと1人見たことがないがおそらく同じ学年の人なのだろう。その人達がμ's同様、歌って踊っているのだ。

「どうしたの太一君?」

「穂乃果か、これを見てほしい」

「なになに？え？ええええ!!」

「どうしたのですか、穂乃果!!」

「穂乃果ちゃん!」

「う…海未ちゃん…穂乃果見てはいけないものを見てしまった気がする…」

「どう言う事ですか？」

海未とことりにもこの動画を見せると穂乃果と同じ反応を示していた。

「これは本当に生徒会長と副会長なのですか？」

「絶対本物だなここの学校の名前まで出して活動してるなら本物以外ないだろう？」

「では、これを理由に私達の活動を認めないんですか？」

「恐ろくな、一つの学校に二つのグループは要らないからな、認めない理由の一つだろう」

「でも！これが理由なら言ってくれば私達が入ったのに！」

「言っても加入させてくれないだろう」

「それは分からないよ！」

「…えりち、バレちやったやん」

「バレたなら仕方ないわ、次の行動を起こすわ」

「いつになったらあの子らに本当の事を伝えるの？」

「まだその時じゃ無いわ」

「うちらが『未来』から来た事を早く穂乃果ちゃん達に言わないとあの事件がまた起こっちゃう！」

「希！今の事は絶対に他言無用よ！」

「わ…わかった…」

穂乃果達が喋っているのを遠くで絢瀬絵里、東條希が見ていた。

「でも、私達が学校生活をしていても気付かないって一体どこで練習でもしてるんだろう？」

「それは俺も分かんが、この学院のどこかなのは確かにだろう」

「では、私もことりも気になりますので太一と穂乃果は代表で見つけ

「て下さい」

「俺もかよ!?!」

「い、い、で、す、ね?」

「は…は…!!」

そんなこんなで太一と穂乃果は海未から重大任務を遂行することになった。さつそく翌日の放課後、太一と穂乃果は三年生の教室から少し離れた廊下で待機して絢瀬絵里が来るのを待つ。

「さてと、待つてはいるんだが…全く出てこないな?」

「今日は休みとか?」

「ついさつき渡り廊下ですれ違ったからそれは無いと思う」

「もー疲れた〜」

「お前は先に練習に行けよ俺はこの任務を遂行しないと海未に殺される!」

「じゃあ、頑張つてね!!」

「あつ…こら!、… ったく…」

穂乃果は先に諦めて練習に行ったが太一は普通に待機して待つていた。穂乃果と別れてから数分後にやっと絢瀬絵里が教室から出る。辺りを見回してはいたが太一には気付くことなく歩き出した。

「よし…尾行尾行…」

抜き足差し足忍び足とバレないように後を付ける、尾行しているとやがて校舎の外にでて校舎の裏に回りこんで行った。この学校の校舎裏は常に太陽の陽が入ってこないで校舎の影の影響でほぼ毎日暗い。そのせいか女子生徒しか居ないこの学校では不気味と噂される程で夜な夜な幽霊が出るまで言われるほど生徒は寄り付かないスポットになっている。

「よし、行くぞ!」

太一は勇気を振り絞つて校舎裏に回り込む。そして校舎裏に回り込み先を見据えると古い小さい建物に入っていく絢瀬絵里が見えた。

「校舎裏にこんな建物があるとはな」

この校舎は見た感じ非常に古く基本は木造校舎で所々痛んでいる部分がある。しかしよく見ると鉄骨などで補強などが施されており

地震などには何の影響もなさそうだった。さらに中からは明かりが灯っていて人の気配がしていた。

「絵里く遅くない?」

「ごめんなさい、ちよつと生徒会の仕事を片付けていたのよ」

「それなら希に手伝ってもらえば良かったじゃない?」

「言おうと思っただら希だったら先に行くのよ!」

「ごめんなくえりち今度チョコを買ってあげるから♪」

「もう…」

「(チヨロい)」

最初は茶番劇をしていた三人だが徐々に真面目になっていき殆ど  
u☒sと同じ様にせっせと練習に励んでいた。太一は悪そうに思いながら  
もコソツと隠れて三人の練習風景を写真に収め穂乃果達に見せた。

~~~~~\*~~~~~

「まさか…本当の事だったなんて…」

「あの生徒会長があんなに楽しそうに歌ってるなんて意外ね」

「凜達にアドバイスしてくれた希先輩もライバルって事かにや!」

「これは紛れもない事実だ」

「早速行ってみようよ!」

「穂乃果ちゃん!」「穂乃果!何を言ってるんですか!」

「もし上手く行けば先輩達と一緒に組んでライブ出来れば大人気確定  
だよー!」

「確かにそうだが…ちよい待て!」

穂乃果は既に走って校舎裏の旧校舎に向かっていた。物事を考えるよりも先に行動してしまう彼女の個性が出ていた。

~~~~~\*~~~~~

「と、言う事で結局ここで立ち往生かよ」

「そりゃ!緊張するよ!」

「落ち着いて下さい、二人共」

「結局みんな来てちゃったね」

みんな揃って旧校舎に行ったため周りが騒がしくこれでは犯人が

いるのにどうぞ逃げてくださいと言っているようなものだ。

「うるさいわ、練習に集中できないじゃない？あら、あなた達は…」

「えりちどうし…穂乃果ちゃん？」

「あんた達あたし達に何の様？」

「せ、先輩方…」

どうやら騒がしくしてたため注意に来た様だがμs全員で来たことで彼女らは大体事の騒動を把握した。

「なるほど、言いたい事は分かったわ私達と組んで人気を獲得したいと言いたいのでしょ？」

「確かにそうです、なら私達と組んでアイドルの頂点を目指し学校を廃校にさせないようにしませんか！」

「そうね…別に私達は嫌とは言わないわ既に二人とは話が付いている」

「なら話が早い！では…！」

「一つだけ条件があるわ」

「条件？」

「どんな条件だ？言ってみて下さい」

太一が要求すると絢瀬絵里は鋭い目つきで太一の方を睨む

「私達の加入する条件は…」

黒崎太一、あなたのグループの脱退よ！」

「え？..」

絢瀬絵里の言葉を聞いた瞬間、風がおもいつきり吹き込みあたりが静かになる。

すこし夏の足跡が近づく6月の事だった。

Continued on next time

## 第26話 殺人者はもう一人の俺？

「黒崎太一、あなたのグループ脱退よ！」

「え？」

唐突だった。

なんでだろう？何故俺が辞めなくちゃいけないんだ？何でこの人はここまで俺を睨むんだ？数々のいろいろな疑問が太一の心の中を巡る。

「どうしてですか!？」

絢瀬絵里の言葉で黙っていたみんなの中一番最初に言っただけのは穂乃果だった。彼女を見ると太一と同様納得の行かない顔だった。言葉には出していないが他のみんなも同じような気持ちを抱いていた。

「そうね…理由は一つしか無いわ、そう…彼はとても危険な人間なの、私は忘れてはいないわ！大切な人が目の前で殺されたのよ！」

『!？』

再び絢瀬絵里の言葉に一同が驚愕する。同じクラスメイトであり、大切な友達であり、大切なメンバーの一人である黒崎太一を殺人者と言い放ったのだ。

「何を言っているんだ!？俺は人なんか殺した事なんて無い！」

「そうよあなたは殺してなんかいないわ！だって、これから殺すのだから」

「どこにその根拠があるんだよ！」

「教えて欲しい？」

「教えろ！」

絢瀬絵里からは不吉な笑みを浮かべる。そして彼女はこう言った。

「私は…『未来』から来たわ」

『未来』!？何の事だかさっぱり分からない！未来の世界なんて本当に存在するのか？」

「ええ…ならその証拠を見せてあげようかしら？」

『見せて下さい!』

穂乃果もみんなも一緒に絢瀬絵里にお願いする。すると彼女はポケットの中から新聞を見せる。

「これは今日、まだ報道されていない新聞よ見て」

そこには今日のスクープの記事が載っていた。そこには学院の近くのガソリンスタンドが大爆発したと言う記事だった。

「これはすぐそのガソリンスタンドよ、私が未来から来たって事が本当なら、そろそろ爆発するわ、 3、2、1…」

絢瀬絵里のカウントダウンと同時に一瞬ピカッ!と光轟音と共に煙が立ち昇る。本人が言ったとおり本当に起こったのだ。

「ね?言ったとおりでしょ?」

「本当なのか?あんたの言ったこと」

「そうよ!何回も言っているわ!」

この爆発で彼女が未来から来たことが分かった。

「つてことは…太一君はこの後誰かに殺されるってこと?」

「信じたくないにゃ」

「おい!俺は犯人確定かよ!」

「もう先程の爆発を見ると信じてしまうのも無理はないです」

「海未!お前まで!」

すでにメンバー一同彼女を信じきっていた。

「ね?みんな分かった?彼は殺人を後にしでかすわ彼はここに居てはいけないの」

「でも…本当に太一君が…」

「くそ!お前らなんかもう知らない!こんな奴を信じた事を後悔してやる!」

太一はその場にいるのが辛くなり、遂に怒りで我を忘れその場から走り去った。

しかし誰も彼を止める者がおらず黙っていると絵里が言葉を発する。

「さ、これで本当の事を話せるわ貴方達に」

「何を言っているんですか?」

「彼がいると話が進まないからね私達はさつきも言ったけど未来から来たわ証拠は見せたはずよ」

「それで、太一を犯人扱いした理由は？」

「正直に言うわ彼はこの世界の人間では無いわ」

「!?どうゆうことにや!？」

一同パニックになり凜に至っては彼女らで一番パニックになっていた。

「彼も私達と同じ未来から来たの、でも彼は未来から来た事は知らないわ」

「太一くんは生まれた時からこの世界の人間だと思ってるんや、けどそれは違った彼はつい2年前にうちらとここへ来た」

「では…何で太一が犯人なのですか!？」

「彼は未来からやってきたのだけどこの世界に元々いる太一が犯人の可能性があるの」

「太一は誰を殺すのですか?」

「穂乃果さん…貴方よ」

『!?』

~~~~~\*~~~~~

「なんじゃそりや!!俺はこの世界の人間じゃない?俺が怒って抜け出してみんなどうしてるかと思ったらまさかそんなに話が進展してるとは…」

コソツと絵里の話を聞いていたらまさかの展開で太一自身も彼女が言った事を理解し今自分が何をすべきかを考えた。答えは一つ「穂乃果を助けてもう一人の俺を捕まえる」

そう言う太一は立ち上がりその場を後にした。

「では当分は練習帰りはなるべく大人数で帰る事にしましょう。私は幸い穂乃果の家の近くに住んでいるので穂乃果を家に送ってから家に帰るようにします」

「海未ちゃん!」

「ではみんなそれで良いかしら?何かあったら私達に連絡して私達も

何かしらの行動はしてると思うから」

『はい！』

~~~~~\*~~~~~

某研究所内：

「絵里ちゃん太一と接触し目的を伝えたわ本当に良いの？」

「仕方ないこれも彼を思つての事だ、まったく…この世界の息子と来たら…人殺しをしでかす予定とは、親として情けない…」

「それをさせない為に貴方に色々とお願ひしてるじゃない」

「そりゃあ最愛の妻の加洋ちゃんにお願ひされたら断る訳にもいかないよ〜」

「あら…意外とお世辞も言える様になつたじゃない？」

「そりゃあ、また家族3人揃つて仲良く暮らしたいからな」

「貴方が太一を事故に巻き込んだことはまだ許してはいないのよ！」

「それは誤つてるじゃないか！」

「あの…良いですか？お二人とも…」

「ん？」

太一の両親らしい人物が話している所に今日の事を伝える為に絵里がやってきた。

「絵里さん〜相変わらず可愛いなく今度お茶しな…ぐはあ！」

「うるさい変態馬鹿旦那！ごめんさないね絵里ちゃん…そりゃあ今日はあるがどうね♪太一凄く怒つてた様だけど」

「大丈夫だと思ひます。今までの彼の行動を見てもすがその程度で立ち止まる子ではないかと…」

「まああの子は私達の子だそう簡単にくたばる様な奴ではない」

「まだ私達の事は黙つてるの？」

「言つてしまうと彼の心は変わつてしまう気がしますので」

「そうか…ありがどう、君も帰つて休みたまえ。明日からが本命だからな気を引き締めて頑張つてくれ」

「はい！では失礼します…」

そう言つて絵里は部屋から出て行つた。

「そうか…ここまで来てしまつたか。」

「まだバレてしまわない様に注意しなくちゃね」

「これから私達も忙しくなるだろうが穂乃果さんを守る為にも」

「あつ！そういうえば私、明日から仕事入ってるから当分来ないかも…」

「あつ！逃げるつもりだな！」

「じゃあね〜」

「あつ！こらまで！」

「愛してるわー馬鹿旦那富士男さん♪」

太一の母親加洋子は棒読みで夫、父親でもある富士男に愛していると  
いつていた。

ここは音ノ木坂学院旧校舎の地下室研究所、太一の両親はここで何  
をしているのかはまだ分からない…

~~~~~\*~~~~~

「絶対に何かあるはずだ！絶対犯人を捕まえてあの生徒会長をギャフ  
ン！といわせてやる!!」

太一の家では太一がせつせと犯人を捕まえる対策を練っていた。

「穂乃果ちゃん！穂乃果ちゃん！穂乃果ちゃん！穂乃果ちゃん！穂乃  
果ちゃんは一生俺の物だ！はっははははは！」

またとある場所では一人の男が何かを計画しているのだった。

C o n t i n u e d   o n   n e x t   t i m e

## 第27話 偽物太一現る

「結局太一は今日も来ないですか…」

「やっぱりみんなで追い詰めちゃったからかな？」

「家に入るの？穂乃果ちゃん」

「今日もインターホンを押したんだけど出てくれなかったんだ…」

「余程怒ってるのね」

「今度謝りに行かなくちゃね」

あれ以降太一は部活は愚か学校にすら来なくなっており学校の教師まで何かあったのでは？と思われる程である。これまで犯人の可能性が高いもう1人の太一も襲いかかってないので太一が学校に来ない以外いつも通りの日常であった。

「どうもみんな」

「絵里先輩！希先輩！にこ先輩！」

「お久しぶりですね、何かあったのですか？」

「いいえ、いつも通り練習に励んでいるようね」

「私達も練習があるから早く戻るけどこの矢澤にこが来たんだから予選は通過しなさいよー」

「相変わらず太一くんは来てへんの？」

「はい…でも今日は家に行こうと思うんです」

「出て来ないと思うけど…」

「やって見ないと分からないじゃない？」

「真姫ちゃんの言うとうりにゃ！」

「そうですよ！」

「そう…まあ良いわ気を付けてね♪じゃあ」

そう言うのと絵里達はその場を去っていった。

「別に学校には来ているぞ…」

穂乃果達が練習しているのを太一は望遠鏡を覗き込んでかなり遠くから見ている。以前犯人の手掛かりが見つからず今出来るのは彼女達を監視するしかなかった。

「ん？そーういや家に来るって言ってたな…どうすんだよ！居留守を使

うべきなのか…素直に会うか…」

考えながら太一は家に帰った。太一が学校から出たのを見計らってある男が学校内に入った。

「ふっ…穂乃果ちゃん！君は俺のものだ！」

男はそのまま校舎内に入ってμ☒sが練習している屋上へ向かう。

~~~~~\*~~~~~

「そっぴや今日は…やけに外がうるさかったな」

俺と穂乃果の家は大きい道路からは少し離れた所にあるのであまり車の音は聞こえてこないのだが今日は朝から騒がしい。そう思いながらテレビをつけるとその理由がわかった。

「今日は待ちに待ったイギリスとの首脳会談です。イギリス首相は今空港を出発し首相官邸へ向かっています。道中ではおびただしい警察官の姿が見えます。これで何があっても安心ですね。」

テレビでは連日報道されている首脳会談で一杯一杯だ。

時刻は午後の4時、高校生も帰りの時間である。そんな事はともかく今は穂乃果達だ既にこちらにきている事は把握している、居留守を使うか潔く会うか場合によっては彼女らの関係も大きく変わる。

「あぁ…どうしよう!!」

そんなこんな考えていると外が騒がしくなり耳を澄ますと穂乃果達だとわかった。彼女らの声は段々と近づいている。しかしその中にはおかしな声も紛れ込んでいた。

「もう〜！太一君心配したんだよ！最近全く学校来ないんだもん！」

「心配しましたよ太一！」

「元気に戻ってきてくれたんだから良しとしようよ♪」

「これでμ☒s全員集合にや！」

「ライブも近いし頑張らないとね！」

「それはあなたもよ花陽」

「ま…真姫ちゃん〜」

「何であいつら俺はここに居るのに俺がその場でいるような話し方をしているんだ？ま…まさか!!」

太一は先日絵里が言った言葉を思い出した。この世界にはもう1

人の俺がいると、俺かもしれないしもう1人の俺が穂乃果を殺すと  
言っていた、太一はその言葉を思い出し急いで表に出る。

「おい！お前ら！」

『太一君!?!』

「そいつ誰だよ!?!」

「太一君だよ!?!」  
「ええええええ!!太一君が2人!?!」

「こつちこそ!お前は誰なんだ!」

「俺は黒崎太一だ!」

「そうか、俺も黒崎太一だ!この偽物め」

「偽物ってお前こそ偽物なのでは無いのか?」

同じ2人同士で言い争ってる中μ☒sメンバーはどちらが本物か  
迷っていた。

「どつちが本物なの!?!」

「約半年間一緒に過ごして来たんですから、どつちが太一か分かるは  
ずです」

「そうだよね!じゃあ最初は太一くんを呼んでみよう」

『太一君!』

「何だよ!」

呼んでみても2人とも全く同じこと行動をした。振り向くタイミ  
ング、声のタイミングも同じであった。

「もうくわかんないにやー!」

「2人で反応してるから分からないわ」

「そういえば!皆、ここは穂乃果に任せて!」

そう言うのと穂乃果は一步前に出で再び2人を呼ぶ。

「そう言えば太一君くこの前電車でお出掛けした時に…」

(ギク!…)

「何言ってるんだ?」

「1人の太一君が反応したにや!」

「おい…まで穂乃果…」

穂乃果が喋り出すと1人の太一が動揺していたがもう1人の太一  
は「こいつ何言ってるの?と反応し」ここで2人の反応が別れた。

「太一君たら綺麗で胸が大きい女の人が入ってきたらその人に鼻の下を伸ばしてたんだよ！」

「わー!!言うな!聞くなー!!」

「穂乃果嘘は俺はそんな事しないぞ！」

『え?』

「ふっふっふく遂に偽物がわかったよ!偽物の太一君はこの人だ!」

穂乃果は策を使って偽物の太一を騙しボロを出させた。それを太

一は感づき演技し見事に功を立てる。

「くそう!バレたならしかたない。高坂穂乃果!お前の命を頂く!覚

悟!」

「待て!穂乃果に手を出すな!!」

『きゃあ!穂乃果(穂乃果ちゃん)!!』

そう言うのと偽物の太一は刃物を取り出し穂乃果に襲いかかる。太

一はいち早く気付き穂乃果を助けにはいる。

「はあ!」

グサ!

「ううはあ!」

「太一君!」

刺した刃物は穂乃果ではなく一瞬の隙で穂乃果を庇い太一の腹部に命中した。

## 第28話 危険な状態

「ぐはあ！」

ナイフで刺された太一はその場で倒れ込みあまりの痛みにもうめき声をあげる。

「は、はははは！ やっちまった！ 俺はやってしまったぞ！」

「太一君！」

「太一！」

刺した偽物の太一は気が動転し気が狂っていた。

「ほ、穂乃果…き…君は…大丈夫か？」

「大丈夫だよ！ でも、太一君が！」

「俺は…はあ…はあ…大丈夫だ…はあ…うう…！」

「太一！ これ以上喋らないで下さい！」

「う…海未…これで…俺は…犯人じゃない…確定だろ？」

「はい、疑っていた私たちが悪いです…だから喋らないで下さい！」

「そうよ！ 太一！ 今すぐ救急車を呼ぶから気をしっかり持ちなさい！」

「太一くん！ 死なないで！」

「まだ！ 凜たちとライブやってないよ！ やらないとμsじゃないにゃ！」

「ことり！ 絵里さんを呼んでくる！」

~~~~~\*~~~~~

「お巡りさん！ 絵里さんこっちです！」

「こら！ 貴様！ 何をしているんだ！」

「太一大丈夫なの！？」

ことりが絵里を呼び出し、事の自体を聞いた絵里は警察を呼び出し今にもいたる。お巡りさんは偽物の太一を拘束し抑える。丁度そのタイミングで真姫が呼び寄せた救急車も到着した。

「大丈夫ですか！？ 黒崎さん！ 救急隊員です！ 聞こえますか？」

「はい…何とか聞こえます…」

「今から西木野総合病院に運びますからね！」

「はい…わかりました…」

そう言うと救急隊員は倒れ込んでいる太一を搬送用のベツトに乗せて救急車の中に乗せる。

「誰か付き添いで来てくれる方いますか？」

「私が行きます！」

「では私も！」

「うちの病院に行くなら私も行くわ！」

「では！お願いします！」

「先に行くからみんなは後から来てください！」

『はい！』

穂乃果、海未、真姫の3人が同伴し救急車に乗り込み太一を乗せた救急車は発進し西木野総合病院にむかった。

→車内にて→

「今から言って欲しい事があります」

「何ですか!？」

「時々黒崎さんは意識を失いかけています。意識を失わせないように大きな声で彼の名前を呼び続けてください！」

『わかりました!』

「やろう！海未ちゃん！真姫ちゃん！」

「うん！」

救急隊員の人に言われ、3人は大きな声で太一を呼び続ける。

「太一君！大丈夫だよ！もうすぐ病院だよ！」

「太一死んではなりませんよ！貴方が死んだらμ☒sは…私達はどうすれば良いのですか！」

「そうよ！太一！死んだら許さないんだから！」

3人が必死になって叫んでいるが太一の耳には入ってこない。むしろどんどん意識が遠のいている。

（穂乃果…海未…真姫…何を言っているのか聞こえない…ああ…俺はこのまま死ぬのか…まだやり残している事があるのに…まだ見つけていないの…に…）

ピピー!!っと声高い機械音が鳴り響く。やまなりになっていた心

電図は急に一直線になる。ブザーと同時に救急隊員の人が慌てふためく。運転手は急ぎ救急車のスピードを上げて、応急処置をしていた2人のうち1人は太一の上にまたがり人口呼吸をし、もう1人は太一の口に酸素を供給させていた。

「太一君！死なないで！」

「太一！」

「太一!!」

太一の心配が停止してから数分後に西木野総合病院に着いた、救急車は緊急搬送口の目の前で止まり後ろのドアが開かれた。そこには真姫のお父さん、お母さん以下数名の医者が待機していた。

「真姫！太一君はどんな状態だ？」

「ママ！パパ！太一は今心配停止してて危険な状態よ！早く！」

「任せなさい真姫、貴方は良くやったわ、2人もね♪」

「はい！」

そう言うのと医者は太一が横たわっているベッドを救急隊員と共に中へ運びこみその後を真姫のお父さんとお母さんが着いていく。

「ここは私達の専門よ、貴方達は外で待っててね」

「わかったわ」

「わかりました！」

そう言い太一を連れて真姫のお父さん、お母さんは、集中治療室へ入っていき、入口の上に治療中のランプが点灯した。

~~~~~\*~~~~~

(ん…?…ここは何処だ…?)

眼が覚めると何故が広くて広大な花畑のど真ん中にいた、最後に覚えていたところは穂乃果を庇ってもう1人の俺からナイフで刺された所…

(そうだ！俺は穂乃果を庇って…早く行かなきゃ！)

(何処へ行くの?)

(誰だ!?)

行かなきやと立ち上がり歩き出すと後ろから誰かに止められた。ふと後ろを見ると女の子が立っていた。歳は太一と同じくらいで身長は割と高め穂乃果より少しあるくらいだ。更におまけに可愛く美少女だ。

(私? 私は一回だけ貴方にあつた事があるわ。でも貴方は忘れている。)

(そうなのか? 俺は君の言うとうり誰か分からない...ごめん! それより俺は急いでいるんだ!)

太一は起き上がり歩き出そうとするが女の子に止められる。

(何処へ行っても同じよ、お花畑が永遠に続いているだけ)

(何を言ってるんだ?)

(貴方は今、死の直前にいるのよ?)

(は? どう言う意味だ?)

死の直前と言われるが何を言っているのかわからない、そんな顔をしていると彼女が再び喋り出す。

(貴方、自分がナイフで刺されて心配停止しているのを気付いていない?...仕方ないか?...急な事だものね)

(そうだ! 確か意識がどんどん朦朧となって気づいたらここに居た...)

(そう言うこと貴方は今、天に召されるのを待っているのよ)

(どうやったら戻れるんだ!? 教えてくれ!)

(それは私には無理よ)

(じゃあどうすれば!)

(簡単な話、どうして元の世界に帰りたいの? どうして彼女を庇ったの?)

(そ...それは...それは...)

考えようと思った時、太一はふらつと倒れた。

(はあ...こう言う所はお母さん似なのね♪ふふふ♪)

~~~~~\*~~~~~

太一が中に入ってから既に数時間がたっていた。警察の事情聴取を受け終わったことり達もやってきて、メンバー一同でひたすら待つ

ていた。

すると治療中というランプの点灯が止み集中治療室の中から真姫のお母さんとお父さんが出て来た。

「ママー太一は!？」

「真姫…」

出て来た真姫のお母さんの顔色は悪く、それを見たみんなは涙を流せずにはいられずとつさに治療室の中へ入った。

「嘘でしょ…!? 太一君!」

『太一（君、くん）!？」』

そこにいたのは大きな管を口に入れて周りには沢山の医療機材が置かれている彼の姿がいた。それを見た彼女達は更に頭の中がパニックになる。

「一応…心配は戻って手術は無事成功したわ、後はいつ目を覚ますか…」

「回復するかは彼の体力次第だ。」

「でも…! 手術は成功したんだから死ななくても良いんですよ!？」

「まあ…そう言う事になるね」

「良かったね…海未ちゃん! ことりちゃん!」

「穂乃果…」

「穂乃果ちゃん…」

その事を告げ真姫のお父さんとお母さんは去っていき、太一を乗せた移動式ベットは個室の病室へと運ばれた。

~~~~~\*~~~~~

「それでは私達は失礼します。何かありましたらお呼びください。」  
「すみません…ありがとうございます。」

担当の看護師が出て行くと海未は穂乃果達に今後のことについてを話した。

「穂乃果…今後についての事を話したいと思います。」

「どうするの? 今度の曲は太一がセンターだったんでしょ?」

「誰かに変えないとね…」

「センターは穂乃果ちゃん?」

「そうするしかないにや〜」

「では…：今度のライブは太一を外して穂乃果をセンターで行きましよう…」

『うん！「まっつて！」』

メンバー一同が同意し決まりと思った時、穂乃果が止める。

「ダメだよ！太一君が抜けたらμ☒sじゃないよ！」

「しかし太一は今はこの状態…無理です！」

「無理じゃないよ！太一君が元気になるまで穂乃果が看病するもん！」

と穂乃果は自分が看病すると言った。

## 第29話 帰りたい理由

数時間にも及ぶ大手術から早、一週間が経っていた。太一が入院してからはず、sのメンバーが交代で毎日お見舞いに赴いた。その中でも穂乃果は人一倍積極的にお見舞いに来ていた。今日は穂乃果、海未、ことりの二年生組でお見舞いに来ていた。

「もう…一週間が経ちました。本当に太一は目覚めるのでしょうか？」

「真姫ちゃんのお母さんが言ったとおり、それは太一くんの回復次第って…」

「目覚めるよ！回復の傾向があるって言ってたもん！」

「わかつてはいますが…前にも言ったとおり今度のライブでは太一抜きでやると皆んなで話し合ったではないですか！」

「だけど…だけど…太一君とはファーストライブの頃からやって来たんだよ！なのに…今更太一君を外すのは嫌だよ！」

「穂乃果ちゃん…」

太一が目を覚ますかは分からないのは穂乃果も知っている。だが、ファーストライブから一緒に頑張っていた太一を抜きでライブをやるのは穂乃果にとっては苦痛でしかなかった。

「わかりました。今回だけは躊躇してあげましょう…後一週間、今から一週間以内に太一が目を覚まさなかつたら今回のライブは太一抜きで行います。それで良いですか？」

「海未ちゃん!!」

「ありがとう!!」

海未自身も同じ事を思っているが太一一人の為に大切なライブが無くなる訳にはいかない、だからこそ最後のチャンスとして穂乃果に条件を伝えた。それを聞くと穂乃果もことりも納得した。

「そうと決まったら直ぐに戻って練習します！では…太一お大事に…」

「じゃあね…太一くん♪」

「穂乃果は後で行くよ！」

そう言うのと穂乃果は海未とことりを先に帰らした。

「ねえ太一君…早く目を覚ましてよ…どうして…犯人として疑ったのに…犯人に襲われた時に助けてくれて…どうして身代わりになって刺されちゃったの?どうして、どうして…穂乃果いっつも太一君に助けられてばかり…穂乃果…太一君に何一つお返し出来てないよ…私に出来ることは無いのかな…太一君…」

穂乃果は1人泣いた、太一の左手に自分の顔を押し付けて涙を流しながらポツリと太一に問いかけるが太一は聴こえていないだろう…しかし一瞬だけ太一の指がピクリと動いていた、穂乃果の涙が太一の手に当たった時だった。

~~~~~\*~~~~~

「ん…ん…ここはどこだ…は?」

再び起き上がると花畑と怪しげな2つの空間との間で目覚めた。

「確か…女の子と話していたら…急に眠たくなって…ここは一体何処だよ!」

「あら?やつと目覚めたのね…待ちくたびれたわ」

声をした方を見るといつぞやに会った女の子があくびをして体を伸ばしていた。

「君はさっきの!?!」

「まあ…実際は貴方が倒れた時から数日は経ってはいるんだけど…」

「教えてくれ!ここは一体何処なんだ!?!」

「この前も言ったはずよ?ここはあの世とこの世のを結ぶ場所よ?」

「それは覚えているが、いつになったら俺も元の世界に戻してくれるんだ?」

「それは私には無理よ?ここは貴方の世界よ…選択するのは私じゃない」

「じゃあ誰が?」

「貴方の世界なんだから決めるのは貴方よ?」

「俺?」

彼女曰くこの世界は太一の世界らしく、現実世界に戻るには太一が

決めなくてはいけないらしい。

「ここで考えても時間の無駄だわ、あそこに喫茶店があるからそこでゆつくりしながら考えましょ?」

「え、ええ〜?」

彼女が指を指す方を見つめると、何故かさつきまで無かったはずなのに喫茶店が出現していた。太一と女の子は外のバルコニーに座りメニュー表を見る。

「ホッホッホッ♪客人なんて珍しいの〜?」

「うああ!? 爺さん誰だよ!」

「わしはこの喫茶店のマスターじゃ、はよ注文きめんかい」

「じゃあく私はウルトラデラックススーパーパフェで♪」

「まいどあり、お主はどうするかい?」

「じゃあ…コーヒーで…」

自称マスターのお爺さんに注文を頼むとお爺さんは電卓を取り出し、計算する。

「うちは先払いでね、1500円じゃ、」

「たか!」

「ほぼ、パフェの値段じゃな」

「お前…自分で払えよ?」

「なに言ってるの? 私お金持ってないわ?」

「は!」

「早くして欲しいんじゃが?」

「くそ…後で返せよ?」

「覚えていたらね♪」

そう言われると太一は渋々ポケットからお金を取り出し代金を払った。

「まいどあり♪すこし待っておれ」

「くそ…ぼったくりにも程があるぞ…」

「それで話を戻して、どうやったら俺は帰れるんだ?」

「さつきも言ったわよね? 貴方が帰りたい理由を言えば良いだけよ?」

「理由??んく生きたいから?」

そう言う上からタライが落ちてきて太一にクリティカルヒットした。

「痛て!?何するんだよ!」

「間違えたら上からタライが落ちて来るから」

「それを早く言えよ!」

「間違えたらタライが落ちて来るから、ちなみにそれを考えたのはこの世界に来る前に貴方が覚えていた罰なのよ?」

「うつ…」

太一は思い出した、数日前テレビでクイズ番組をやっていたのだが問題を間違えた回答者が間違えたお仕置きとして上からタライが降って来て思いつきり当たるのを鮮明に覚えていたせいで今回この様な事が起きていた。

「貴方、私に嘘を言っているわね?」

「はあ!?何言ってるんだよ?そんな事ねーわ!」

太一は人差し指で頬つぺたを擦る。

「嘘ついてるのバレバレよ?貴方は嘘を吐くと人差し指で頬つぺたを擦る癖があるの」

「え!」

「はあ…早く言いなさいよ…」

「そ…それは…」

言いたい事は分かっている、だが恥ずかし過ぎて言えない、恥ずかしさが身体中を駆け巡る、それを想うたびに心がキュンとし息が荒くなる。それを告白するのは本人ではない寧ろ会ったことが一回もない初対面の女の子にだ。

「ねえ!?早く言いなさい!あつ、そういえば言うの忘れてたけど後10分以内に言わないとこのまま君は天に召されちゃうわよ?」

「嘘だろ!」

上を見ると光のカーテンが徐々にだが下に伸びて来ている、しかもそのおまげか分からないが天使までもが向かって来ている。

「やべえ!?本当じゃないか!」

「早く！流石に天に召されたら私でも救い用がないわ！」

「え〜!!」

追い込まれて更に言わなきや行けないムードになっている。仕方あるまいと太一は意を決して告白する。

そう、どうして彼がスクールアイドルを始めたのか、どうして彼女のわがままを聞いて来たか、どうして彼女に導かれるのか、どうして困っている彼女を助けてしまったのか、どうして彼女の笑顔はこんなに可愛いのか。どうして疑われ、嫌われてしまいそうだった彼女を犯人から庇ったのか。

どうして、彼女の事を好きになってしまったのか。

「最後のチャンスよ！貴方は何で生きたいの!?!」

「それは…」

「それは？」

「それは…」

そして太一は思いつきり息を吸い。

「それは！俺は穂乃果の事が好きだから！いつまでも穂乃果を守ってやりたいんだ！いつまでも穂乃果と一緒に居たいからだ！」

思いつきり吐き出した、言い放ったあと太一の息は切れ切れだった。

覚悟を決めて放った言葉に女の子はやつと言ったかとまるで知っているかの様に安堵した。

「よくぞ言ったわ！さあ！出口へのカギは開かれたわ！」

「ありがとう！お陰で俺は本当の気持ちを言えた！感謝している！」

「待て小僧！」

「何だよ爺さん？」

「せっかくワシの喫茶店に寄ったんじや、ワシのコーヒーを飲みなさいー！」

帰ろうとした所をマスターに止められる、太一はマスターが作ったコーヒーを飲んだ。

「どうだ、美味しいか？」

「…？」

「苦い…けど、何故か分からないが涙が溢れてきた」

「そうだ、それがここ最近のお主の気持ちなんだホレ、もう一回飲んでみる」

そう言われて太一はもう一度コーヒーを飲む

「甘い！」

「そうか！甘いのはお主が今気力に満ちている証拠だ、これからもこ覚悟を忘れるな」

「ありがとう爺さん！」

「じゃあね…太一君」

「ああ！あばよ！」

そう言うのと太一は唸りまくる渦の中に飛び込んだ。それを見届けるとさつきまで光っていた光のカーテンはさあくと引いていき、天使は空の彼方へ消えていった。2人はひと段落し女の子は再びパフェを食べ、マスターはコーヒーを飲んだ。

「ふう…バレると持ったわい」

「まさか、自分の祖父が喫茶店のマスターをやっているなんて分かるわけないでしょ？」

「そう言うお主こそ双子の姉の癖にようバレんかったのが不思議じゃわ」

「さー！あの子も帰った事だし、店を閉めるわよ」

「へいへい、よっこらせ、ツバサも手伝うじゃぞ！」

「はいはい、早く終わらせるわよ、ふふ♪また何処かで会うかもね太一♪」

そう言うとき彼女は…ツバサは片付けを始めた。

~~~~~\*~~~~~

「太一君…」

穂乃果は涙を流した、その涙は太一の手に落ちてきた。すると太一は少しずつだが目を開ける。そこに好きになってしまった穂乃果が

居た。すると小声だが彼女に喋りかける。

「何…泣いているだよ…穂乃果？」

「太一君??」

声が聞こえ、まさかと思って目を擦り、声のした方を見るそこにはさっきまで眠っていた太一が目を覚まして笑って穂乃果を見ていた。

「太一君!」

「まったく…何泣いてるんだよ!」

「だって…だって!!」

穂乃果は再び涙を流し太一のお腹で泣き叫んだ、それを太一は黙って穂乃果の背中に手を置いてさすった。

o n t i n u e t o n e x t t i m e

C

### 第30話 再開

「まさか…本当に目覚めてたなんて!」

「奇跡って本当にあるものだな」

真姫の両親は未だに俺が目を覚ました事にはかなり驚いており、医者として真姫の両親として安堵の笑みを浮かべていた。

「真姫のお父さん、お母さんですよね?」

「そうよ、ここは西木野大学病院よ、大体話の流れは真姫から聞いているわ」

「君の刺された傷は割と大きい、一命を取り留めたと言えど後々の痛みはそう簡単には引かないだろう」

「それは仕方ない事です。お二人は俺を救ってくれた命の恩人です。感謝しています!ありがとうございます!」

そう言う太一は2人に頭を下げてお礼を言った。この時も傷は少し痛んでいた。

「お大事にね♪」

「後でまた体調検査をするからその時はよろしく」

「はい!では…」

2人は病室を出て行き、それと変わりばんこで、sのみんなが入ってきた。

「太一君!!」

「太一くん!!」

「うわあ!?!2人とも急に突っ込んでくるな!!いてて…」

とひびきり穂乃果と凜は嬉しそうに太一に飛び付くが今はそれどころではない穂乃果と凜のダイブは太一の傷の部分の近くにヒットした。

「ぎゃあ!?!痛い痛い!!」

「太一君!?!いた!」

「痛いにや!?!」

「穂乃果何をやっているんですか?太一はまだ病人ですよ!」

「そうよ凜!しかもあなたが飛び込んだのは太一の傷の近くよ!太一

を殺そうとしてるの!？」

「違うよ! 知らなかったただけだよ!!」

「そうにや、そうにや!」

タイミング良く海未と真姫がいたから何とかだったが、もし2人がいなかったら太一は完全に死んでいただろう。

「それで太一くんはいつ頃退院できそうなの?」

「そういや言い忘れていた、リハビリも兼ねてだから二週間は入院だとよ」

「えく!! それじゃあライブに行けないって事!？」

「すまん花陽、ことり」

2人は落ち込んでいたが、無論メンバー全員が落ち込んでいた。

「そう落ち込むな、二度とライブに出る事が出来ない訳じゃない! しつかりとりハビリして完璧に治してからまた皆んなでライブをやろう!」

「うん! そうだね!」

「では早速学校に戻って練習ですね」

「珍しく海未ちゃんが張り切ってる♪」

「ことり…私はそんな事…」

「海未ちゃんが照れてる…初めてみた」

「よおくし! 太一君無しだけど頑張るぞ!」

『おく!!』

太一はライブに出る事は出来ないが穂乃果達の士気は高い、皆んなの目はやる気に満ち溢れていた。その時病室の扉から真姫のお母さんが出てきた。

「皆んな? ここは病院だから静かにね♪」

『あつ…』

そのやる気は一気に冷めた様だった…

~~~~~\*~~~~~

穂乃果達が帰りまた静かな病室にもどっていた。穂乃果達が帰ったあと太一は体に異常ないか色々と隅々まで検査をされていた。

「はあ…まさか検査だけでここまで体力を使うとは…いてて…」

手術したばかり、起き上がって歩き始めたばかりだからか歩きたびに傷跡が痛む。右手で痛い所を摩り（痛みよ止まれ〜）とくだらない呪文を心の中で唱えながら左手を手すりにつかまって亀並みのスピードで歩く。

「はあ…はあ…病室ってこんなに遠かったけ…？」

「黒崎太一君でよろしいですか？」

「へ？」

「合ってるかい？」

「はあ…そうですけど…どちら様？」

「すまない急に、私はこう言う者だ」

ゆつくりと歩いていると後ろから自分の名前を呼ばれた、後ろを振り返ると、そこにはスーツを着ているちよつと髪がボサボサ気味の男の人がいた、名前を呼ばれた本人なので返事をする。男は胸ポケットから警察手帳を取り出した。

「俺は警視庁捜査一課の蝶野と言います」

「刑事さんですか？」

「まあ…まだヒヨッコだけどね…」

蝶野はおでこの額にハンカチで汗を拭いて苦笑いしていた。白のカッターシャツに黒のズボン髪はボサボサ、いかにも刑事感がでていた。

「ところで俺に何の用ですか？」

「ごめんごめん…本題を忘れていた」

「あはは…」

「俺は君が被害に遭った殺人未遂事件について調査をしている。一樣君は被害者だから事情を聞きたくて…」

「なるほど…まあ刑事さんですから話しますよ」

「それは有難い！さき、座って座ってコーヒーでも奢るから」

蝶野は太一を椅子に座らせコーヒーを出し太一から事件について聞いていた。

「なるほど…そんな事が…しかし…本当に未来の君なのか？」

「俺も信じたくは無いですけど…本当の事なんです！」

「ん〜難しいな〜まだ犯人の方を尋問してないから何とも言えないな…」

「あいつかここに居るんですか!？」

「あ…ああ君を刺したあとまだ暴れていたので近くに居た警官に足を撃たれてここで入院している」

「会うことは出来ますか？」

「まあ…出来ないことはないが…」

「合わせて下さい！」

「そ…それは…」

太一は必死に多々上がり蝶野の服にしがみつきなごらお願いをするが相手は凶悪犯人何をされるかは分からない為蝶野も許可を出したくても出さないでいた。

「太一君、君は何故会いたいと思うんだ？自分を殺そうとした人だぞ！怖くないのかい？」

「あいつは俺自身です！この世界に来た理由は恐らく未来で何かがあったからに違いありません！」

「太一君…」

太一の言葉に蝶野は何も言い返せなかった。彼の話どうり犯人が未来の彼ならきつと犯行理由は未来で何かが起きたらからに違いなし、そう脳裏に浮かび蝶野は折れた。

「わかった…合わせよう、しかし何か起きた瞬間直ぐに退出してもらおう。それで良いな？」

「蝶野さん！はいわかりました！」

太一は蝶野に着いて行きもう1人の太一が居る病室に向かった。

~~~~~\*~~~~~

「何回も言うがさっきの約束を守ってくれよ」

「はい…」

蝶野に着いて行き病室に向かうか病室に近づくとつれて人気が全くしなくなっていく病室に着くが薄暗く気味が悪いが確かにアイツの病室だった扉の隣には同じ名前黒崎太一と名付けられていた。

「ここだ…先に俺が彼に伝えるからそのあとからで良いか？」  
「わかりました」

そう言うのと蝶野は病室の中に入っていった。しばらくすると蝶野が出てきた。だがあまり良い表情では無かった。

「すまない…待たせてしまった」

「どうしたんですか？」

「彼は眠っていた。眠っている彼は至って普通の人間なのに目を覚ますと人を殺す殺人兵器に変わってしまうなんて…おっと、彼はまだ寝ているが会うかい？」

「一応顔だけ見ようかなと…」

「そうか…では俺は外で待つてるよ。」

「わかりました、では…」

そう蝶野に言い残して太一は病室の中に入っていった。

~~~~~\*~~~~~

病室に入った瞬間直ぐに雰囲気が変わった。入る前は気味が悪かったのに何故か入った途端に暖かい気持ちに包まれていた。病室には夕方だからか部屋に夕日が差し込んでいて電気無しでも明るかった。

「本当に寝ている…」

もう1人の太一が寝ているベットに近づき顔を見るが蝶野の言ったとうり眠っていた。

「寝ているのか…なら仕方ない、また日をずらして…」

「おい、人が気持ちよく寝ている所で起こしやがって何スラ〜と帰ろうとしてるんだ？」

「うわっ!?起きてたの!」

「お前が部屋に入る頃には起きてた」

帰ろうとすると声がし後ろを振り返ると寝ていた彼が起きていた。

「んで、何の用だ？」

「いや、少し話をしてみたくてね」

「よう俺と話そうと思いついたな普通なら殺そうとした相手とは嫌で

も会いたくないだろう？」

「うん…確かに普通なら会いたくないよ、でもお前は未来の俺だ何かしら俺にも責任がある」

「そうか…」

太一に理由を聞くともう1人の太一は起き上がり太一の方を再び見る。

「まあ…言われなくてもここに来た理由位はわかる俺がなぜ彼女を殺そうとしたかだろ？」

「なら話が早い聞かせて貰おうか」

「…事の話は数ヶ月前に遡る…」

### 第31話 本来の目的

「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト、ラスト」

「はっはっ…」

「はっはっはっ…」

太陽が照りつける屋上で穂乃果達<sup>4</sup>、sメンバーは次のライブに向けて練習に励んでいた。海未の作詞、真姫の作曲もあらかた完了し後はダンスを完璧にする所まで来ていた。

「オツケーです！では少し休憩します。」

「ふう〜疲れた〜！」

「穂乃果ちゃん…」

休憩になった途端穂乃果は地面に寝転がり大の字になる。それを見ていることは少し苦笑いし、海未は呆れていた。

「やっぱり太一君が居ないと楽しくないな…」

「仕方ないよ、体がまだ治ってないんだもん」

「太一君が居ないとつままない〜」

「わがまま言っても駄目だよ凜ちゃん！」

「そうよ凜」

「だって本当のことなんだもん！」

「やっぱり凜ちゃんだって思ってる！」

ず〜と駄々をこねていると流石の海未の我慢も頂点に達して怒りが爆発した、背中からは燃えるようなオーラが飛び出しており、かなりやばい状態になっていた。

「穂乃果！凜！いつまでもそんなこと言っているとライブどころか練習すらできませんよ！太一が居ないからってそんなこと言っていると練習メニューを10倍に増やしますよ！」

「そ…それはだめだよ海未ちゃん…そうしたら穂乃果も太一君みたいに病院に行っちゃうかもよ…」

「凜も流石にそれはむりにや〜」

「なら今後ライブが終わるまでそのことは言わないこと良いですね

！」

「は・・・はい・・・！」

海未の怒りの一言で流石の穂乃果と凜も反省していた。素直に二人が納得し怒った海未も一段落しいつもの凜々しい園田海未に戻っていた。

「それでどうして皆呼び出されたの??」

「そうだったね！ことりも忘れてたよ！」

「え!?その理由で皆来てたの！」

「さすがの凜でも覚えてたにや〜」

「仕方ないですねこの前病院で言ったとおり太一がライブに参加できないと分かったので今回歌う曲のセンターを決めなくてはなりません、そこで急遽皆さんに集まっていたいだいたのです。」

「なるほどね〜今回の歌のセンターは太一君だったね、じゃあ誰がその役割に入るかだね？」

「誰がいいのかなー??」

メンバー一同が悩みこむ、今回の事件は急に起きてしまい、このような事態になってしまい想定外の出来事で誰も直ぐに意見を言えるわけではなかった。

「ではここは多数決で行きましょう皆さん、いっせえの！で誰が相応しいか指を指してください」

『う・・・うん・・・』

「では、行きます！いっせえので！」

海未の掛け声で一同が指を誰かにさす。これでセンターが決まると思っていたが・・・。

「あれ?」

「ええ?」

「嘘でしょ?」

「イミワカンナイ!」

「にやにやにや!」

「どうしょ!」

何と各それぞれ希望した人を指したが誰一人被った人がいなかった

た。まさかのそれぞれ完全にバラバラに指名していた。

穂乃果は凜に、海未は真姫、ことりは花陽、凜は海未、真姫はことり

花陽は穂乃果を指名していた。

「まさか全員別々とは…」

「驚いたね!」

「うくん…」

一同悩むが何も浮かび上がりず膠着する。そこで真姫は一つ皆んなに提案する。

「ねえ…もう私達では無理なんだから、ここは一つ太一に決めて貰ったら?」

『お〜!』

「さすが真姫ちゃん頭良い!」

「確かに太一に聞くという考えはありませんでした!」

「太一君なら良いアイデアをくれるかも!」

「私も賛成です!!」

「早く太一君のいる病院に行くにや!!」

「と…当然よ!私に感謝しなさい!」

相変わらずのツンデレ満載で答えるが内心彼女は嬉しがっていた。

真姫の提案で一同合致し太一のいる病院に向かった。

~~~~~\*~~~~~

「太一君元気かな?」

「昨日行つたばかりですよ」

病院に向かう途中、仲良く6人で話している中穂乃果はカナリ上機嫌でリズムカルにスキップしていた。

「穂乃果ちゃん太一君のところへ行く時は凄く嬉しそうだね!」

「だって学校で会えないんだからここで会わないと!」

「別に二度と会えない訳じゃないんだし?」

「真姫ちゃんも酷いこと言わないでよ!」

「そうにや!真姫ちゃんはもうちよつと優しくならないと行けないにや〜!」

「はいはい」

「真姫ちゃん…少し太一君の事心配してるんだよね？」

「え？」

真姫は花陽の話を聞いた途端ピクリと体を動かし「花陽何言ってるの？」と言わんばかりにビクビクしていた。

「何言ってるの、花陽？」

「だって真姫ちゃんこの前太一君に会いに行ってたでしょ？」

「な…何でしってるの？」

「おばあちゃんの付き添いで病院に行ったら真姫ちゃんが居て声を掛けようと思ったら太一君が居たから声をかけにくくて…」

「あれは……たまたまよ！病院の手伝いしてたら太一が大変そうに歩いてたら…」

「そうなの!?!真姫ちゃん!?!」

「もう！それは良いの！早く行くわよ！」

真姫はその場から逃げるように穂乃果達から逃げ出し一人先に走り出し病院に向かった。

「あ！真姫ちゃん待ってよ！」

数秒走り出した真姫だが後ろの穂乃果達の事しか相手にしておらず前を気にしていない。すると曲がり角から蝶野が出てきて真姫とぶつかってしまった。

「きゃあ！」

「おっと、ごめん！大丈夫かい!?!」

「すみません…私の不注意です…」

「真姫ちゃん！大丈夫？」

「うん…何とか…」

穂乃果達も追いつき一同で蝶野に謝る。蝶野も同じように彼女らに謝る。

「君達は確か…音ノ木坂の…」

「μsです！」

「そうそう！確か黒崎君と同じ現場に居た子達だね、丁度今から何思うと思ってたんだ」

「私たち今から太一君の所へ行こうと思っただけですけど…」

「黒崎君なら今行っても会えないよ…彼は今もう一人の黒崎君と思われる人物と話している」

「それって太一を刺した犯人じゃないですか!？」

「どうして危険なことを!？」

蝶野の言動でμs一同は驚愕するが蝶野は彼女に大丈夫だと宥める。だが彼女らは刺される瞬間を見てしまったので信用が出来ない。

「行こう、皆！刑事さんが言っても安心ができないよ！太一君に何かあったら…」

「待って下さい！穂乃果！」

「穂乃果ちゃん!!」

穂乃果は先に一人で病院へと向かい海未とことりもそのあとを追って行った。蝶野は止めようとしたが止めようとした時には時すでに遅かった。

「すみません刑事さん…凜達も心配なんです！太一先輩は私達の大切な仲間なんですから…!!失礼しますにや！行く、かよちゃん！」

「うん…！失礼します刑事さん！」

「さつきはすみませんでした…失礼します…」

一年生組は蝶野に親切に御礼をして穂乃果達の後を追っていった。

~~~~~\*~~~~~

数十分前……

病室で寝たきりで酸素マスクをしているもう一人の太一は話を始めた。太一自身もパイプ椅子に座りながら手に点滴をつけながら聞き始めた。

「あれは俺の居た世界の数ヶ月前の話だ…俺は穂乃果達と一緒に廃校を阻止する為にスクールアイドルを結成した…」

「そこは俺らと一緒にだな…」

「そうだ…しかしココからはお前達とは違った世界になっていった。」  
「今のお前らは7人でライブをして人気を集め、新人ながら圧倒的な成績を残している、だが俺らの世界は違った…」

「何が違ったんだ？」

「……」

太一が問い詰めるともう一人の太一は黙り込んだ。

「早く言えよ別に恥ずかしい事じゃないだろ？」

「恥ずかしい事だ！」

「!？」

「お前らは良いよな！新人の癖に人気が出てよ！俺らとは全く違う…」

「どう言うこと？」

もう一人の太一は涙を流しながら怒りながら太一に言う。急にそんな事をいわれ太一も驚く。

「ファーストライブで一躍有名にお前らはなっただが俺らとは違った。あの後も新しい新曲などを出したが一向に人気が出ない…」

「……」

「人気が出ずに数ヶ月経った頃俺は段々とやる気を無くしていた。すると段々人気が出ないのに努力している彼女らに嫌気が指ししてきた。そして気付いたら穂乃果達と下らない事で喧嘩して俺はグループを脱退した。」

「そんな事があったのか…」

「そしたらどうだ？俺が居なくなっただ途端に奴らは一気に人気が上がった気付けば優勝まで直ぐそこだそうだ？」

「優勝？何で分かるんだよ！」

「俺には未来を見る事ができる装置があるこれだ…」

もう一人の太一は腕にはめてある時計を太一に見せる。一見普通の時計に見えるがよく見るとややこしそうなボタンが沢山あった。

「なるほど…それで？」

「それを知った俺は奴らに凄まじい程の悪意を覚えた。彼女らを滅茶苦茶にしてやろうと！」

「何をやったんだ？」

「結局何も出来なかった…いざ実行しようにも奴らは集団で行動するから犯行できない、しかも人気が出てからは警備まで付くようになりやがった。」

「それで別の世界の俺らに同じような事をしようとかの世界に来たんだ？」

「まあそんな感じだ」

全てを話だもう一人の太一は一気に力を振り絞ったのか横になっ  
てしまった。太一は心配して手を差し出したが断られる。

「だが数ヶ月見せて貰ったがこの世界は3つ違う事が分かった。」

「何だ？」

「一つはお前らが上手く彼女らとアイドルをやっている事だ不思議に  
思うくらいお前らは仲が良い。それを見た俺は少しずつだが悪意が  
無くなって来たと思っただ。」

「だが実際、穂乃果を襲い俺を刺したじゃないか!？」

「確かにそうだ、だがもう一つの理由があったからだ」

「何だよ？」

「お前に伝えなくてはいけない事だからだ」

「まだ俺を刺した事を許した訳では無いが聞くだけ聞こう。」

「綾瀬絵里って奴を知ってるはずだ」

「うちの学校の生徒会長だ？あいつがどうかしたか？」

「俺の予想、アイツは俺と同様この世界の人間ではない…」

「!?: 確かに少し気になる言動はあるが…まさか？」

「これはあくまでも俺の予想だ、気にするな…」

「頭の片隅に閉まっておく。」

…ここまででは普通に話していたが急にもう一人の太一の容態が急変

する。手を胸に当てていかにもヤバイですよ感をだしている。

「うぐう…!?!」

「おい!? 大丈夫か?」

「大丈夫じゃないかも…じゃあ最期の一つを教える…」

「何だ??」

「お前の記憶は間違っている…」

「!?!」

驚愕の一言で太一は驚く。

自分の記憶が間違っている…??

じゃあ…誰が記憶を間違いさせたのか…??

こいつは犯人を知っている…?

「俺の知ってる限りお前の記憶は間違っている、誰がやったかは大体把握しているが俺はあえて言わない…ぐはあ!? お前の本来の目的と…はあ…はあ…一緒のはずだ…げほっ!!」

もう一人の太一は急に口から血を吐く、その血は黒くドロドロの血だった。

「おい! しつかりしろよ!?!」

「ふふ…迎えが来たかもしれない…」

「そんなこと言うなよ!」

「なあ…最後にお願ひがある…」

「なんだよ?」

「この時計のボタンを押して欲しい…俺の世界が今どうなっているかを知りたい…」

「わ…わかった…」

もう一人の太一は太一に向けて時計を渡しボタンを押せと命令する。太一はボタンを押す、すると時計から光が飛び出して映画のように壁に映像が浮かび上がる。

「……………これは……………」

「穂乃果!?!」

そこには優勝旗を掲げている穂乃果達9人の姿がいた。綺麗な衣装を纏いキラキラと輝いていた。

「優勝したみんなの皆さん! テレビの前の皆さんに一言お願いします!」

「ありがとうございます! この場で一言だけ言いたいことがあります!」

「なんででしょうか?」

アナウンサーは再び穂乃果にマイクを向ける。

「太一君! 何処にいるの!?! 太一君が影で私達を支えていたの知ってたんだよ! 仲直りしようよ! 太一君……………」

「どう言う事だ!?!」

「……………バレてたのか? アイツらに隠れてチラシ配りライブ会場の設備の点検……………音響作業をしたのも……………」

ふと太一はもう一人の太一の方を見ると真実を知ったもう一人の太一は涙を流す。さつき以上にだ、号泣である。

「バレちゃってたのか……………俺もアイツの役に立ってたんだな? もう悔いはない……………」

「何言っただよ?」

「お前の事刺して悪かったな……………すまない……………」

「死にますムード出てるぞ?」

「……………俺が言ったことを忘れるな……………」

その一言を言った途端にもう一人の太一はデータが消えるかのようにならなくなり消えていった。

「何でだよ……水臭いな……分かったお前の分までアイツらを優勝させてやる！」

この時太一は覚悟を決めた、同じような悲劇を繰り返さない為に。

決めた途端涙が流れた……アイツの気持ちがあんなかのような気分……

そして本来の目的である父親を探す事が更に重要になったのだ。た。

### 第32話 センターを決めなくちや!

「太一君!!」

「…穂乃果か?」

一人で泣いているところで息を切らした穂乃果がやってきた。太一はすかさず流していた涙を拭き取り何事もなかったかの様に穂乃果に接した。

「大丈夫だった!?痛い事されてない?」

「何もされてねーよ!」

「本当?念の為真姫ちゃんのお母さんに検査を…」

「本当に大丈夫だ!」

穂乃果は太一の体の至る所を触りまくる程めちやくちや心配している。そんなこんな穂乃果に続いて他の皆さんも病室に入ってきた。

「太一!大丈夫ですか!」

「太一くん!」

「大丈夫ですか!」

「にやにや!!」

「本当に世話が焼けるわね?」

他の皆さんも穂乃果同様にかなり心配している。一体何があつたのか聞いてみると蝶野さんが彼女らに色々と教えたのだろう。

「それでもう一人の太一君は?」

「アイツ?…アイツは自分の世界に帰ったよ…」

「そうなんだ…あれ?」

穂乃果はふと太一を見ると太一は涙を流していた。

「ん、どうした穂乃果?」

「何で…泣いてるの?」

「え?」

~~~~~\*~~~~~

「そうですか、そんな事が…」

太一は全てアイツと話したことを彼女達に伝えた。それを聞いた彼女達は初めて聞いた時の太一と同じような衝撃を受けていた。

「だが…俺は絶対にお前らを見捨てたりはしない！目指すは優勝のみだ！」

『太一（くん、君）!!』

「当たり前じゃない、何の為に私が作曲して、海未が作詞して、ことりが衣装を作って、花陽、凜がダンスを考えて、穂乃果が皆んなを引っ張ってると思ってるのよ元からそのつもりよ」

「真姫…！」

「そっだよ！太一君！」

「お前ら…泣かせる事を言うんじゃないよ！」

気付いたらまた泣いていた。今日の太一は涙線が脆いらしい。

「んで、今日はどうした？」

「あつ！そうそう！実は…」

穂乃果は本題を太一に相談した。

「成る程ね、そっか…考えもしなかったな、」

「何かいいアイデアはないものですか？」

「ん〜そうだな…一通り皆センターをやってみて、上手く出来た人にセンターを任せるのはどうだ？」

『お〜！』

「その手があつたにや！」

「じゃあ、早速帰ってやってみるにや！」

『おー！』

一致団結したと思い『頑張れよ』と声をかけようと思った矢先とつぐに彼女達は帰っていた。

「おい…俺の発言とは一体…」

「黒崎君ちよつと良い？」

「はい…？真姫のお母さん？」

真姫のお母さんに呼ばれて太一は診察室へと入っていった。

~~~~~\*~~~~~

「ごめんなさいね、真姫達がいると色々と話しくくて…」

「大丈夫ですよ、んで…用件は？」

「実はね…君の体についてなの……」

「何かあったのですか？」

「え、そんな…本当なのですか!？」

「こればっかしは…私たちにも何も出来ないわ…」

「…わかりました、この事は出来るだけ…アイツらには言わないで下さい…」

「わかったわ約束します。」

「では…」

太一は真姫のお母さんに一礼して部屋を出た。出た瞬間また涙が出てきた。

「ようやく…形になってきたのに……!」

「……ママ、今の本当の事なの？」

「真姫…聞いてたの？」

実はたまたま忘れ物があつて取りに戻った矢先何やら話していたので盗み聞きをしていたらしい。

「どうなのよ!?!太一は死んじやうの!?!」

「無論死なせないわ!でもどうなってしまうかは…私にも分からなくて…」

「私も協力する!出来る限りのことはするわ!」

「真姫…」

~~~~~\*~~~~~

翌日

「では、早速今回の曲のセンターを決めていきましょう！誰か案はありますか？」

「ごこは、ごとりちゃんはどう？」

「私は…今回は遠慮しようかな…」

「え〜？」

「無理強いは余り良くないですが…やはり太一が言った通り皆んな一通りセンターをやって素質がある人にやっていただきましょう」

『おー！』

穂乃果達は一人ずつポジションのセンターを演じ、それを一つ一つビデオに録画してそれを見て判断する。

「ん〜どうだろ？」

「皆んな大体似てるかな…」

「皆さん得意不得意の所がありますから…判断が難しいですね…」

「あー!!そう言えば!？」

一同悩んでいる所に急に穂乃果が驚きだす。

「どうしたにや!?!穂乃果先輩!」

「何かあった？」

「今日お店の店番してってお母さんに言われてたんだった!？」

「なら早く急いで帰った方が良いですね、丁度良い時間なので今日はお開きにしましょう…」

『はーい』

「じゃあ先に失礼するね!バイバイ!」

「また明日ね穂乃果ちゃん!」

「あつ!穂乃果ちゃんやん、どうしたん?」

「希先輩!私店番しないといけないので先に失礼します!」

階段を下っている途中希とすれ違うが急いでいる為、穂乃果は挨拶だけしてそのまま走り去った。

「やつほく皆んな頑張っているかい?」

「希先輩」

「見た感じだと…何かで悩んでいるね?」

「ご名答です。」

メンバーの顔を見て希は何かを悟り何で悩んでいるかを一瞬で答えた。

「成る程なく基本うちらは、ニコつちがセンターやから悩まへんけど確かに一度は通る難題やなく」

「何か良いアイデアはないかにや〜?」

「そうやなく」

希は空を見上げて何かを考える、するとパツ!と素早く閃いた。

「分かったよ!アイデアがあるんやけど、先に聞きたい事があるんよ」

「何ですか?」

「えりち見なかった?」

「生徒会長ですか?」

~~~~~\*~~~~~

西木野総合病院

「暇だなく」

穂乃果達が帰ってからはリハビリも順調にこなして病室に戻ったは良いもののやる事がなさ過ぎて暇すぎる。

「テレビでも見てようかな…」

売店で買ったビデオ利用券を差し込み、ビデオを見ているとドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ〜」

「失礼します、怪我の容態はどう?」

「お陰様で大丈夫で…ってお前は…」

見たことがある顔だった、金髪の音ノ木坂の3年生を表すリボンをしている、これは間違いなく生徒会長の綾瀬絵里だ。

「そんなに睨まなくても良いでしょ?元に貴方が犯人だったんだも

の」

「それはそうだが…アイツの話を聞いてら納得する部分もあった。確かに殺人未遂になるが…過去の俺の力不足で始まった事だから仕方がない事だと思う。だから二度とこの様な事を起こさない為に俺はアイツらを日本1に導きたい！言っておくが、俺らは貴方に邪魔されようが…止まらないぞ！」

力強く言ってみたが、絵里は『何を言っているの?』と言わんばかりの顔をしている相変わらず腹立つ。

「何を言っているのかしら? そういえば本題を言い忘れていたわ、さっきの事で前に言った私の予言が見事的中したでしょ?」

「まあ…本当に起きたんだから信じるしかないだろ?」

「何で私知ってたか教えてあげましょうか?」

「聞こう…」

「私も、もう一人の貴方と同様未来からきた。」

「え?」

太一は絵里の一言で唾然した。

C o n t i n u e   t o   n e x t   t i m e